

令和5年度

近畿ESDコンソーシアム活動実施報告書



2024年3月

近畿ESDコンソーシアム
奈良教育大学 ESD・SDGsセンター

はじめに



奈良教育大学にESD・SDGsセンターが開設されて2年が経ちました。センター開設以前から、近畿ESDコンソーシアムの皆様とともにESDの推進を続けて来られたことに対し、あらためて感謝申し上げます。隔週で開かれるワーキンググループのミーティングは、どなたもお忙しいにもかかわらず積極的に参加され、とても意義あるものとなっています。それも、持続可能な社会をなんとかして実現させなければならないという強い使命感の表れだと、大変心強く思います。

昨年の3月、私自身初めて、ESDティーチャープログラムの認証式に、菊池市、大牟田市、福岡市に伺いました。いつも感じることは、ESDに携わる皆様の集まりは、学会であっても研究会であっても、皆とても明るく前向きで、議論も建設的に行われていることです。認証式も、夜のお食事の時も、私はそれを感じ、「よし、明日も頑張ろう」という気持ちになりました。同じ意志を持つ人たちが、1つの同じ大きな目標を目指して集まり、語り合い、学び合って、またそれぞれの場所に戻って努力する…。コンソーシアムの意義はまさにそこにあり、とりわけESDの推進には必要なことだと思います。

さて、今年度もまた、「近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会」が盛大に行われました(1月6日・7日)。初日の午前中には、私が楽しみにしている「ESD子どもフォーラム」が行われ、遠くは福岡市立玄界小学校、近畿からは大津市立仰木の里小学校と橋本市立城山小学校、そして奈良からは奈良女子高等学校の皆さんが、フレッシュで元気いっぱいな取組を披露してくれました。「実践交流会」では、いつもにも増して積極的な交流が生まれておりました。

「ESD講演会」にお招きした澁澤寿一先生からは、「持続可能な未来のために -人と自然との共生とは-」というテーマで、きわめて明快に、このことに向けて取り組む課題をご教示いただきました。この会に参加された方々は、どなたもESDに立ち向かう勇気が与えられたことでしょう。

今年は、能登半島地震という悲しいできごとで始まりました。失われた多くの尊い人命、財産、くらし、文化、伝統、美しい風景…。いつ、どこで、大地震や津波に見舞われるかわからない今、持続可能な社会を創造していくために、防災や減災のための教育はもちろん、すべての人々の意識と行動に変革をもたらすESDは、もはや「待ったなし」です。近畿ESDコンソーシアムは、これからも一丸となって全国、そして世界をも牽引していくよう、ともに頑張りましょう！

令和6年3月

奈良教育大学 学長
近畿ESDコンソーシアム 会長
宮下 俊也

目 次

はじめに	1
E S Dティーチャープログラム	
・ ESD ティーチャー認証制度について	3
・ ESD ティーチャープログラム（現職教員向け）開催要項	8
・ ESD ティーチャープログラム活動報告	10
・ ESD プログラム（ESD ティーチャー）履修の手引き	23
・ ESD プログラム（ESD ティーチャー）履修の手引き（教職大学院生対象）	25
・ ESD ティーチャー・フォローアップ研修会 開催要項	27
・ ESD ティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告（全5回）	28
・ ESD ティーチャープログラム（屋久島会場）・フォローアップ研修会 開催要項	44
・ ESD ティーチャープログラム（山形会場）・フォローアップ研修会 開催要項	45
奈良 E S D連続セミナー（全11回）	46
「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー（全5回）	99
森と水の源流館授業づくりセミナー（全5回）	111
春日山原始林・奈良公園フィールドワーク（全9回）	125
令和5年度近畿 E S Dコンソーシアム成果発表会・実践交流会	144
学生活動	146
おわりに	183
近畿 ESD コンソーシアム規約	184

奈良教育大学 ESD ティーチャー認証制度について

1. ESD を適切に計画し指導できる教員に求められる資質・能力

(1) 教師としての基盤的力量

学級経営力、生徒指導力、授業力、そして子ども理解力など、全ての学校教員に求められる資質・能力が基盤的力量として必要である。

(2) SDGs に関心を持ち、様々な書物から学んだり、講演会に参加したりするなど、能動的に SDGs への理解を深めようとする態度と、SDGs に関する課題を自分事とし、自らが持続可能な社会の担い手として、ライフスタイルを見直し、SDGs の達成に積極的に取り組もうとする態度が必要である。

(3) 「当たり前だ」と思っていることを時間的、また空間的に捉えて代替案を考え（クリティカル・シンキング）たり、地域の課題を SDGs の 17 の目標と関連付けて捉え、解決策を多面的・総合的に考え（システムズ・シンキング）たりする、探究的な思考力と行動力が求められる。

(4) ESD には教科書がない。総合的な学習の時間に地域の課題を学習課題として探究型の単元計画を組織し、地域人材や社会教育施設・専門家などと連携しながら、授業実践を行う力が求められる。また、日々の授業実践を対話的で深い学びを促すような授業力が求められる。

(5) ESD は社会づくりに関する価値観と行動の変革を促す教育活動である。ESD で育てたい価値観を育てるためには、系統的で継続的なカリキュラムが必要となる。校内はもちろん異なる校種の教員と連携して、系統的なカリキュラムを創造し、不断の見直し・改善を図ろうとする態度や、学校間交流や学習成果の地域への発信などにより、学びがいのある質の高い ESD 実践を志向する態度も求められる。



2. ESD ティーチャープログラムの概要

(1) ESD ティーチャープログラムの基本型

ESD ティーチャープログラムは、上記の資質・能力を養う目的で、次の 5 回の研修から構成されている。

第 1 回：SDGs の理解促進

SDGs の達成が求められる世界の状況を経済・社会・環境の側面から捉え、理解を深める。

第 2 回：ESD の学習理論の理解

ESD で育てたい価値観、視点、資質能力を紹介するとともに、持続可能な社会づくりに有用なソマティック・マーカーを育てる体験的な学習について理解を深める。

第3回：優良実践事例の分析と単元構想案の作成

ESDの優良実践事例をESDの観点から分析し、授業づくりのポイントを理解したり、改善ポイントを見出したりすることで、学習指導案の読み方や作成方法について研修し、本学が開発した様式にしたがって単元構想案を作成する。

第4回：単元構想案の相互検討とESD学習指導案の作成

単元構想案の相互検討を踏まえ、ESDやESD学習指導案についての理解を深める。

※相互検討で修正した単元構想案を用いて、2か月程度かけてESD学習指導案を作成したうえで、第5回に参加する。

第5回：ESD学習指導案の相互検討会

各自が作成したESD学習指導案を発表し、全員で検討する。相互に検討することで、ESDの授業づくりや学習指導案作成のスキルアップを図る。

全ての研修会に参加し、ESD学習指導案を1月末までに大学に提出する。奈良教育大学では提出されたESD学習指導案を運営委員会で審議したうえで、本学の教授会に提出し、承認を得ることができれば、学長よりESDティーチャーの認定証を授与する。

(2) ESDティーチャープログラムの発展型

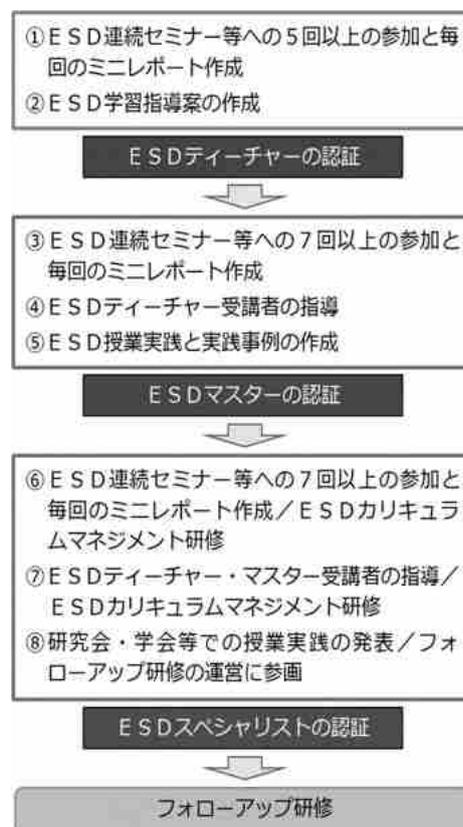
現職教員を対象としたESDティーチャープログラムにおいては、実践意欲の向上と、ESDに関する理解の深化を目的に、マスターコース、スペシャリストコースを用意している。

3. ESDティーチャーについて

奈良だけでなく、ESDティーチャープログラムを全国で展開することでESDティーチャーの拡大を図ると共に、ESDティーチャーの資質・能力、及び実践意欲の向上を目的に、フォローアップ研修としてESDティーチャーを対象としたオンライン研修を2ヶ月に1回実施している。

令和5年度までのESDティーチャー等の認定者数は以下の通りである。(名)

	現職教員			学生
	スペシャリスト	マスター	ティーチャー	ティーチャー
平成28年度	0	0	21	3
平成29年度	0	14	13	4
平成30年度	5	2	19	11
令和元年度	4	1	22	5
令和2年度	0	2	42	8
令和3年度	1	16	96	9
令和4年度	8	19	124	14
令和5年度	10	24	138	9
合計	28	78	475	63



令和5年度 ESD ティーチャープログラム

認定者は次の通りである。

(1) 現職教員の ESD ティーチャー等

① ESD スペシャリスト (10名)

1	奈良教育大学附属中学校	有馬 一彦
2	奈良教育大学附属中学校	長友 紀子
3	奈良教育大学附属幼稚園	河合 理沙
4	奈良教育大学附属幼稚園	白石 真季
5	奈良県立青翔中学校・高等学校	谷垣 徹

6	平群町立平群中学校	井阪 愛子
7	南風原町立南風原小学校	屋良 真弓
8	福岡市立香椎小学校	大島 英樹
9	福岡市立西花畑小学校	椎葉 拓朗
10	山辺町立山辺小学校	太田 馨

② ESD マスター (24名)

1	奈良教育大学附属中学校	丹後 七重
2	奈良教育大学附属小学校	平野 江美
3	奈良教育大学附属小学校	池添 梨花
4	奈良教育大学附属小学校	加川 陽子
5	奈良教育大学附属幼稚園	長谷川かおり
6	奈良教育大学附属幼稚園	清水 智佳子
7	生駒市立生駒東小学校	竹田 光陽
8	奈良市立三碓小学校	藤岡 晃宏
9	那覇市立松島中学校	高良 直人
10	福岡市立小呂小学校・中学校	枝広 隆志
11	福岡市立小呂小学校	井上 歩美
12	福岡市立飯原小学校	河野 陽一

13	松山市立久枝小学校	三浦 智子
14	愛媛大学教育学部附属小学校	吉岡 舞
15	松山市立日浦小学校	西河 珠美
16	宇和島市立遊子小学校	西原 睦美
17	松山市立たちばな小学校	吉見 香奈子
18	菊池市立七城中学校	西田 拓人
19	屋久島町立安房小学校	窪田 あずさ
20	屋久島町立八幡小学校	橋口 和真
21	屋久島町立神山小学校	濱崎 昇平
22	屋久島町立神山小学校	坂元 達哉
23	屋久島町立宮浦小学校	稲留 愛
24	屋久島町立永田小学校	吉富 祐子

③ ESD ティーチャー (138名)

1	奈良教育大学附属中学校	浅井 心哉
2	奈良教育大学附属中学校	坂本 交司
3	奈良教育大学附属中学校	堀内 千幸
4	奈良教育大学附属中学校	堀川 孝子
5	奈良教育大学附属小学校	小谷 隆男
6	奈良教育大学附属小学校	小野 はぎ
7	奈良教育大学附属小学校	眞田 理世
8	奈良教育大学附属小学校	中尾 鈴
9	奈良教育大学附属幼稚園	百村 美代子
10	奈良市立伏見小学校	川邊 甲余子
11	奈良市立朱雀小学校	原田 龍ノ介
12	奈良市立三碓小学校	森岡 美咲
13	山形県立高畠高等学校	土屋 岳
14	山形市立第三中学校	三上 凜矩

15	福岡市立内浜小学校	重枝 光子
16	福岡市立内浜小学校	床田 知子
17	福岡市立内浜小学校	野口 瑞生
18	福岡市立小呂中学校	花田 一志
19	福岡市立小呂小学校	松田 博光
20	比叡山中学校	伊藤 由季
21	大津市立仰木の里小学校	竹川 宏枝
22	京都教育大学附属幼稚園	北山 千嘉子
23	草津市立松原中学校	辻 大吾
24	草津市立松原中学校	山本 寛之
25	大津市立仰木の里東小学校	橋詰 幸喜
26	大津市立青山中学校	松田 綾子
27	大津市立仰木の里小学校	山岸 憲明
28	大津市立仰木の里小学校	山崎 佳那子

29	白浜町立西富田小学校	大浦 侑唄
30	すさみ町立周参見中学校	谷口 祐也
31	白浜町立白浜中学校	西田 拓大
32	白浜町立白浜中学校	中村 僚太
33	白浜町立白浜中学校	尾藤 伸次朗
34	白浜町立白浜中学校	平野 俊
35	白浜町立日置小学校	西田 生
36	白浜町立富田小学校	日根 智晃
37	屋久島町教育委員会	下之藪 崇
38	屋久島町立永田小学校	臼口 淳子
39	屋久島町立神山小学校	神谷 愛奈
40	屋久島町 ESD グローバルアドバイザー	小澤 まゆか
41	屋久島町立神山小学校	榮 修一郎
42	屋久島町立神山小学校	澤津 奈穂子
43	屋久島町立小瀬田小学校	高橋 百合香
44	屋久島町立神山小学校	早坂 天地
45	屋久島町立神山小学校	森川 雄介
46	屋久島町立神山小学校	山口 和代
47	長浜市立びわ南小学校	伊賀並 由貴
48	長浜市立高月小学校	今井 伸哉
49	長浜市立びわ中学校	上田 朋幸
50	長浜市立湖北中学校	川崎 亘
51	長浜市立西浅井中学校	小西 沙也加
52	長浜市立余呉小中学校	齊藤 真二
53	長浜市立北中学校	田坂 一稀
54	長浜市立速水小学校	田中 絃太郎
55	長浜市立湯田小学校	田中 紀裕
56	長浜市立南中学校	西川 悠麻
57	長浜市立長浜北小学校	西村 智之
58	長浜市立長浜南小学校	野村 佳杜栄
59	長浜市立木之本小学校	藤井 慶紀
60	長浜市立塩津小学校	弓削 直斗
61	長浜市立長浜小学校	米田 崇
62	松山市立旭中学校	荒井 慎也
63	松山市立五明小学校	ヴェラタン 孝子
64	松山市立中島小学校	住田 新太郎
65	松山市立北中学校	中原 直子
66	松山市立内宮中学校	野村 臣哉
67	新居浜市立中萩中学校	星加 大輔

68	松山市立東中学校	眞柴 さなえ
69	菊池市立菊之池小学校	一安 尊正
70	熊本県立菊池農業高等学校	岩坂 大輔
71	菊池市立旭志中学校	植嶋 祐二郎
72	菊池市立菊池南中学校	上野 元気
73	菊池市立泗水西小学校	大溝 謙二郎
74	菊池市立泗水東小学校	川口 幸一郎
75	菊池市立七城小学校	作野 華奈子
76	菊池市立泗水小学校	澤村 舞花
77	菊池市立菊池北小学校	東 由佳子
78	熊本県立菊池高等学校	田上 剛範
79	菊池市立泗水中学校	中尾 千恵理
80	菊池市立戸崎小学校	藤吉 由美子
81	菊池市立旭志小学校	皆川 俊輔
82	菊池市立菊池北中学校	宮崎 貴臣
83	菊池市立花房小学校	村上 晴菜
84	菊池市立隈府小学校	渡邊 美和
85	熊本市立天明中学校	楳木 敏之
86	熊本市立天明中学校	八郷 正一
87	熊本市立天明中学校	永瀬 順子
88	熊本市立天明中学校	前田 進
89	熊本市立天明中学校	林 英一
90	熊本市立天明中学校	大村 祥代
91	熊本市立天明中学校	永尾 展伸
92	熊本市立天明中学校	森崎 史郎
93	熊本市立天明中学校	米田 衣里
94	熊本市立天明中学校	堀尾 綾子
95	熊本市立天明中学校	川上 治久
96	熊本市立天明中学校	野田 壮一
97	熊本市立天明中学校	工藤 龍之介
98	熊本市立天明中学校	古本 大周
99	熊本市立天明中学校	桃原 研斗
100	熊本市立天明中学校	奥田 早希
101	生駒市立生駒小学校	米田 智香子
102	生駒市立生駒小学校	井上 佳守美
103	生駒市立生駒小学校	佐藤 有紗
104	生駒市立生駒小学校	松田 桃佳
105	生駒市立生駒小学校	中垣 義之
106	生駒市立生駒小学校	岡田 愛

107	生駒市立生駒小学校	中北 晶太	123	生駒市立生駒小学校	上村 浩之
108	生駒市立生駒小学校	若林 亜弥	124	生駒市立生駒小学校	石黒 真衣
109	生駒市立生駒小学校	吉崎 日奈子	125	生駒市立生駒小学校	和泉 愛里
110	生駒市立生駒小学校	切石 哲生	126	生駒市立生駒小学校	泉谷 利恵子
111	生駒市立生駒小学校	井上 園子	127	生駒市立生駒小学校	白土 俊彦
112	生駒市立生駒小学校	金田 充晃	128	生駒市立生駒小学校	平矢 幸子
113	生駒市立生駒小学校	田中 宏樹	129	生駒市立生駒小学校	安田 有輝
114	生駒市立生駒小学校	永島 健太	130	生駒市立生駒小学校	河合 基弘
115	生駒市立生駒小学校	京藤 真直	131	生駒市立生駒小学校	新井 賢太郎
116	生駒市立生駒小学校	辻 琳太郎	132	生駒市立生駒小学校	福林 倭吹
117	生駒市立生駒小学校	奥原 夕貴	133	生駒市立生駒小学校	池之内ひろみ
118	生駒市立生駒小学校	澤田 健	134	生駒市立生駒小学校	尾下 智美
119	生駒市立生駒小学校	大槻 桂子	135	生駒市立生駒小学校	藤井 佳子
120	生駒市立生駒小学校	川口 洋介	136	奈良市立若草中学校	栗山 泰幸
121	生駒市立生駒小学校	橘 怜威	137	奈良県立奈良高等学校	吉田 悠亮
122	生駒市立生駒小学校	大仲 洋也	138	奈良教育大学大学院教育学研究科修士課程 伝統文化教育・国際理解教育専攻	井上 寿美

(2) 院生・学生の ESD ティーチャー (9名)

1	大学院教育学研究科専門職学位課程教職開発専攻 (学校教育マネジメントコース ESD マネジメント領域)	井上 岳海
2	教育学部学校教育教員養成課程音楽教育専修	後川 りの
3	教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育専修	長嶺 有希
4	教育学部学校教育教員養成課程社会科教育専修	東 晃太郎
5	教育学部学校教育教員養成課程社会科教育専修	山平 楓
6	教育学部学校教育教員養成課程家庭科教育専修	上部 遥加
7	教育学部学校教育教員養成課程家庭科教育専修	中畷 千智
8	教育学部学校教育教員養成課程英語教育専修	苗代 昇妥
9	教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育専修	志原 那歩

令和5（2023）年度 ESD ティーチャープログラム（現職教員向け）開催要項

1. 目的

持続可能な開発目標の達成及び学習指導要領の確実な実施に向けて、持続可能な社会の創り手の育成は喫緊の課題となっている。本学では2016年度より教員志望の学生及び現職教員を対象に、ESDを指導する教員に求められる資質・能力の育成を目的としたESD ティーチャープログラムを展開してきた。

2022年度末の段階で400名に及ぶ認定者に達し、全国各地で意欲的にESDの実践に取り組んでもらっている。このように、ESDを意欲的に推進していくことのできる教員の輪を全国各地に広げるため、今年度も以下の通りESD ティーチャープログラムを実施する。

2. 運営担当者

及川・阪本・中澤・大西：現職教員等の経験を有する大学教員

3. 研修内容

- (1) 持続可能な開発目標（SDGs）の内容理解 【オンライン】
- (2) ESDの学習理論とESD 単元構想案の作成 【オンライン】
- (3) 優良実践事例のESD分析
- (4) ESD 単元構想案の相互検討とESD 学習指導案・実践報告の作成
- (5) ESD 学習指導案・実践報告の相互検討
- (6) ESD カリキュラムマネジメント【マスター・スペシャリスト】
- (7) ESD カリキュラムマネジメント案の作成・相互検討【マスター・スペシャリスト】

※（1）（2）について、当日参加できない受講者は後日オンデマンド受講とする。

4. ESD ティーチャープログラム（現職教員向け）について

(1) ESD ティーチャーコース

- ①ESD 連続セミナーへの5回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
- ②ESD 授業構想案とESD 学習指導案の作成、1月末日までに提出

(2) ESD マスターコース

- ①ESD 連続セミナーへの7回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
- ②ESD 授業構想案とESD 学習指導案の作成、そして授業実践をふまえた実践事例を作成（6P程度）し、1月末日までに提出（考察をしっかりと記載すること）。
- ③ESD ティーチャー研修中の現職教員および学生の指導案作成指導

④研修（6・7）への参加

(4) ESD スペシャリストコース

- ①ESD 連続セミナーへの7回以上の参加と毎回のミニレポートの作成

②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、そして授業実践をふまえた実践事例を作成（6P 程度）し、1 月末までに提出（考察をしっかりと記載すること）。

③ESD ティーチャー・マスター研修中の現職教員および学生の指導案作成指導

④学会や研究大会での実践事例の発表か、ESD 研修会の開催と報告書の提出

④研修（6・7）への参加

※3 月末に学長より ESD ティーチャー、ESD マスター、ESD スペシャリストの認定証を授与。

※作成された学習指導案や実践事例は近畿 ESD コンソーシアムの HP に掲載。

※1 月に開催する近畿 ESD コンソーシアム実践交流会での発表を依頼する場合がある。

5. 開催予定

【研修（1）持続可能な開発目標（SDGs）の内容理解 【オンライン】】

6 月 3 日（土）14 時～16 時 講師：及川幸彦

【研修（2）ESD の学習理論と ESD 単元構想案の作成 【オンライン】】

6 月 10 日（土）14 時～16 時 講師：中澤静男、大西浩明

- (1) 長浜市 8 月 8 日（火）③④、10 月 27 日（金）⑤
- (2) 菊池市 8 月 1 日（火）③④、12 月 15 日（金）⑤
- (3) 松山市 7 月 22 日（土）③④、11 月 18 日（土）⑤
- (4) 大津市 8 月 25 日（金）③④、11 月 11 日（土）⑤
- (5) 屋久島町 8 月 22 日（火）③④、11 月 25 日（土）⑤
- (6) 福岡市 8 月 7 日（月）③④、10 月 29 日（日）⑤
- (7) 白浜町 8 月 9 日（水）③④、10 月 21 日（土）⑤
- (8) 附属中学校 8 月 28 日（月）③④、12 月 22 日（金）⑤
- (9) 附属小学校 7 月 25 日（火）③、7 月 27 日（木）④、12 月 22 日（金）⑤
- (10) 附属幼稚園 7 月 28 日（金）③④、12 月 26 日（火）⑤
- (11) 生駒市立生駒小学校 7 月 24 日（月）③、7 月 26 日（水）④、8 月 30 日（水）⑤
- (12) 熊本市立天明中学校 7 月 31 日（月）③④、12 月 14 日（木）⑤

研修（6）（7）については未定。

2023年度 ESDティーチャープログラム活動報告

研修①「SDGsの理解促進」

日時：2023年6月3日（土）14時～16時

方法：Zoomによるオンライン

参加者：64名

講師：及川幸彦



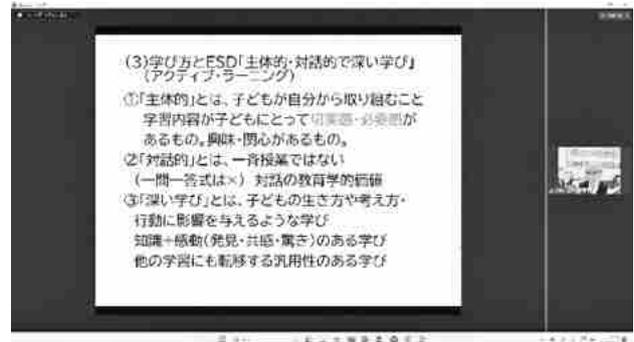
研修②「ESDの学習理論・ESDの授業づくり」

日時：2023年6月10日（土）14時～16時

方法：Zoomによるオンライン

参加者：47名

講師：中澤静男、大西浩明



天明中学校会場(研修①)「SDGsの理解促進」(オンデマンド視聴)

日時：2023年6月7日（水）14時30分～16時30分

会場：熊本市立天明中学校

参加者：16名

天明中学校会場(研修②)「ESDの学習理論・ESDの授業づくり」(オンデマンド視聴)

日時：2023年6月14日（水）14時30分～16時30分

会場：熊本市立天明中学校

参加者：16名

生駒小学校会場(研修①②)「SDGsの理解促進」「ESDの学習理論・ESDの授業づくり」 (オンデマンド視聴)

日時：2023年6月28日（水）13時30分～17時

会場：生駒市立生駒小学校

参加者：38名



松山会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年7月22日(水)10時～16時

会場：愛媛大学教育学部2号館1階・教職ストリート：高度化ゾーン

参加者：西河珠美(松山市立日浦小学校)、西原睦美(宇和島市立明倫小学校)、
三浦智子(松山市立久枝小学校)、吉岡舞(愛媛大学教育学部附属小学校)、
荒井慎也(松山市立旭中学校)、ヴァラタン孝子(松山市立五明小学校)、
住田新太郎(松山市立中島小学校)、中原直子(松山市立北中学校)、
野村臣哉(松山市立内宮中学校)、星加大輔(新居浜市立中萩中学校)、
眞柴さなえ(松山市立東中学校) 計11名(欠席1名)

講師：新宮済(奈良女子高等学校)、中澤静男、加藤久雄、大西浩明



生駒小学校会場(研修③) 「優良実践事例のESD分析」

日時：2023年7月24日(月)13時～15時

会場：生駒市立生駒小学校

参加者：34名

講師：中村友弥(奈良市立朱雀小学校)、中澤静男、大西浩明



生駒小学校会場(研修④) 「単元構想案の相互検討」

日時：2023年7月26日(水)13時～15時30分

会場：生駒市立生駒小学校

参加者：31名(3名欠席)

講師：圓山裕史(奈良市立伏見小学校)、阿彌茉央(奈良市立登美ヶ丘小学校)
中澤静男、及川幸彦、大西浩明



附属小学校会場(研修③) 「優良実践事例のESD分析」

日時：2023年7月27日(木) 9時30分～11時30分

会場：附属小学校

参加者：入澤佳菜、池添梨花、加川陽子、平野江美、眞田理世、中尾鈴 計6名(2名欠席)

講師：入澤佳菜(附属小学校)、中澤静男、大西浩明



「この思いを未来へ」
 作詞 奈良教育大学付属小学校2017年度17クラス/2019年度18クラス 作曲 今正典

平和って何だろう 平和って何だろう それは遠い夢じゃないはず みんなが学校に行けること 友だちと遊ぶこと 家族と一緒にいられること おなかいっぱい食べられること 話しかえる 笑い合える 助け合える わかり合える それは小さいけれど確かな平和	平和にどう進む 平和にどう進む まずは世界中が平和を願うこと 被害者の声を知りてみよう 深く知ろう 世界のできごとに目を向けよう 小さな行動からはじめよう 一人ひとりが「思い」を持って 伝え合おう 広めていこう 自分が平和をつくる世界へ未来へ	この大空に 広がれ平和 実えていこう この世界 小さな平和 大切に 一人ひとりが未来をつくらう この大空に 広がれ平和 実えていこう この世界 小さな平和 大切に 一人ひとりが未来をつくらう
---	--	--

平和ってどうつくる
 平和ってどうつくる
 それは難しいことじゃないはず
 平和な世界をえがいてみよう
 考えよう
 自由に意見を言い合おう
 意見をしっかりと聞き合おう
 一人ひとりを 大切にしよう
 思いやろう 行動しよう
 小さな平和から大きな平和へ

菊池会場(研修①②) 「SDGsの理解促進」「ESDの学習理論・ESDの授業づくり」(オンデマンド視聴)

日時：2023年7月27日(木) 10時～16時

会場：菊池市役所305会議室

参加者：西田拡人(七城中学校)、一安尊正(菊之池小学校)、岩坂大輔(菊池農業高等学校)、
 植嶋祐二郎(旭志中学校)、植野元気(菊池南中学校)、大溝謙二郎(泗水西小学校)、
 川口幸一郎(泗水東小学校)、作野華奈子(七城小学校)、澤村舞花(泗水小学校)、
 東由佳子(菊池北小学校)、田上剛範(菊池高等学校)、中尾千恵理(泗水中学校)、
 藤吉由美子(戸崎小学校)、皆川俊輔(旭志小学校)、宮崎貴臣(菊池北中学校)、
 村上晴菜(花房小学校)、村上ゆき(七城中学校)、渡邊美和(隈府小学校) 計18名



附属幼稚園会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」

日時：2023年7月28日(木) 13時～17時

会場：附属幼稚園

参加者：河合理沙、白石真季、清水智佳子、長谷川かおり、丸尾晶子、百村美代子 計6名

講師：河合理沙(附属幼稚園)、阪本さゆり(奈良保育学院)、中澤静男、大西浩明



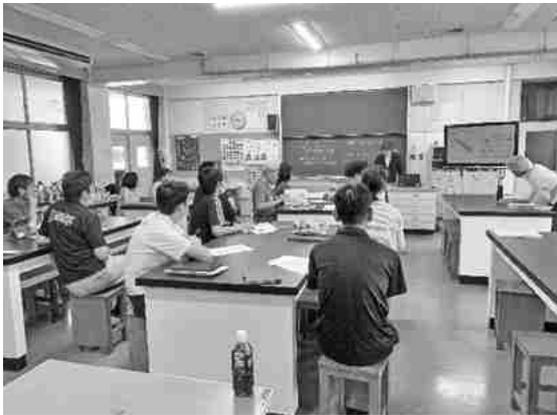
天明中学校会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年7月31日(月) 10時～16時

会場：熊本市立天明中学校

参加者：15名(1名欠席)

講師：西田拡人(菊池市立七城中学校)、石村秀登(熊本県立大学)、安田昌則、中澤静男、大西浩明



菊池会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月1日(火) 10時～16時30分

会場：菊池市中央公民館

参加者：西田拡人(七城中学校)、一安尊正(菊之池小学校)、岩坂大輔(菊池農業高等学校)、植嶋祐二郎(旭志中学校)、植野元気(菊池南中学校)、大溝謙二郎(泗水西小学校)、川口幸一郎(泗水東小学校)、作野華奈子(七城小学校)、澤村舞花(泗水小学校)、東由佳子(菊池北小学校)、田上剛範(菊池高等学校)、中尾千恵理(泗水中学校)、藤吉由美子(戸崎小学校)、皆川俊輔(旭志小学校)、宮崎貴臣(菊池北中学校)、村上晴菜(花房小学校)、村上ゆき(七城中学校)、渡邊美和(隈府小学校) 計18名

講師：遠入哲司(福岡市立田隈小学校)、石村秀登(熊本県立大学)、安田昌則、中澤静男、大西浩明



福岡会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」 「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月7日(月) 10時～16時

会場：福岡市立中央市民センター視聴覚室

参加者：大島英樹(香椎小学校)、椎葉拓朗(西花畑小学校)、橋本智美(三宅小学校)。

井上歩美(小呂小学校)、枝広隆志(小呂小学校・中学校)、河野陽一(飯原小学校)、

重枝光子(内浜小学校)、床田知子(内浜小学校)、野口瑞生(内浜小学校)、

花田一志(小呂中学校)、松田博光(小呂小学校) 計11名(1名欠席)

講師：椎葉拓朗(西花畑小学校)、遠入哲司(福岡市立田隈小学校)、鬼塚正博(福岡市立玄界小学校)、
安田昌則、大西浩明



長浜会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」 「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月8日(火) 10時～16時

会場：長浜市教育センター浅井支所

参加者：今井伸哉(高月小学校)、上田朋幸(びわ中学校)、川崎亘(湖北中学校)、

小西沙也加(西浅井中学校)、齊藤真二(余呉小中学校)、田坂一稀(長浜北中学校)、

田中紀裕(湯田小学校)、西川悠麻(長浜南中学校)、西村智之(長浜北小学校)、

野村佳杜栄(長浜南小学校)、藤井慶紀(木之本小学校)、弓削直斗(塩津小学校)、

米田崇(長浜小学校)、伊賀並由貴(びわ南小学校)、野村由紀子(長浜市教育センター)

計15名(1名欠席)

講師：中村友弥(奈良市立朱雀小学校)、中澤静男、大西浩明



白浜会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月9日(水)10時～16時

会場：白浜町立白浜中学校

参加者：大浦侑唄(白浜町立西富田小学校)、谷口祐也(すさみ町立周参見中学校)、
中村僚太(白浜中学校)、尾藤伸次朗(白浜中学校)、平野俊(白浜中学校)、
西田拓大(白浜中学校)、日根智晃(白浜町立日置小学校)、
廣畑智大(白浜町立富田小学校)、西田生(白浜町立日置小学校)、
武分渉、豊田恒介、中尾建子、真柴 唱子(アドベンチャーワールド)、
計13名(3名欠席)

講師：中澤哲也(大和郡山市立片桐西小学校)、加藤久雄、大西浩明



屋久島会場(研修③④) 「優良実践事例のESD分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月22日(火)10時～16時

会場：屋久島町役場やくしまホール

参加者：稲留愛(宮浦小学校)、橋口和真(八幡小学校)、濱崎昇平(神山小学校)、
吉富祐子(永田小学校)、白口淳子(永田小学校)、神谷愛奈(神山小学校)、
小澤まゆか(ESDグローバルアドバイザー)、榮修一郎(神山小学校)、
澤津奈穂子(神山小学校)、高橋百合香(小瀬田小学校)、早坂天地(神山小学校)、
森川雄介(神山小学校)、山口和代(神山小学校) 下之蘭崇(屋久島町教育委員会)
計14名(3名欠席)

講師：新宮済(奈良女子高等学校)、中澤静男、及川幸彦、大西浩明



大津会場(研修③④) 「優良実践事例の ESD 分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月25日(金)10時～16時

会場：大津市立仰木の里小学校

参加者：伊藤由季(比叡山中学校)、國友郁弥(仰木の里小学校)、竹川宏枝(仰木の里小学校)、
北山千嘉子(京都教育大学附属幼稚園)、橋詰幸喜(仰木の里東小学校)、
松田綾子(青山中学校)、山岸憲明(仰木の里小学校)、山崎佳那子(仰木の里小学校)、
辻大吾(草津市立松原中学校) 計9名(2名欠席)

講師：藏前拓也(王寺町立王寺北義務教育学校)、阪本さゆり(奈良保育学院)、中澤静男、大西浩明



生駒小学校会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年8月30日(水)13時30分～16時

会場：生駒市立生駒小学校

参加者：34名

講師：中澤静男、及川幸彦、大西浩明



附属中学校会場(研修③④) 「優良実践事例の ESD 分析」「単元構想案の相互検討」

日時：2023年8月31日(木) 10時～16時

会場：附属中学校

参加者：有馬一彦、長友紀子、丹後七重、浅井心哉、辻本卓也、堀内千幸、牧原孝弥、若森達哉、
山本寛之(草津市立松原中学校) 計10名(2名欠席)

講師：長友紀子、吉田寛、山本浩大(附属中学校)
中澤静男、大西浩明



附属小学校会場(研修④) 「単元構想案の相互検討」

日時：2023年9月1日(金) 16時～18時

会場：附属小学校

参加者：池添梨花、加川陽子、平野江美、眞田理世、中尾鈴、小野はぎ 計6名(2名欠席)

講師：中澤静男、大西浩明



スペシャリスト・マスター研修(研修⑥) 「ESDカリキュラムマネジメントについて」

日時：2023年9月12日(火) 19時～21時

方法：Zoomによるオンライン

参加者：22名

講師：及川幸彦



白浜会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年10月21日(土)13時～16時

会場：白浜町立白浜中学校

参加者：大浦侑唄(白浜町立西富田小学校)、谷口祐也(すさみ町立周参見中学校)、
中村僚太(白浜中学校)、尾藤伸次朗(白浜中学校)、平野俊(白浜中学校)、
西田拓大(白浜中学校)、日根智晃(白浜町立日置小学校)、
武分渉、豊田恒介、中尾建子(アドベンチャーワールド)、
計10名(4名欠席)

講師：中澤哲也(大和郡山市立片桐西小学校)、加藤久雄、大西浩明



長浜会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年10月27日(金)13時～16時

会場：長浜市教育センター浅井支所

参加者：今井伸哉(高月小学校)、上田朋幸(びわ中学校)、川崎亘(湖北中学校)、
小西沙也加(西浅井中学校)、齊藤真二(余呉小中学校)、田中紀裕(湯田小学校)、
西川悠麻(長浜南中学校)、西村智之(長浜北小学校)、野村佳杜栄(長浜南小学校)、
藤井慶紀(木之本小学校)、米田崇(長浜小学校)、伊賀並由貴(びわ南小学校)、
計10名(5名欠席)

講師：圓山裕史(奈良市立伏見小学校)、中澤静男、大西浩明



福岡会場(研修⑤⑦) 「学習指導案の相互検討」「カリキュラムマネジメント案の相互検討」

日時：2023年10月29日(月)10時～16時

会場：福岡市立早良市民センター視聴覚室

参加者：大島英樹(香椎小学校)、椎葉拓朗(西花畑小学校)、井上歩美(小呂小学校)、

枝広隆志（小呂小学校・中学校）、河野陽一（飯原小学校）、重枝光子（内浜小学校）、
床田知子（内浜小学校）、野口瑞生（内浜小学校）、花田一志（小呂中学校）、
松田博光（小呂小学校） 計10名（1名欠席）

講師：遠入哲司（福岡市立田隈小学校）、鬼塚正博（福岡市立玄界小学校）、安田昌則、大西浩明



大津会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年11月11日（土）10時～12時

会場：大津市立仰木の里小学校

参加者：伊藤由季（比叡山中学校）、竹川宏枝（仰木の里小学校）、橋詰幸喜（仰木の里東小学校）、
北山千嘉子（京都教育大学附属幼稚園）、松田綾子（青山中学校）、山岸憲明（仰木の里小学校）、
山崎佳那子（仰木の里小学校）、辻大吾（草津市立松原中学校） 計8名（1名欠席）

講師：阪本さゆり（奈良保育学院）、中澤静男、加藤久雄、大西浩明



松山会場(研修⑤⑦) 「学習指導案の相互検討」「カリキュラムマネジメント案の相互検討」

日時：2023年11月18日（土）9時30分～16時

会場：愛媛大学 E.U.Regional Commons（ひめテラス）1階地域交流スクエア

参加者：西河珠美（松山市立日浦小学校）、西原睦美（宇和島市立明倫小学校）、
三浦智子（松山市立久枝小学校）、吉岡舞（愛媛大学教育学部附属小学校）、
荒井慎也（松山市立旭中学校）、ヴァラタン孝子（松山市立五明小学校）、
中原直子（松山市立北中学校）、野村臣哉（松山市立内宮中学校）、
星加大輔（新居浜市立中萩中学校）、眞柴さなえ（松山市立東中学校）、
吉見香奈子（松山市立たちばな小学校） 計11名（1名欠席）

講師：新宮済（奈良女子高等学校）、河野晋也（大分大学）、中澤静男、大西浩明



屋久島会場(研修⑤⑦) 「学習指導案の相互検討」「カリキュラムマネジメント案の相互検討」

日時：2023年11月25日(土)9時30分～16時

会場：屋久島町安房総合センター大会議室

参加者：稲留愛(宮浦小学校)、濱崎昇平(神山小学校)、吉富祐子(永田小学校)、
白口淳子(永田小学校)、神谷愛奈(神山小学校)、小澤まゆか(ESD グローバルアドバイザー)、
榮修一郎(神山小学校)、澤津奈穂子(神山小学校)、高橋百合香(小瀬田小学校)、
早坂天地(神山小学校)、森川雄介(神山小学校)、山口和代(神山小学校)、
下之藪崇(屋久島町教育委員会) 計13名(3名欠席)

講師：圓山裕史(奈良市立伏見小学校)、中澤静男、加藤久雄、大西浩明



天明中学校会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年12月14日(木)14時～16時

会場：熊本市立天明中学校

参加者：15名(1名欠席)

講師：石村秀登(熊本県立大学)、安田昌則、中澤静男、大西浩明



菊池会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年12月15日(金)13時30分～16時

会場：菊池市役所203・204会議室

参加者：西田拡人(七城中学校)、一安尊正(菊之池小学校)、岩坂大輔(菊池農業高等学校)、
植嶋祐二郎(旭志中学校)、植野元気(菊池南中学校)、大溝謙二郎(泗水西小学校)、
川口幸一郎(泗水東小学校)、作野華奈子(七城小学校)、東由佳子(菊池北小学校)、
田上剛範(菊池高等学校)、中尾千恵理(泗水中学校)、藤吉由美子(戸崎小学校)、
皆川俊輔(旭志小学校)、村上晴菜(花房小学校)、渡邊美和(隈府小学校)

計15名(3名欠席)

講師：遠入哲司(福岡市立田隈小学校)、石村秀登(熊本県立大学)、安田昌則、中澤静男、大西浩明



附属小学校会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年12月22日(金)13時～15時

会場：附属小学校

参加者：入澤佳菜、池添梨花、加川陽子、平野江美、眞田理世、中尾鈴、小野はぎ、小谷隆男、
山本寛之(草津市立松原中学校)

計9名

講師：中澤静男、大西浩明



附属中学校会場(研修⑤) 「学習指導案の相互検討」

日時：2023年12月22日(金)15時～17時

会場：附属小学校

参加者：有馬一彦、丹後七重、堀内千幸、坂本交司、堀川孝子、若森達哉

計6名(4名欠席)

講師：吉田寛(附属中学校)、山本浩大(附属中学校)、中澤静男、大西浩明



附属幼稚園会場(研修⑤⑦) 「学習指導案の相互検討」「カリキュラムマネジメント案の相互検討」

日時：2023年12月26日(火)13時～15時

会場：附属幼稚園

参加者：河合理沙、白石真季、清水智佳子、長谷川かおり、百村美代子 計5名(1名欠席)

講師：阪本さゆり(奈良保育学院)、中澤静男、大西浩明



スペシャリスト・マスター研修(研修⑦) 「カリキュラムマネジメント案の相互検討」

日時：2024年1月10日(水)19時～21時

方法：Zoomによるオンライン

参加者：屋良真弓(沖縄県南風原町立南風原小学校)、高良直人(沖縄県那覇市立松島中学校)、
太田馨(山形県山辺町立山辺小学校)、西田拡人(熊本県菊池市立七城中学校)、
窪田あずさ(鹿児島県屋久島町立安房小学校)、坂元達哉(鹿児島県屋久島町立神山小学校)、
谷垣徹(奈良県立青翔中学校・高等学校)、竹田光陽(奈良県生駒市立生駒東小学校)

計8名

講師：河野晋也(大分大学)、圓山裕史(奈良市立伏見小学校)、中澤哲也(大和郡山市立片桐西小学校)
中澤静男、大西浩明

※欠席した受講者の対応として、

研修①②③⑥については、研修の動画をオンデマンド視聴

研修④⑤⑦については、奈良ESD連続セミナーなどにオンライン参加していただいた。

ESD プログラム (ESD ティーチャー) 履修の手引き

1. プログラムの趣旨・概要

- ・ESD プログラムの履修を通して、学校や地域において ESD を適切に計画し、実践できる教員「ESD ティーチャー」を目指します。
- ・本プログラムは、授業科目以外に、ESD 実践 (学校や地域での ESD に関わるボランティア活動等) や、ESD 演習 (授業以外での ESD に関する学習)、現職教員と共に ESD 学習指導案作成を学ぶ ESD 連続セミナー (3 回生より) で構成されています。
- ・「スタートアップ⇒ブラクティス⇒グローバル」とステップアップし、最終的に「ESD ティーチャー」が授与されます。

2. プログラム履修条件・申請の説明会・申請方法

- ・本プログラムはすべての学年の学生を対象としています。人数制限はありません。
- ・4月27日 (木) 18:15~19:30 ESD・SDGs センター多目的ホールにおいて説明会を開催しますので、出席してください。説明会で申込みフォームの URL(QR コード)をお知らせしますので、履修希望が固まれば、5月12日 (金) までに、フォームからお申込みください。

3. 授業科目・履修方法

(1) スタートアップ・プログラム

① ESD プログラムに関わる必修科目

前期: ESD と学校教育(木)、ESD-SDGs 基礎論(火)

後期: ESD 概論(火)、ESD と生活科・総合的な学習の時間(月)

② 以下の ESD 実践や ESD 演習に各 1 回以上参加し、ポートフォリオを作成する。

実践や演習の情報は、履修登録された方にその都度メールで案内します。

実践: ESD 子ども広場、ユネスコスクール野外活動等支援、東大寺子屋支援

被災地支援ボランティア、陸前高田市文化遺産調査団、等

演習: ESD 実践交流会、春日山原始林フィールドワーク等

(2) ブラクティス・プログラム

① 選択必修科目である「環境教育、世界遺産・文化遺産に関わる科目」「ICT、防災教育に関わる科目」、より、それぞれ 1 科目以上

② ESD 実践や ESD 演習に各 1 回以上参加 (スタート・アップと同じ)

(3) グローバル・プログラム

① ユネスコスクール推奨科目より 2 科目以上を履修してください。

② ESD 連続セミナーに 5 回以上参加し、ESD 学習指導案を作成します。

ESD 学習指導案の書き方は ESD 連続セミナーで学びます (3 回生より)。

(4) 修了の判定

原則として 3 年かけて履修していただきますが、自らの履修計画により短縮して履修することも可能です。ポートフォリオシステムを使って、ESD 実践・ESD 演習の履歴を蓄積し、最終的にポートフォリオと ESD 学習指導案を 1 月末に提出していただきます。書類審査の上、年度末に ESD ティーチャー認定証を授与します。

スタートアップ・プログラム: 必修科目 (2 科目以上履修してください)

ESD と学校教育	ESD 概論
ESD-SDGs 基礎論	ESD と生活科・総合的な学習の時間

ブラクティス・プログラム: 選択必修科目

環境教育、世界遺産・文化遺産に関わる科目 (1 科目以上)	ICT、防災教育に関わる科目 (1 科目以上)
山間地教育入門	情報社会と法・倫理
持続発展教育と文化遺産	情報機器の操作
自然と地域の未来を探る	情報メディアの活用
フィールドワークで地域に学ぶ	教師のための情報モラル
ESD と世界遺産	E S D と防災
E S D と気候変動	地理学概論

グローバル・プログラム: ユネスコスクール推奨科目 (2 科目以上)

人権と教育	生涯教育計画特講 I	文化遺産芸術学演習 II
日本国憲法	肢体不自由教育方法	ユースアジア美術史
キャリア形成と人権	知的障害教育方法	アジアの中の日本美術史
教育人権アプローチ特講	生涯教育文化演習	地域文化論
教育人権アプローチ演習	校外学習指導特講	造形芸術学特講
文化遺産芸術学演習 I	大学での学び入門(文化遺産)	地理学野外実験

生涯教育文化特講	仮名書法論	仮名書道と実用書
国際理解地域研究	教育経営行政論	社会学
教育経営学特講	自然と地域の未来を探る	教師のための多様性理解
教育経営学演習	フィールドワークで地域に学ぶ	水圏科学
生涯教育史特講	生涯教育政策特講	

◇ESD（持続可能な開発のための教育）とは

ESD とは持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目的とした教育です。2015年に国連で持続可能な開発目標（SDGs）が採択されました。気候変動・資源の枯渇・生物多様性の劣化といった環境問題、紛争・テロ等の平和に関する問題、貧困・生産と消費といった経済・社会問題といった地球的問題が顕在化してきており、世界中でSDGs達成のために取組が進められています。日本では、学習指導要領前文に「持続可能な社会の創り手」の育成が明記されました。文部科学省（日本ユネスコ国内委員会）では、ESDをSDGsの達成に貢献する教育と位置付けています。また、学校現場におけるESDの推進拠点としてユネスコスクールを認定しており、奈良教育大学は、2007年に日本の大学として最初にユネスコスクールへの加盟が認められた大学であることから、ESDを推進しています。

◇ESDティチャーとは

ESDティチャーは、各学校でのESD推進の担い手です。教師としての基盤的力量に加えて、豊かな教養をもとに、地域を教材化し、子どもの主体的な学びを引き出し、ESDを実践できる力量をそなえた教員を目指します。本プログラムでは、ESDやSDGsに関する理解を深めるとともに、現職の先生方との協働的な研修会に参加することで、学級経営や生徒指導など、学校現場で求められる教師としての基盤的力量の形成も目指します。

◇ESD実践（学校や地域でのESDに関わるボランティア活動等）

ESD子ども広場、ユネスコスクール野外活動等支援、東大寺寺屋支援、被災地支援ボランティア、陸前高田市文化遺産調査団等、地域での環境保全ボランティアESDプログラム登録者にメールで案内します。

◇ESD演習（授業以外でのESDに関する学習）

ESD実践交流会、春日山原始林フィールドワーク、陸前高田市文化遺産調査団報告会、各種ボランティア活動報告会、ESDに関わる研究会、実践交流会など

ESDプログラム登録者にメールで案内します。

学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける教員



ESDを実践する教員に求められる資質・能力

ESD プログラム (ESD ティーチャー) 履修の手引き (教職大学院生対象)

1. プログラムの趣旨・概要

・ ESD プログラムの履修を通して、学校や地域において ESD を適切に計画し、実践できる教員「ESD ティーチャー」を目指します。

2. プログラム履修条件・申請の説明会・申請方法

・ 本プログラムはすべての教職大学院生を対象としています。人数制限はありません。
 ・ 4月27日(木) 18:15~19:30 ESD・SDGs センター多目的ホールにおいて説明会を開催しますので、出席してください。説明会で申込みフォームの URL(QRコード)をお知らせしますので、履修希望が固まれば、5月12日(金)までに、フォームからお申込みください。

3. 授業科目・履修方法

(1) 現職教員以外の方

① 専攻共通科目 「ESD-SDGs の理論と実践」(必修)

② 専門科目 (8科目) の中から3科目選択

ESD カリキュラムマネジメント	ESD と総合的な学習の時間特講
ESD と郷土教育・総合学習	ESD と地域創生
ESD としての教育実践 (芸術・保健体育、言語・社会科、理数・生活科)、	SDGs フィールドワーク

③ ESD 演習 (2回以上)

授業以外でのシンポジウム、講演会などで ESD を学びポートフォリオを作成

④ ESD 実践 (2回以上)

学校現場等で行われている ESD の支援を行い、ポートフォリオを作成

※ ESD 演習・ESD 実践に関する情報は、ESD ティーチャープログラム受講生に、その都度紹介いたします。積極的に参加するようにしてください。

⑤ 以下のセミナーに5回以上参加し、ポートフォリオを作成する。

i) 1月1回、オンラインで開催する ESD 連続セミナーへの参加

ii) 年5回、県立万葉文化館で対面で実施する授業づくりセミナー
 iii) 年5回、森と水の源流館でオンラインで開催する授業づくりセミナー
 いずれかに5回以上参加し、単元構想案及び ESD 学習指導案の発表をしていただきます。

(2) 現職教員の方

i) 1月1回、オンラインで開催する奈良 ESD 連続セミナーへの参加
 ii) 年5回、県立万葉文化館で対面で実施する授業づくりセミナー
 iii) 年5回、森と水の源流館でオンラインで開催する授業づくりセミナー
 いずれかに5回以上参加し、単元構想案及び ESD 学習指導案の発表をしていただきます。
 (3) すべての方

1月末までに ESD 学習指導案を教育研究支援課に提出していただきます。

ESD・SDGs センターで審査した上で3月の教授会に報告し、学長より認定証が授与されます。

◇ ESD (持続可能な開発のための教育) とは

ESD とは持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目的とした教育です。2015年に国連で持続可能な開発目標 (SDGs) が採択されました。気候変動・資源の枯渇・生物多様性の劣化といった環境問題、紛争・テロ等の平和に関する問題、貧困・生産と消費といった経済・社会問題といった地球的課題が顕在化してきており、世界中で SDGs 達成のために取組が進められています。日本では、学習指導要領前文に「持続可能な社会の創り手」の育成が明記されました。文部科学省 (日本ユネスコ国内委員会) では、ESD を SDGs の達成に貢献する教育と位置付けています。また、学校現場における ESD の推進拠点としてユネスコスクールを認定しており、奈良教育大学は、2007年に日本の大学として最初にユネスコスクールへの加盟が認められた大学であることから、ESD を推進しています。

◇ESD ティーチャーとは

ESD ティーチャーは、各学校での ESD 推進の担い手です。教師としての基盤的力量に加えて、豊かな教養をもとに、地域を教材化し、子どもの主體的な学びを引き出し、ESD を実践できる力量をそなえた教員を目指します。

本プログラムでは、ESD や SDGs に関する理解を深めるとともに、現職の先生方との協働的な研修会に参加することで、学級経営や生徒指導など、学校現場で求められる教師としての基盤的力量の形成も目指します。

◇ESD 実践（学校や地域での ESD に関わるボランティア活動等）

ESD 子ども広場、ユネスコスクール野外活動等支援、東大寺子屋支援、被災地支援ボランティア、陸前高田市文化遺産調査団等、地域での環境保全ボランティア

ESD プログラム登録者にメールで案内します。

◇ESD 演習（授業以外での ESD に関する学習）

ESD 実践交流会、陸前高田市文化遺産調査団報告会、各種ボランティア活動報告会、ESD に関わる研究会、実践交流会など

ESD プログラム登録者にメールで案内します。

学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける教員



ESD を実践する教員に求められる資質・能力

令和5（2023）年度 ESDティーチャー・フォローアップ研修会開催要項

1. 目的

新学習指導要領が全面実施されたことに伴い、現職教員にとって、ESD を適切に計画し実施する力量の形成は、ますます必要性が高まっている。平成 28 年度より展開する ESD ティーチャープログラムにおいて、ESD ティーチャーに認証された現職教員が全国で 300 名を超えた。そこで、全国で ESD に取り組んでいる ESD ティーチャー・マスター・スペシャリストを対象に、そのフォローアップとしてオンラインによる研修会を実施することで、参加教員の ESD の更なる理解促進と、参加教員相互のネットワークの形成を目的に、本研修会を開催する。

2. 主催 奈良教育大学 ESD・SDGs センター

3. 対象 ESD ティーチャー・マスター・スペシャリスト

4. 内容 Zoom を用いたオンライン研修・交流

- ・ ESD や SDGs の理解促進を目的とした研修
- ・ 参加教員による実践事例の相互検討
- ・ 参加教員作成の ESD 学習指導案や単元構想案の相互検討

5. 方法

- ・ 原則として 1 回／2 カ月（計 5 回）。Zoom を用いたオンライン研修・交流会
- ・ 全国の ESD ティーチャーに毎回、開催通知、URL をメール送付し、参加を呼び掛ける。
- ・ 各回 1～2 名の実践について相互検討を行う。
（緊急に単元構想案や学習指導案の検討を行う場合もあり）

6. 担当者（企画・運営） 大西・中澤：現職教員の経験を有する大学教員

7. 開催日時（いずれも時間は、19 時～20 時 30 分）

- ① 5 月 16 日（火）
- ② 6 月 27 日（火）
- ③ 9 月 19 日（火）
- ④ 11 月 21 日（火）
- ⑤ 1 月 23 日（火）

8. 期待する効果

- ・ ESD ティーチャーの ESD 実践力の向上及び ESD の質的向上を図る。
- ・ 全国の ESD ティーチャーの取り組みを把握し、成果発表会・実践交流会につなげる。
- ・ 全国の ESD ティーチャー、ならびに各地の ESD 研究会のネットワークの形成を進め、将来的に本学による ESD トレーニングセンター構築の基盤づくりを行う。

◇日時 2023年5月16日(火) 19時~20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン方式

◇参加者 24名

◇実践報告 沖縄県南風原町立南風原小学校教諭 屋良真弓先生

小学校5年総合的な学習の時間「SDGs メガネをかけたら ~平和学習~」

— 持続可能な社会をつくるためにできること —

【実践概要】

○授業のねらい

第二次世界大戦の戦争遺跡を文化財に指定したのは、南風原町が日本で初めて

沖縄では、唯一地上戦が行われ、慰霊の日がある6月には各学校とも様々な平和学習が行われている
しかし、

- ・慰霊の日が何の日か知らない小学生も少なくない
- ・沖縄が復帰した日を知らない高校生が約7割

平和学習のあり方について議論されるようになってきている

沖縄戦のことを学ぶことは、「人権」「命」に深くつながっていく

「人間らしく生きるとはどういうことか」考える材料が沖縄にはたくさんある

5年生終了時に目指す子どもの姿

「自分たちの住む地域に誇りと愛着をもち、一人一人が平和な世の中を創る主体であることに気づくとともに、多様な人たちと協働してよりよい社会のための行動を自ら起こすことができる」

- ・学校だけに閉じない学び
- ・外部人材の「活用」ではなく「協働」
- ・だれでも再現可能なカリキュラムづくり
- ・ジブンゴトになる工夫（参加型、本物に出会わせる、人と会う）

1. 復帰50周年ワークショップ

「オキナワ」が“日本”にかえった日 ~50年前のオキナワのできごと~

屋良朝苗（初の公選県知事）の半生のストーリーを通して沖縄復帰を考える

復帰前の母子手帳には「琉球政府」と書いている！

新聞記事…復帰式典の行われている隣の公園で大規模集会…『「沖縄処分」響く怒号』

問い 沖縄の人たちは、なぜ怒っていたんだろう

怒りの根底には何があったのだろう

どんな沖縄を望んでいたのだろう

このワークショップ地域の博物館の企画展とタイアップ

2. 私の決めたあの人に会いに行こう

琉球大学アドバイザー事業を活用 大学の先生に授業づくりに参画してもらう

平和祈念資料館、ひめゆり資料館の見学…ぼんやり眺める、何となく見学するを避けたい

「概要を学ぶのではなく、ある人物に焦点を絞って沖縄戦を考えていってはどうか」

まとめ新聞や感想を書かせるよりも、「あの人に手紙を書こう」

もう返事はないけど、聞いてみたいこと、伝えたいこと、自分が考えたことなど

テーマごとに戦没者の方を数名取り上げている小冊子から

→ 平和祈念資料館、平和の礎のどこにその方の資料があるだろう？ 冊子を見て探させる
自決された方 「どうして自分で自分の命をうばっているのかな？」

「赤ちゃんなのに、なぜ？」

自分が探しに行く人を決める

「牛島満さんに聞きたいことがあります。なぜ最後まで敢闘し・・・というような命令を？」

「今ではもう平和です。」

「私が見つかったことは、戦争はとても辛くて、人はひとでなくなってしまうということです。」

「もっと長く生きてかったですか？ 生きていたら何をしたかったですか？」

→ 事実の羅列に終わっていたこれまでの感想から、その人を通して考えた社会的事象への理解や感想、思いなどが書き足されていた

3. 山口県柳井市の小学校とのオンライン交流

山口（日本兵を通して考える）と沖縄（地域住民を通して考える）では、学ぶ側面が違う

学んだ事実と考えたことについて交流

「若い人が、どうせ死ぬのなら役に立ちたいと思い、回天に乗ったと言っていたので、昔はそういう思考回路で、それに加え同調圧力もあると思うので、それなら私も乗るかもしれないと思いました。」

↓

キーワードになった「同調圧力に負けない」について、ジャムボードで意見交流、共有
自分の意志を持つ 勇気 自信を持つ たくさん勉強する ……

成果 ・コンテンツ、コンピテンシー両方のカリキュラムデザインを意識して考えることで、有機的な教科横断の取組となった

・ESDの資質能力、価値観などを明確にしたことで、教師の働きかけが明確になり、学年単位で取り組むことができた

課題 ・児童の学びのストーリーに乗ったカリキュラムであったか

【質問】

○「同調圧力」という言葉は沖縄の子どもたちからは出なかったということだが、それは沖縄だからという地域的なことなのだろうか？

→ 私自身がそういう視点で平和学習をつくっていなかったと思う。集団自決など悲惨な歴史の事実がどうして起こったのだろうというところまで考えていなかったのは反省点。

柳井小学校の子どもたちは、人間魚雷に乗らざるを得ない状況にあったということを理解しての発言であったと思う。

○地域との連携、外部人材との協働について話があったが、コミュニティスクールなどの沖縄での現状はどうか？

→ 浦添の前田小学校はユネスコスクールのキャンディデート校になって、地域との連携が非常に活発に動いているという話は聞いている。

○「人間らしく生きるとはどういうことか」という問いに対して、屋良先生の捉えはどうか？

→ 平和学習に関して言えば、安心して生きていけること、なりたい自分に向かっていけること
自分は大切にされていい存在なんだと感じられること かな。

沖縄の子どもたちには、やはり沖縄のことをよく知ってほしいと思っている

○平和学習を、総合を中心に取り組む場合、みなさんは大単元としてどのように取り組まれているのか教えてほしい。

→ 修学旅行で広島へ行くにあたり、社会科と絡めている。キャリア教育とも関連させて、「平和な社会をつくるためには、どのような自分を目指すのか」を考えさせている。

道徳でサダコさんの学習をする 千羽鶴を折る

ESD カレンダーに「人権」に関わるものをピックアップして、各教科で行っている。

国語の物語教材をいくつか「命」をテーマに学習している。6年生では社会科や理科にも「命」について考えるものがあり、それらをつなげて長いスパンでやっている。

中学校では沖縄に修学旅行に行く。ひめゆりの女学生と同世代の子どもなので、「やりたいこともできなかった」彼女らに思いを馳せ、「やりたいことができる」自分たちはこれからどう進路を選ぶのかを考えさせたいと思っている。

【意見交流から】

○平和教育の教材として、名もない一人の人に目を向けて、そこから学びを深めていけるというのは、沖縄だからというわけでもないと思う。取り入れてみたい手法だと感じた。

○オンライン交流は、子ども同士の学びであると同時に、先生同士の学びであると実感できた。

○戦争を自分事として捉えるというのは難しい

と思う。語り部さんに来てもらっても、高齢化で厳しいところもある。

屋久島の神山小学校では、モッコム岳に6年生が登る行事がある。険しい山だが、その自然体験から得られる様々な学びを通して感性を養うことが、平和を愛することにもつながるのではないか。

○外部人材は「協働」であるべき。県をまたいで交流することの大切さを感じた。「同調圧力」ではなく、上からの強制ではなかったか。今の子どもたちは、そういう強制をあまり経験がないので。

○いくらウクライナの様子を画面で見ても、子どもにとってはそれは自分事化はできないだろうし、あくまでも遠い世界のことだろう。意見にあった「感性を鋭くさせておく」というのは大事だと思う。様々な体験を通して感性と磨いておくことで、修学旅行で現地に行っても感じ方が違うはず。



◇日時 2023年6月27日(火) 19時~20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン方式

◇参加者 21名

◇実践報告 愛媛県新居浜市立別子中学校教諭 池田光希先生

全学年 総合的な学習の時間

「共に野菜をつくることで共に未来をつくる 地域協働型農業『別子ファーム』」

【実践概要】

○授業のねらい

地域の方から農地を借用し、生徒と地域の方が協働して野菜の栽培から収穫までを行う

全校生徒19名 平成28年よりグローバル・ジュニアハイスクール

校区外からも生徒募集 「立志寮」で寄宿舎生活

「18歳意識調査」(日本財団)から…自己肯定感が低い、社会への当事者意識が低い
学びの土壌づくり → 素敵なお大人と出会う・関わる

○実践の内容

「別子ファーム」誕生のきっかけ

「もっと地域とつながっていききたい」「地域の課題をいっしょに乗り越えていけないか」

深刻な過疎化 × SDG17 (パートナーシップ) → 地域と野菜作り

お互いの得意分野でつながる

地域の方の知恵 中学生の体力・アイデア

合言葉「地域とともに野菜をつくることで、ともに未来をつくる！」

理念「中学生が地域とパートナーシップを結び、地域を元気にする」

すべての活動がこの理念に沿ったものにする 2020年

畑づくりから 子どもも教師も農業が初めて → 地域の人たちに教えてもらう(地域の方が先生)

はじめからうまくは育てられなかった(日照り、台風、病気…)



「自然の力にはかなわない」
収穫前の大根をサルに食い荒らされる
自然の怖さを実感する
(農業ではあたり前のこと)

収穫した野菜で地域の方と郷土料理
猪鍋を囲む会

「幸せな時間だった！」
地域の人と交流したこと
味のおいしさ 達成感 など

生ごみの堆肥化にも挑戦中

2021年、2022年 野菜販売に挑戦

理念「中学生が地域とパートナーシップを結び、地域を活性化する」

→ 野菜販売の目的「野菜販売を通して、別子山地域とお客様をつなぐ」

売って儲けることが目的ではない 自分たちの地域と地域外の人がつながる

広報・PR部…チラシを作成、配布 インスタグラムで発信

野菜管理部…収穫、出荷 作業計画で改善・実行

新居浜市の観光施設「マイントピア別子」で2日間販売 多くの方が来場された 完売

→ 多くのお客さんとつながることができた！

自分たちがアクションを起こせば、社会に影響を与えられる！

「ふるさと別子夏祭り」の復活

生徒の発案によって12年ぶりに地域の夏まつりが復活

「知りたいと思って学ばば学ぶほど、別子山地域の魅力に気づける」

夏祭りで踊る盆踊りを地域の人に教えてもらう

企画立案、運営は生徒がすべてやる

当日は雨にもかかわらず、地元住民・保護者・卒業生など110人が来場

自分たちのやりたかった「地域をつなげる活動」ができて満足

→ 「一度復活して終わりではなく、ぜひ後輩たちがつないでいってほしい」

生徒自身が、自分の家族と地域、卒業生とつながる場をつくった

→ 持続可能な社会を創っていく上で大事なこと

これらの活動のために・・・

・生徒主体の話し合い活動

課題解決に向けた組織づくり（広報・PR部、地域連携部、野菜管理部）

適材適所で強みを生かす 意思決定のスピードアップ

多様な考えを認め合いながら、対話を通して合意形成を図る（多数決では決めない）

タブレット端末を積極的に活用

使うか使わないかも含め、生徒に選択させる 手段としてICT

A or B から A and B に 手段を「選ぶ」ではなく、手段を「つくる」に

リーダー像を全員でつくる「別子ファームのリーダーに求められること」

リーダー達成度チェック表

・教師の探究

「探究学習を探究する時間」 教師も探究する！

どこまで生徒に手をかけるのか、どこから手を離すのか

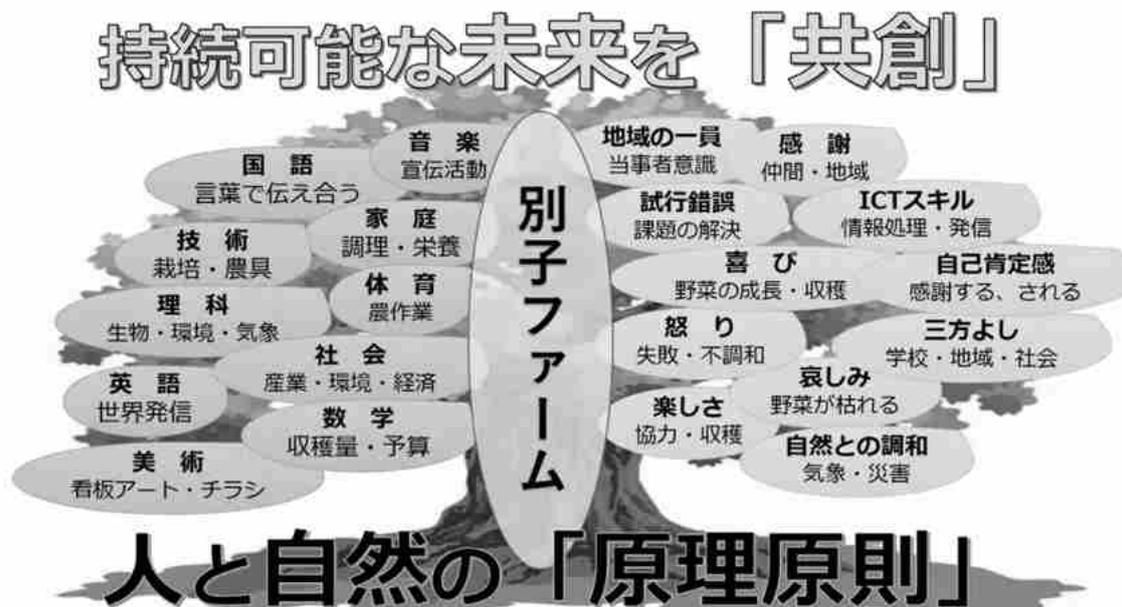
探究学習では、教師は「学びの伴走者」という役割

コーチングとファシリテーション

自分がとるべき行動を自己決定させるよう促す

「別子ファーム」から学んだこと（1月の生徒記述より）

- 社会の大人と関わることで得られる情報やスキルが実用的でワクワクした。（社会との接点）
- 思い切って行動すれば、つながりが広がり、未来が変わるのだとわかった。（行動を起こす）
- それぞれが長所を生かして協働しているときは、みんなが生き生きとしている。（多様性と包摂）
- 別子山地域とつながる喜びを感じて、今度は自分の地域行事にも参加し、地域を盛り上げたい。（地域社会への参画・当事者意識）
- 大人からの優しさを感じたことで、知らない人ともコミュニケーションが取れるようになった。（自己の変容）



【意見交流から】

- 教師の「探究を探究する」活動は、具体的にどのような内容なのか？
→ 前回の授業の振り返り、次時にどうするか（さらにその先の見通し）
教師もそれぞれ考え方が違う中で、どこをどう共通理解して授業に臨むか
- 新居浜市は別子中学校のように、学区外の子どもを呼び込んでいこうという戦略なのか？
→ 学校が地域を元気にする、そのために学校を存続させる その方策のひとつ
- 地域の巻き込み方はとても参考になる
- 寮生活をしている分、お互いの絆も深く、地域への愛着も深いのだと感じた
- ESD カレンダーは今後どのようになっていくのか
→ 新居浜市の研修会では付箋を貼っていったが、学校で話してロイロノートでやってみた
その方がとてもやりやすかった 今後、小学校との関連で作成できればと考えている
- 来年、子どもが全く違うことをやりたいと言ってきたらどうするか？

→ そういう話が出てきたらうれしい。教師がやっていいとか悪いとか言う立場でもない。
それが自分たちだけでなく、地域のため、社会のためになっているのであればチャレンジ！
それによって野菜作りや夏祭りがなくなったとしても、それが出てきたのは自分たちがやってきた土台があつてのことだと思うので、すべてが台無しだとは思わない。
探究学習というのはそういうものだと思う。

○地域の人たちと共に活動する学びは、真に持続可能な社会づくりへの大きな一歩である。

→ 自己肯定感、自己有用感がぐっと伸びた感じがする。

○ESD カレンダーは社会に開かれた教育課程を示すもので大事だと思うが、実際にそれを実践している学校は多くないと思う。別子中学校がこれを見える化し、地域とともに学びを進めているこのような実践が増えてくると、もっと面白くなっていくと思う。

○生徒の「自分たちが動けば社会が変わる」という言葉に、ESD の真髓があるのではと感じた。そうさせたのは、先生たちの「探究学習を探究する」営みや、「学びの伴走者」としてのスタンスではないだろうか。何よりも、そうしている先生たちがいちばん楽しんでいるようにも感じた。それが ESD だと思う。

第3回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

◇日時 2023年9月19日(火) 19時~20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン方式

◇参加者 28名

◇実践報告 鹿児島県薩摩川内市立市比野小学校教諭 菊永美樹先生
小学校5年 総合的な学習の時間 「かわひこ広めよう プロジェクト」

【実践概要】

○授業のねらい

昨年まで勤務していた屋久島町立神山小学校における実践

「本富の時間」(総合的な学習の時間)では、小学校1年から中学校3年まで「ふるさと屋久島の魅力」をテーマに学習を進めている

「気付き、考え、実行する児童の育成」

かわひこ…里芋の一種 伝統野菜 栽培に10か月かかる(4月~翌年2月)

昔は地理的・気候的制約により、神山地区でよく栽培されていた

従来はジャガイモやサツマイモを栽培していたが、先が見えていて面白くない

突然の電話「伝統野菜を育ててみませんか？」 鹿児島大学(農学部技術職員)中野さんより

- ・自分たちにしかできない「使命感」
- ・「伝統」であり「農業」である
- ・第一次産業 → 第六次産業への展開
- ・5年生の一年間の核となる

協働的な大人とのつながり、ESDアドバイザーとのつながりを通して、目指す子ども像に迫る

○実践の内容

中野さんから F1野菜と伝統野菜の違いを教えてもらう

かわひこを植える 肥料やり、水やりなどの世話を始める

かわひこについてのSWOT(強み、弱み、解決策)を書き出し、考える

国語:かわひこについてインタビュー調査、レポート作成

かわひこを育てていることを地域の人に知らせる ポスター作成

9月 かわひこ料理試作(コロッケ、かき氷のシロップ、煮物)

台風の被害を受けるが、2週間で復活

ニチレイに、「かわひこチャーハン」のレシピをプレゼン

試し掘りしたかわひこで、どうすればチャーハンに合うか調理してみる

どんな調味料が合うか試してみる

食味実験 元日に食べる伝統料理「元朝芋(がんちょいも)」づくり

農家の方から昔の農業について教えてもらう

町のイベントで掲示 県外の学校とリモート交流

2月 収穫 134kg パンフレット制作、販売(地域の店舗が協力)、旅館の食事に

協働的な大人とのつながり

中野さんとの出会い

6回来校 子どもたちの一緒に活動して下さった 遊んでくれたりもした
ほかにも、JAの方、農家の方、給食センターの方、地域の方、県外の方たち、企業の方・・・
教育DXを活用した協働的なつながり
「本気を出せば周囲は協力してくれる」「やりたいと思ったことは挑戦したらできる」

ESD アドバイザーとのつながり

屋久島町 ESD アドバイザー 杉下さん

4月 3～6年 オリエンテーション「SDGsについて」

SWOT (S 強み、W 弱み、O 機会、T 脅威) 付箋に短い言葉で書いて問題を見える化する
物事を多面的に捉える 解決策を自分たちで考える経験

収入から支出を引いた利益が 12000 円 来年の活動費に 5000 円使った後の 7000 円をどうしよう？
「ユニセフに寄付したいです」 少年赤十字の新聞を貼り続けていた、毎月寄付していた子ども
シリア、ウクライナ、アフリカなどへ

3月 「かわひこの栽培はどんな意味があったのか」

家族農業 規模が小さいから環境に負荷をかけない

女性や高齢者が働く機会 社会的・文化的価値を保存

→ SDGs のすべての目標の達成に関連している 大きな達成感

振り返ってみて

かわひこが学級の核になった 他教科への波及、発信力の向上・自信に
教師がファシリテーター、根回し役に徹した
各機関との連携をフルに生かした
収穫、販売の仕方に課題（湿気に弱い）

中野さんのコメント

当初消えゆく伝統野菜を地域で残すために始めた伝統野菜の教材化だったのですが、神山小学校で菊永先生が伝統野菜の活動を児童個々人の目標達成や児童みんなの協働的な目標達成に活用されたことを1年間見てきて、私自身の伝統野菜の教材化に対する考え方が大きく変わりました。
今では伝統野菜が残る残らないよりも、伝統野菜の活動が子ども達のこれから生きるヒントや自信を持って夢に向かう力に繋がればよいなと思っています。

杉下さんのコメント

Think Globally Act Locally をまさに実践している取組だったように感じる

「プロジェクト」になっていた 自分たちで答えを見つけに行き、その先にさらに次の課題があった
屋久島の ESD は、小学校での取組が中学校にきちんとつながってきていることを実感している
しかし、やはり中学校はどうしても縦割りになっていて、小学校でのダイナミックな学びをなんとか中学校でもできないかと思う

【意見交流から】

- いろいろな人たちとの関わりを通して、子どもたちがどんどん自信をつけていったように感じる。
 - 教師が先回りするのではなく、子どもが見つけたたり聞いてきたりしたことを、教師が子どもの願いを何とか叶えられないかと動いていた。
- この実践は一貫して「幸福感」を感じる。
 - かわひこを通して、「学校が楽しい」と感じてくれていたように思う。
- 当初の計画ではどこまで計画していたのか？
 - 最初はいいところ半分ぐらいか。ティーチャープログラムにおいて、いろんな先生からアドバイスをもらえて、どんどん構想も広がっていった。
- 六次産業化への展望や、ニチレイとのコラボ、JAなどでの販売などについて、苦労されたことは？
 - ニチレイには抽選で当たって、家庭科の先生と相談して5・6年合同でやった。
保護者も理解を示してくれて、収穫や販売の協力をしてくれた。
- SWOT 分析をはじめ、様々な分析方法を他の学習などでも活用できるようになっているのが素晴らしいと思う。
 - そのままするのは難しいが、5年生の子どもでもできるようにカスタマイズすればいいと思う。
短い言葉で書いて貼れるので情報の整理にはやりやすい思考ツールではあると思う。
- なぜ伝統野菜だったのか。
 - F1 野菜・・・収穫は早いけど味が薄い、栄養が少ない
伝統野菜・・・収量は少ないけど味が濃く、栄養価も高い
中野さん「ほんとに美味しい里芋を食べたくないか？」 ⇒ 「食べたい！」
- 神山小学校では今年も去年に引き続き、かわひこの栽培をしている。バザーで広めたいとキャラクターを考えて、ぬいぐるみやプラバンを作っている。
神山小学校では、職員間で「本富の時間」を共有するために、「もととミーティング」を木曜日の放課後10分程度で自由参加で行っている。 ⇒ だれでも本富の授業ができるように！
- 中野さんのコメントにある、「今では伝統野菜が残る残らないよりも、伝統野菜の活動が子ども達のこれから生きるヒントや自信を持って夢に向かう力に繋がればいいなと思っています。」が、教員が目指すべき本質を示してくれているように思う。
- 子どもたちが自分のペースで探究できる環境になっていたのだと思う。拙速に「広めよう」ではなく、自分のものになってから「広めたい」と、それが必然になっていく過程が見えた。
- これだけ深い学びができるのも、「もととミーティング」のように、学校の中に「みんなでいい学びをつくっていこう」という土壌、文化があるからだと思う。

第4回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

◇日時 2023年11月21日(火) 19時～20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン方式

◇参加者 12名

◇実践報告 山形県天童市立寺津小学校教諭 近野巧先生

小学校4年 総合的な学習の時間

「海の豊かさを守ろう ～寺津小4年1組 海を守り隊～」

【実践概要】

○授業のねらい

8名の学級 農業がさかんな地域 須川や寺津沼などもあり自然豊かなところ
水が身近で大切だと感じられるところ → 水に関わる実践は子どもの主体的な学びになるはず
学校教育目標「あかるく かしこく たくましく」(自立・共生)

意欲のある子どもたちだが、振り返りを自分の生活につなげられない子どもが多い

「かしこく」・・・自分の考えをもって聞き、表現する子ども

自分の思いが伝わるような話し方やプレゼンテーション ICTの活用

考える過程や結果を可視化する授業の構成

○実践の内容

テーマ設定まで

取り組みたいテーマについて、海洋ごみグループ・将棋グループ・自然グループに分かれる

この時点で指導者は将棋をテーマに実践しようとしていた

話し合いを繰り返す中で、海洋ごみについて取り組むことになった

去年の自由研究で頑張った児童がブレずにこれをやりたいと言い続けたからか

カリキュラムを再構成し、海洋ごみをテーマにして取り組むことにした(校外学習も変更)

社会科「水はどこから」との関連

川にペットボトルが落ちている この川は寺津沼につながっているのでは

地域の探検から疑問に思ったことを、「位置や広がり」「時期や時間」「人々の工夫やひと・もの・こと
とのつながり」「これからもことや自分にできること」の4つの視点で整理する

水のろ過実験、ネイチャーセンターでの見学や体験、湧き水を飲む

→ 「やっぱり水は大切!」「水に関わるテーマにしたい」

テーマを決めるためにはもう少し情報を集めよう!

海洋政策研究所の方との交流 海沿いの地域の市役所やボランティア団体の方に話を聞く

・海洋ごみには「漂着ごみ」「海底ごみ」「漂流ごみ」などいろいろある

・プラスチックごみが多い

・マイクロプラスチックというものがある

・海のことを考えることが私たちにもできること など

「テーマをどうするか？」

水がテーマになるが、海・川・湧き水とかもっと具体的な言葉にした方がいい
湧き水も守りたいが、海を守るためには川や湧き水も守らなくては
海を守るためにも川を守ることが、わたしたちにできることでは → 海洋ごみ

テーマ設定後の子どもの様子（8月～10月）

・山形市内の小学校との交流

感想は言えたが質問できなかった 次の交流では質問できるように

・寺津沼のごみ拾い①

想像以上にごみが多いのは悲しい もっとごみを減らしたい

・鶴岡、田川地区の校長先生方との交流

これまでの取組について伝える どうしたらもっと伝える質が高まるか子ども自ら工夫する

「自分の言葉で分かりやすく伝えることができた！」 8人とも意欲的に交流できた

・寺津沼のごみ拾い②

前から1ヶ月しか経っていないけど思ったよりもごみがある

このままだと海に流れてしまうから取りたいけど…取れない

子どもの変容

課題が自分事になりつつある 課題解決のためには自分たち8人だけの力では足りないと気付く

交流やインタビューを繰り返す中で自信をつけた

相手を意識した伝え方を工夫できるようになった

（現在、育休に入り実践そのものは後任の先生に任せている状況）

来年度の計画について

・もし海・山・川に行くことができたなら、どんな体験をすると、どのような学びにつながるだろうか？

・地域の人たちとともにできることは？

・校内での学びを充実させるために、日々の学習でできることは？

【意見交流から】

○島の学校だが、海を守るためには山が大事ということで、森林環境教育を実施している。海も山も自分事になりつつある。農業の地域で海がどこまで自分事になっているか？

→ 寺津をなんとかしたいとはなっているが、海がそこまで自分事になっているとはまだまだ。

○今後、子どもたちに期待する行動は？

→ 地域の人たちといっしょにできる活動 行政を巻き込むような動き

市や公民館などがやっている活動（ごみ拾い）などに積極的に参加するなど。

○総合のカリキュラムに自由度が高いと感じたのだが、学校としては決まったものはないのか？

→ 数年前からそのときの子どもの実態や興味・関心に沿ったものになった。

教師の力量によって大きく変わってしまうので、課題は多々あると思う。

現担任が「来年度その学年を持ったら」という観点で総合の計画を年度末につくることにした。

○学んだあとに子どもたち自身がボランティアで動くことだけでも大きな価値があると思う。

- その地域だからこそできる総合のカリキュラムは、ある程度形にはしていきたいと思っている。
- 子どもと丁寧にテーマ設定していく過程がとても勉強になった。子どもの思考や興味・関心に寄り添ってテーマを決めていく様子がよく分かった。
- その学校だからこそできる、少ない人数だからこそできることに注力すべきで、それが強みになると思う。少人数だからできることを徹底的にやっていきたい。
- 総合のカリキュラムの継続性については、やることが決まっていて、やらされる学習は先生も子どもも楽しくない。少人数なら2学年または3学年合同でやると、違った継続性になっていくかも。
- オンライン交流でどう深まるかは、基本は子どもに任せるのだが、先生のやる気や見通し次第かと感じる。子ども同士が互いに刺激し合えるところに醍醐味がある。
- 総合のカリキュラムは、やはりコンテンツありきではなく、コンピテンシーベースで考えることが大事ではないか。

◇日時 2024年1月23日(火) 19時～20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン方式

◇参加者 17名

◇実践報告 奈良県大和郡山市立片桐西小学校 中澤哲也先生

小学校6年 総合的な学習の時間 「片西平和学習 ～よみがえる中島地区の笑顔～」

【実践概要】

○教材について

AIとカラー化した写真でよみがえる

戦前・戦争

庭田杏珠 × 渡邊英徳
〔記憶の解凍〕プロジェクト



1冊の本との出会い

「AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争」(光文書新書)

白黒写真をAIによってカラー化する取組

カラー化することで当時の生き生きとした人の営みが感じられる

「記憶の解凍プロジェクト」庭田杏珠さん(東京大学学生)

「カラーの写真に目が慣れた私たちは、無機質で静止した『凍り付いた』印象を、白黒の写真から受けます。このことが、戦争と私たちの距離を遠ざけ、自分ごととして考えるきっかけをうばっていないでしょうか?」(著書より)

出版社を通じて庭田さんとコンタクトをとる

いっしょに授業に取り組んでもらう

カラー化された被爆前の中島地区の様子をみることで、歴史的に遠くなってしまいがちな出来事と自分たちの生活を重ねることが可能となり、より平和とは何かを自分ごととして深く考えるきっかけになるのではないか。

1学期末 アニメ「ヒロシマに一番電車が走った」を視聴

この時点では、児童の多くは戦争や原爆と今の自分たちとの生活は遠くかけ離れたものと認識。

で原爆が投下される前の人々の生活に視点をあてたり、平和を語り継ぐ活動を続ける庭田氏との出会い、交流する活動を通じたりして、平和とは何かをより自分事として考えられる児童の姿を求めたい。

○実践の内容

1. 原爆や核兵器について各自で調べ学習

2. 家から思い出の写真を一枚持ち寄せ、いつ、何をしている時かなど、語り合う

3. 庭田さんの活動を知る

なぜ、庭田さんはモノクロ写真をカラー化したのだろうか?

4. 庭田さんとオンライン交流 → 被爆前の中島地区に関心を持つ

庭田さんの思い

- ・自分も広島市出身だったが平和教育は苦手だった。
- ・小学5年生の時に、中島地区の被爆前の写真に出会い、今とは変わらない現実がそこにあったことに気づき、それを伝えていきたいと感じるようになった。

- ・高校 1 年生の時に、平和公園で濱井さんと偶然出会い、当時のアルバムを見せてもらった。
- ・初めてカラー化した写真を見た時は被写体がまるで今を生きているように感じた。
- ・カラー化した写真を見せると。濱井さんが今まで思い出せなかった思い出が次々と出てきた。
(記憶の解凍)
- ・平和記念公園では原爆が投下される前の中島地区の生活を思い浮かべながら歩いてほしい。

5. 庭田さんと一緒に平和記念公園を歩き、「記憶の解凍アプリ」を使って、当時の様子を紹介する



- 6. 平和記念資料館の見学など、広島での平和学習
- 7. 市内の小学校と交流 (互いの学びを共有する)
- 8. 「自分にとって平和とは何か?」「それを守り続けるためには…」(予定)
- 9. 庭田さんにオンラインで自分たちの考えを伝える (予定)

【意見交流から】

- 学習を終えたときの子どもの具体的な姿をどうイメージしているか?
 - 原爆投下前、戦前は、今と同じようなあたり前の日常があった。
それがなくならないようにするためにはどうしていくかを、自分事として考えさせたい。
- 発信するにあたって何か配慮しようと考えていたことは?
 - 実際に歩いた中島地区の戦前はこんなところだったという被爆前に視点をあてさせた。
- カラー化によって、かえってリアリティを感じすぎてしんどくなるような子どもはいないか?
 - 写真ではそうではなかったが、資料館に入るときにそういう子どもがいた。
もしかしたら、その直前の写真でそうなったのかもしれないが。
- 庭田さんと子どもたちとの出会わせ方、距離感は?
 - 写真を見せたことで一気に庭田さんへの興味がわいた。年齢が近いことで親近感をもっていた。
庭田さん自身も平和学習が苦手だったというところも親近感が強まった。
- 平和学習・・・日常のあたり前の重要性に気づくことができる。そこが大切なのではないか。
- 戦争や平和を自分事に捉えることは難しいが、それができつつあることに実践のよさを感じる。
- 最後にテキストマイニングとあるが、すでに言語化しているのだから必要ないのではないか。
- カラー化した写真に吹き出しをつけて考えたり、このあとのストーリーを4コマ漫画などで考えたりするというのはどうだろうか。よりリアルな日常として考えられると思う。
- 現地交流などもできたらもっとよかったかも。
- 「平和って何?」をもっと自由に考えさせたい。いろんな世代からも平和について聞き取りをする中で自分なりの考えを持たせられたら。

- あたりまえの日常がいきなりなくなるかもしれないからこそ、今の大切さを感じさせたい。各自が持ってきた楽しい写真をもう1回使えるといいかも。
- 自分も庭田さんと同じように、平和を追求していく一人なんだというところには高めたい。
- 市民はいつも国の意向に巻き込まれる。政治に関心を持つことが重要。
- 日本の現状がいかに平和であるかを実感することが大事で、小学生ではそれで十分では。
- 「小学生ではできない」ではなく、「小学生だからできる」ことがあるはず。
- 一人でできること、みんなとならできること、今できること、この先ならできることなど、自由に出てきた意見を分類していくと具体的にできることが見えてくるのでは。
- 災害とは違って、戦争は人と人が起こすものなので、そのあり方によっては防ぐことができるものであるということは捉えさせたい。
- 庭田さんのように、様々な形で平和を追求している人がたくさんいることを調べてみることもいい。
- 最後の発信は、若い世代で活動されている人たちにも聞いてほしいし、フィードバックがもらえるとより学びが深まると思う。

E S Dティーチャープログラム（屋久島会場）フォローアップ研修会 開催要項

1. 目的

2022年度、2023年度と2年間にわたってE S Dティーチャープログラムを鹿児島県屋久島町で開催し、2022年度はE S Dティーチャー10名を認証し、2023年度は6名のE S Dマスター、10名のE S Dティーチャーを認証する予定である。2年間プログラムに参加した教員が中心となって、自主的な勉強会を始めており、屋久島町内の小中学校へとE S Dの輪が広がりつつある。そこで、研修に参加した教員だけでなく、島内の教員にこれまでの成果を発信する機会を設け、E S Dティーチャープログラムのフォローアップとする。また、屋久島町だけでなく、鹿児島県全体へと成果を広げるため、本研修会をオンラインでも開催し、鹿児島県内からの参加を広く呼び掛ける。

2. 日時 2024年3月2日（土）9：00～12：00

3. 会場 屋久島町立神山小学校（鹿児島県熊毛郡屋久島町原3-1）

4. 内容 第1部「屋久島E S Dの会」 9:00～11:00

【実践交流】

- ・奈良女子高等学校 新宮 済 教諭
- ・薩摩川内市立市比野小学校 菊永 美樹 教諭
- ・屋久島町立神山小学校 濱崎 昇平 教頭

【指導助言】

奈良教育大学 中澤静男

【意見交換会】

「E S Dティーチャープログラムの新たな展開について」

第2部「やくもり会」 11:00～12:00

【実践発表】

- ・屋久島町立八幡小学校 橋口 和真 教諭
 - ・屋久島町立宮浦小学校 稲留 愛 教諭
- 指導助言 中澤静男、新宮済

※「やくもり会」は、島内の教員が日頃の授業実践を交流する自主的な研修会である。

ESDティーチャープログラム（山形会場）フォローアップ研修会 開催要項

1. 目的

2020年度、2021年度と2年間にわたってESDティーチャープログラムを山形市で開催し、その後奈良ESD連続セミナーに継続して参加することで、山形から1名のスペシャリスト、9名のESDマスター、15名のESDティーチャーを認定してきた。さらに、受講者を中心に、「やまがたSDGs・ESD研究会」が結成され、自主的な研修が継続されている。今年度は、新たにスペシャリスト1名、マスター1名、ティーチャー2名が加わる予定である。また、森と水の源流館授業づくりセミナーにも研究会メンバーが数名参加し、学習指導案を作成している。そこで、研究会員が一堂に会し、各自の学習指導案を相互検討する機会を設け、これまでのESDティーチャープログラムのフォローアップとする。また、各地で自主的に活動しているESD研究会に呼びかけ、それぞれの活動や実践について交流する場とする。

2. 日時 2024年3月20日（日）9:30～15:00

3. 会場 食糧会館（山形市旅籠町三丁目1番4号）

4. 内容 ESD実践交流会

司会進行：新宮 済（奈良女子高等学校）

AM：本年度セミナー受講者による実践報告

土屋 岳（山形県立高畠高等学校）ESDティーチャー受講

太田 馨（山辺市立山辺小学校）ESDマスター受講

近野 巧（天童市立寺津小学校）森と水の源流館授業づくりセミナー受講

PM：全国ESD研究会 成果報告会

司会進行：新宮 済

やまがたESD研究会 阿部大輔（山形市立千歳小学校）ESDスペシャリスト

屋久島ESD研究会 濱崎昇平（鹿児島県屋久島町立神山小学校）ESDマスター受講

沖縄ESD研究会 屋良真弓（沖縄県南風原町立南風原小学校）ESDスペシャリスト

福岡ESD研究会 遠入哲司（福岡市立田隅小学校）ESDスペシャリスト

愛媛ESD研究会 三浦智子（愛媛県松山市立久枝小学校）ESDマスター受講

5. 担当者（指導助言者）

中澤静男、大西浩明、新宮済

6. その他（感染拡大防止対策の方法など）

令和5（2023）年度 奈良ESD連続セミナー開催要項

1. 目的

学習指導要領が改訂され、前文や総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が明記された新学習指導要領が、幼稚園では2018年度より、小学校は2020年度、中学校は2021年度から全面実施、高等学校では2022年度より実施されている。新学習指導要領が求める教育を実施するためには、教育内容の捉え方の見直しや教育方法の改善が必須であり、ESDを適切に指導する資質能力の育成が、教員養成及び現職教員研修にとって喫緊の課題であることは間違いない。そこでESDの指導者として求められる資質能力を育成することを目的に、本連続セミナーを開催する。

2. 開催日時 【時間はいずれも19時～21時】

- ① 5月 9日（火）：SDGsの理解促進（1）
- ② 6月 6日（火）：SDGsの理解促進（2）
- ③ 7月 4日（火）：ESDの理論研修
- ④ 7月25日（火）：優良実践事例の検討
- ⑤ 8月29日（火）：単元構想案の相互検討（1）
- ⑥ 9月26日（火）：単元構想案の相互検討（2）
- ⑦ 10月10日（火）：単元構想案の相互検討（3）【学生】
- ⑧ 11月 7日（火）：学習指導案の相互検討（1）
- ⑨ 12月 5日（火）：学習指導案の相互検討（2）
- ⑩ 1月16日（火）：学習指導案の相互検討（3）【学生】
- ⑪ 2月 6日（火）：研修の振り返り

研修（6）（7）は、これ以外に実施予定

3. 方法 基本的にはZoomを用いたオンラインで実施

4. 研修内容

- （1）持続可能な開発目標（SDGs）の内容理解
- （2）ESDの学習理論
- （3）優良実践事例の分析と単元構想案の作成について
- （4）ESD単元構想案の相互検討とESD学習指導案・実践報告の作成
- （5）ESD学習指導案・実践報告の相互検討
- （6）ESDカリキュラムマネジメント
- （7）ESDカリキュラム案の作成・相互検討

5. プログラムのレベルと研修

(1) ESD ティーチャーコース

- ①ESD 連続セミナーへの 5 回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
- ②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、1 月末日までに提出

(2) ESD マスターコース

- ①ESD 連続セミナーへの 7 回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
- ②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、そして授業実践をふまえた実践事例を作成（6 P 程度）し、1 月末までに提出（考察をしっかりと記載すること）。
- ③ESD ティーチャー研修中の現職教員および学生の指導案作成指導
- ④研修（6・7）への参加

(3) ESD スペシャリストコース

- ①ESD 連続セミナーへの 7 回以上の参加と毎回のミニレポートの作成
- ②ESD 教材開発と ESD 学習指導案の作成、そして授業実践をふまえた実践事例を作成（6 P 程度）し、1 月末までに提出（考察をしっかりと記載すること）。
- ③ESD ティーチャー研修中の現職教員および学生の指導案作成指導
- ④学会や研究大会での実践事例の発表か、ESD 研修会の開催と報告書の提出
- ⑤研修（6・7）への参加

※3 月末に学長より ESD ティーチャー、ESD マスター、ESD スペシャリストの認定証が授与されます。

※作成された学習指導案や実践事例は近畿 ESD コンソーシアムの HP に掲載します。

※発表のための研究大会参加旅費は、コンソーシアムが負担します。

◇日時：2023年5月9日（木）19時～21時

◇方法：Zoomによるオンライン形式

◇参加者：33名

◇内容：「SDGsの基礎的理解（1）～SDGsの目指すもの～」 奈良教育大学准教授 及川幸彦先生

1. SDGsが提案された背景（グローバル・イシュー）

絶え間ない紛争と対立

顕在化する環境問題

苛烈化する自然災害

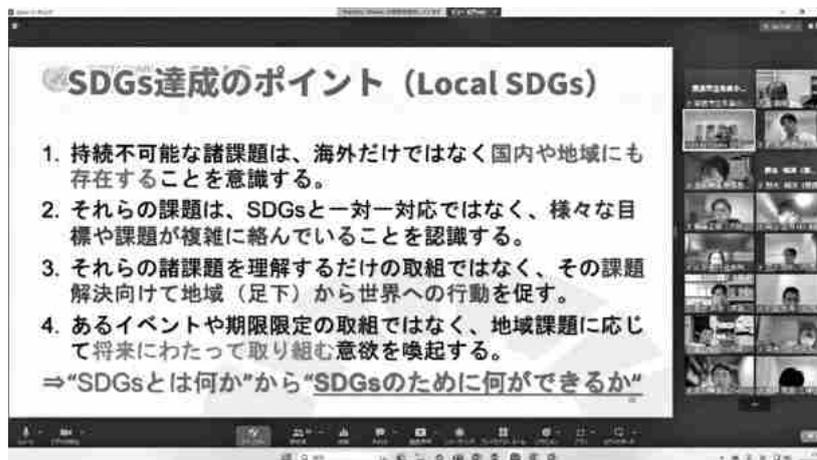
グローバル化と自国主義

経済的格差の拡大

科学技術の進歩と社会構造の変革

人口格差

感染症の拡大



世界の暴力や差別

- ・約2800万人の子どもたちが紛争で故郷を奪われる
- ・推定1億5200万人の子どもたちが働かされている
- ・15歳未満で結婚した女性が世界に推定2億5000万人 など

子どもの貧困と不平等

極度の貧困状態下の7億1000万人のうち、子どもが3億5000万人

絶対的貧困（1日1.92ドルで生活を強いられている）

相対的貧困（その国の所得の中央値の半分以下で生活している）子ども7人に1人程度

母子家庭になると2人に1人

気候変動とその予測

何の対策も取らない場合（RCP8.5） 21世紀末には気温が最大4.8℃上昇

最も温暖化を抑えた場合（RCP2.6） ほぼ現状維持

上昇を1.5℃までに抑えることを世界は目指している

1.5℃以上上昇すると永久凍土が溶け出し、メタンガスが大量に放出される

相乗効果によって「地球が暴走する」

未知の病原菌が凍土から放出されることも考えられる

海面上昇が島嶼国や沿岸部に大きな影響を与えている

世界で災害が多発・甚大化している

災害の増加、気象系災害の件数増加が顕著

4つのプレートに浮かんだ災害列島日本

動植物が絶滅したり生物多様性が失われたりしている

森林伐採と持続可能な生産・消費

パーム椰子から取れるパーム油は、食品、洗濯洗剤、医薬品などに幅広く利用されている
パーム椰子農園の急激な拡大に伴う熱帯雨林の伐採、生物多様性の喪失、土地の劣化、山林火災の多発

海洋プラスチック問題

2050年には海の魚の量を超える？

分解されず、細かく碎ける → マイクロプラスチック

有害物質の付着 生態系への影響

海の世界連鎖で蓄積される 魚介類を通じて人間も？

奈良や山形のように内陸部の子どもたちにこそ海洋教育が大事！

相対的貧困 国際比較と貧困の連鎖

日本の貧困率は OECD の平均を上回り、G7 ではアメリカに次いで高い

→ SDGs で貧困の連鎖を断ち切りたい

ジェンダーの格差

日本のジェンダー格差は 120/156 位で、先進国で最低レベル

新型コロナウイルスの感染拡大

新たな脅威

2. SDGs がめざす世界

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」

誰も置き去りにしない

持続可能な開発の 3つの側面

経済成長、社会的包摂、環境保護という 3つの主要素を調和させることが不可欠

3つが調和しないと持続可能な社会にはならない（バランス重視）

SDGs のウェディングケーキモデル

1992年 地球サミット → MDGs → SDGs

MDGs（8ゴール 21ターゲット）から SDGs（17ゴール 169ターゲット）へ

途上国に向けた目標

すべての国の目標

SDGs はすべての国の目標であり、包括的で互いに関連している

5つの P People（人間） Prosperity（繁栄） Planet（地球） Peace（平和） Partnership

SDGs が目指す世界像…「誰一人取り残さない」世界の実現

3. SDGs の枠組みと特徴

①MDGs の深掘り（例：極度の貧困 → あらゆる貧困） 1・2・3・4・5・6

②先進国にも関わりの深い新たな課題 7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17

普遍的：目標は普遍的なものであり、すべての国とすべての人による行動を必要とする

すべてが関連しているので、1対1対応、個別対応ではいけない 総合的に取り組むことが必要

幅広く野心的であり、「誰も置き去りにしてはならない」ことを強調

4. 奈良（地域）の課題に向き合う SDGs

達成度 12/47 位

自己充足度 5 位 尊厳指数 2 位 命指数 9 位 自殺死亡者数が少ない など
女性雇用率 47 位 公共施設の耐震化率 44 位 社会教育学級講座数 45 位 など

地域に根差した ESD for SDGs

SDGs 達成のポイントは、「ローカル SDGs」

- ①持続不可能な諸課題は、海外だけではなく国内や地域にも存在することを意識する。
- ②それらの課題は、SDGs と一対一対応ではなく、様々な目標や課題が複雑に絡んでいることを認識する。
- ③それらの諸課題を理解するだけの取組ではなく、その課題解決に向けて地域（足下）から世界への行動を促す。
- ④あるイベントや期間限定の取組ではなく、地域課題に応じて将来にわたって取り組む意欲を喚起する。

地域の文脈に即し、地域の課題に向き合う SDGs の推進（大牟田版 SDGs）

「SDGs とは何か」 から「SDGs のために何ができるか」

N 助（ネットワーク）型研修プログラム ex) アクサ減殺教育プログラム

多様な主体の参画と協働による豊かな学びの創造

N 助は地域・全国・世界の重層的ネットワーク

子どもの世代に貧困が連鎖 → 日本全体の経済も下向きになっていく

家庭が経済的に豊かでなくても、保護者の学歴が高くなくても、子どもを取り巻く家庭・学校・地域での人間関係が豊かなものになっていれば、子どもの学力はかなり高いものとなる可能性が強い。

この状況をつくり出すのが教員の役目ではないか

第2回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年6月6日(火) 19時～21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 36名
- ◇内容 SDGsの基礎的理解②
「SDGsの達成に資する教育 ESD for 2030の国内外の動向」 及川幸彦准教授

1. ESDとSDGsの策定経緯

- 1992 リオデジャネイロ地球サミット「アジェンダ21」 ESD
- 2000 国連ミレニアム・サミット MDGs
- 2002 ヨハネスブルグ・サミット 日本がESDを提案
- 2005 DESD 国際実施計画を策定 DESD
- 2009 ESD世界会議 ボン宣言の採択
- 2014 ESDに関するユネスコ世界会議(名古屋・岡山) GAP
- 2015 「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の採択 SDGs
- 2019 「ESD: Towards achieving the SDGs」の採択 ESD for 2030

SDGsの達成に向けた教育

目標4: すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する
教育を通じて、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする



- ・ ESDは持続可能な社会の担い手づくりを通じて、17すべての目標の達成に貢献するもの
- ・ ESDをより一層推進することが、SDGsの達成に直接・間接につながっている
- ・ SDGsを、ESDで目指す目標が国際的に整理されたものとして捉えることもできる

ESD for 2030 ロードマップと実施施策

- ①SDGsの17のすべての目標実現に向けた教育の役割を強調
- ②持続可能な開発に向けた大きな変革への重点化
- ③ユネスコ加盟国によるリーダーシップへの重点化

実施のためのメカニズム

国レベルでの ESD for 2030 の実施（国内イニシアチブの設定）
パートナーシップとコラボレーション
行動を促すための普及活動
新たな課題や傾向の追跡
資源の活用
進捗モニタリング

2. ESD ユネスコ世界会議とベルリン宣言

「2030 年に向けて、SDGs のすべての目標達成のカギは ESD
ベルリン宣言（我々の約束）のポイント

- ①気候変動を基軸とした相互関連的な ESD
- ②教育の各段階・各分野における包括的な ESD
- ③科学知識や新技術へのアクセスした ESD
- ④緊急的かつ喫緊の課題に対応した ESD
- ⑤ESD 推進の体制づくりとネットワーク構築

日本からの発信（成果：3つの強み）

- ①ESD を学習指導要領（ナショナル・カリキュラム）に組み入れた 組織的・計画的な ESD を推進
- ②政府に「ESD 関係省庁連絡会議」や「ESD 円卓会議」を設置し、オールジャパンで ESD を推進
- ③各地域における課題解決と地域創生を目指して、地域に根差し、地域の文脈に即した ESD を推進
（主な施策）
 - ・国の ESD 推進のイニシアチブを強化するため、新国内実施計画を策定
 - ・学校教育での ESD のより一層の推進を図るため、「ESD 推進の手引」を改訂
 - ・東日本大震災の教訓や気候変動による災害の多発化・甚大化を踏まえ、防災・減災への ESD の貢献を発信

第2期 ESD 国内実施計画

- ①ESD を実践するために多様なステークホルダーを巻き込む
- ②ステークホルダーごとの具体的な取組を5つの優先行動分野に記載
 - ・ ESD の政策への取り込み
 - ・ 機関包括型アプローチの実施
 - ・ ESD を実践する教育者の育成
 - ・ 持続可能な開発のための変革を進める若者の参加の支援
 - ・ ESD を通じた持続可能な地域づくりの促進

「ESD 推進の手引」（令和3年5月改訂）

- ・ ESD 実践のためのカリキュラム・デザインや学校内外での連携方法の促進について内容を充実
- ・ 具体的な取組事例の記載を充実

教育を変革するために

カリキュラム・デザインとマネジメント
システム構築（校内・地域）
ガバナンスとリーダーシップ

SDGsの今後の展開（外務省の議論を踏まえて）

- ①持続不可能な諸課題は、海外だけでなく国内や地域にも存在することを意識する。
- ②それらの課題は、SDGs と一対一対応ではなく、相互に関連していることを地域の課題に即して認識する。
- ③それらの諸課題を理解するだけの学習ではなく、その課題解決に向けて地域から世界への行動を促す。
- ④学校教育や社会教育、企業、市民レベルでの人材育成を通して、生涯にわたって実践意欲を喚起・持続する。

ユネスコの最新の動向

「UNESCO Greening Education Partnership」 気候変動に関する教育

日本のユネスコスクールで気候変動に関する教育を行っているのは、約 20%
環境教育を行っているのは 80%なのに・・・

ESD for SDGs 推進の 5 つの視点

- ①SDGs の目標とこれまでの地域や学校の取組を関連づけ整理する
- ②SDGs の視点で、身近な取組の国際的な課題への貢献を評価する
- ③各目標が相互に関連していることを地域課題から整理・意識する
- ④SDGs を国や地域の課題に即して、焦点化し優先的に取り組む
- ⑤SDGs の達成には、教育（人づくり）が重要であることを再認識する



「自己実現」の教育から、「共に生き、共に創る」教育へ
ESD : Towards achieving the SDGs = ESD for 2030

第3回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年7月4日(火) 19時~21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 29名
- ◇内容 ESDの学習理論 中澤静男教授
ESDの授業づくり「単元構想図の作成の仕方」 大西浩明特任准教授

ESDについての基本的理解

人間性を育てるために、実社会を教材に、説明一納得型ではなく、問題解決型の学習を展開する
「関わり」「つながり」を尊重できる個人

地球や人類社会の持続性の向上を

1. 学習指導要領に即した学びの構築

学習指導要領の基盤的理念としてのESD

→ 日本中すべての学校でESDの理念を基盤に据えた学習が展開される

「見方・考え方の育成」

- ① 知識・技能 事実に知識(断片的知識)
- ② 思考力・判断力・表現力 知識の構造化
覚えるより考えさせる授業を
- ③ 学びに向かう力・人間性

「主体的・対話的で深い学び」

- ① 子どもにとって切実感・必要感があるもの。興味・関心があるもの。
- ② 一斉授業ではない 一問一答式×
- ③ 子どもの生き方や考え方・行動に影響を与えるような学び
知識+感動(発見・共感。驚き)のある学び
他の学習にも転移する汎用性のある学び

その他、ESDの特徴

- ① 多様な他者の参加を推奨
- ② 五感を通じた学びを展開し、行動化を促す
- ③ 現状だけでなく、過去と未来という時間軸を持ち込んでクリティカルシンキング、長期的思考力を育てる
- ④ 答えのない問いの追究
- ⑤ 課題解決のために、「自分ができることを考え、行動化」を促す

2. 持続可能な社会の実現のために本当に大切なもの

- ① 国際協力
- ② 技術革新
- ③ 新しいシステム(制度) ここまでは企業や行政によるトップダウン
- ④ 多くの市民の参加・協力(ボトムアップ) ← 教育の役割 ESD

3. ESD で育てたい価値観

- ① 世代間の公正を重視する
- ② 世代内の公正を重視する
- ③ 自然環境や生態系保存を重視する
- ④ 人権・文化を尊重する
- ⑤ 幸福感を大切にする

利他的行動、自然との交歓、人との交歓 ← その価値観を育てる活動
Care できる子どもを育てる（気にかける、思いやる）

4. 持続不可能な状況に「気づく」ために

ソマティックマーカー仮説

生き残りの確率を高めるためのもの（生物・人類の歴史において獲得した）

もともとは先天的に備わっているものだが、経験や教育によって鍛えることができる

→ ソマティックマーカー装置を育てることが、持続不可能な状況をつくり出すものに気づく
その改善に向けた行動化を促す

持続可能な社会づくりに効果がある

→ 繰り返し学んだり経験したりすることで、ソマティックマーカー装置が洗練される
学校教育全体、様々な教科・領域、学校行事で取り組む

ソマティックマーカー装置を育てるために

知識の網の目をつくる 網の目が変なものを引っ掛けて信号を発してくれる

繰り返し経験すること、繰り返し学習することで、網の目を細かくできる

見えていても気付けない「脳」の特徴

脳に意識化を促すことで「気付く」ことができるようになる

そのための方策

- ・仲間とともに学ぶ（友達からの刺激）
- ・記憶の蓄積を図る（繰り返し学ぶ・経験する、多様な場面で多様な方法で学ぶ）
- ・感性を伴って学ぶ（現地での学習、体験的な学習のよさ）

多様な ESD 実践を展開することで、気づく力を高める！

5. ESD で育てる見方・考え方（ESD の視点）

多様性、相互性、有限性。公平性、連携性、責任性

6. ESD で育てる資質・能力

クリティカルシンキング

システムズシンキング

長期的思考力

コミュニケーション力

協働的問題解決力

メタ認知力・自己評価力

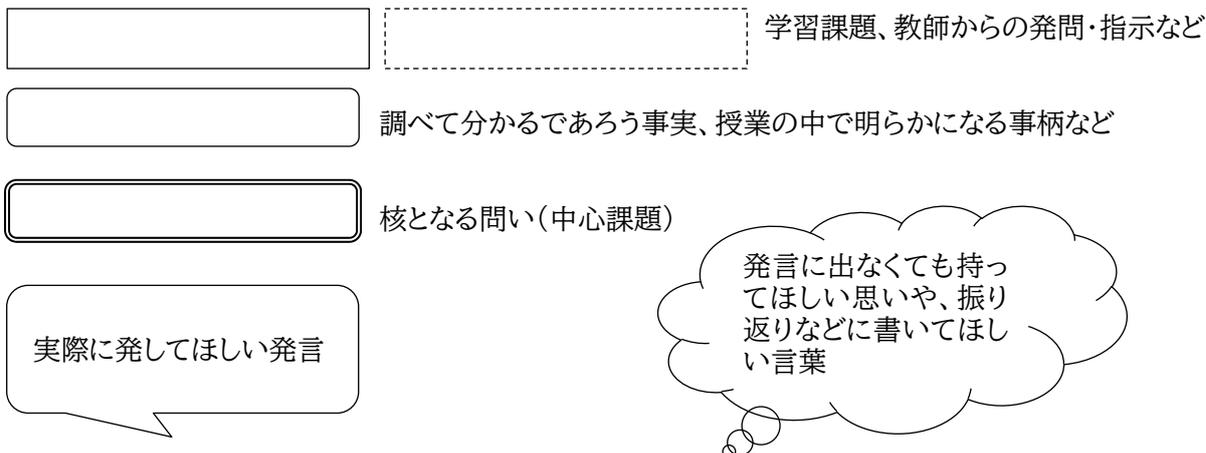
ESD の授業づくり (単元構想図の作成について)

◆どれだけ具体的に授業をイメージできるか

子どもの反応(発言、疑問、思い、どう動くか…)をイメージしないと、具体的にはならない

単元構想図

具体的な授業をイメージして、児童・生徒が発するであろう言葉や、もつであろう思いなどをマップ化して、学習の流れを可視化したもの



◆問いの質を高める

探究的な学びを進めていくには、問いの質が重要!

- ・単元の目標につながるもの
 - ・単元の流れで必然性があるもの
 - ・答えがいくつあるもの
- 言葉やその使い方にこだわる

子どもの疑問や思いから醸成されたもの
単なる教師からのトップダウンではないもの

- ① 単元を通して核となる問い
- ② ①を深めるための問い
- ③ ①を発展的に考える問い

単元展開の中で、こういうことについて、考えさせたい、話し合わせたい、自分なりの行動計画を立てさせたいというものを明確にできるなら、どの問いから考えてもいいと思います。

◆ESD の授業を構想する際には・・・

その題材(教材)を通して学習することで、

- ・どんな ESD の見方・考え方を働かせることができるのか
- ・どんな ESD の資質・能力を育てることができるのか
- ・どのように ESD の価値観を変革させようとするのか
- ・どのような ESD 的な行動化を求めようとするのか

視点、資質・能力、価値観については、項目だけを羅列するのではなく、学習内容に落とし込んで、その説明を書く。

p.3 参照

↓
SDGsの何を達成することに貢献するのか

入江泰吉の風景写真

飛鳥や奈良の「たからもの」（自由研究）

校区に写真美術館があるね。
入江泰吉という人を知ってる？

飛鳥校区のお地蔵さん

飛鳥や奈良にはいろいろな『たからもの』があるなあ。

写真美術館…？
あるのは知ってるけど…。

きれいな写真だなあ。
奈良っていいなあ。
どうやって撮るのかな。

入江泰吉ってどんな人？ 写真美術館って？

- ・ 入江泰吉は、飛鳥小学校の卒業生
- ・ 奈良の風景や仏像を写真に撮り続けた人
- ・ 戦後、アメリカに仏像が持ち去られてしまう前に記録に残そうとした
- ・ 写真美術館は、入江泰吉の死後、1992年「奈良市写真美術館」として開館した西日本初の写真専門の美術館。入江の作品約8万点を所蔵している。

なぜ、入江泰吉は奈良を撮ることにこだわったのだろうか？

写真美術館へ行ってみよう。入江泰吉の話を聞こう

奈良のすばらしさが
伝わってくる写真が
たくさんある！

イメージ通りの写真
が撮れるまで何時間、
何日も持ったなんて…。

自分が納得する写真
を撮るために努力し
続けたすごい人なんだなあ。

入江泰吉は奈良のことをどう思っていたのだろうか？

絶対に文化財を守ろう、
奈良を守ろうと思
っていたのでは。

奈良のことが本当に
心から大切に思い、好
きだったのでは。

自分が大好きな奈良
を写真に撮って多く
の人に知ってもら
いたかったのでは。

もっともっと奈良の
ことを写真に残した
かったらうな。

入江泰吉のように、こだわりを持って自分が美しいと思う飛鳥や奈良の風景を写真に撮ろう
(写真美術館の方に、写真の撮り方を教えてもらおう)

発表会をしよう

いつもなら何とも思
わないような風景で
も、撮ってみるとき
れいなんだなあ。

どの写真もきれいで、
飛鳥や奈良には美しい
ところがたくさんある
んだなあ。

入江さんが愛し、撮
り続けた奈良は、本
当にすばらしいと
ころなんだなあ。

入江さんの写真は
やっぱりすごいな
あ。さすがプロの
写真家だなあ。

飛鳥や奈良というところは、どういうところなのだろうか？

飛鳥や奈良って、こん
なにすてきなところ
なんだ。

すばらしいものがた
くさんあるから、も
っとみんなに知って
ほしい。

飛鳥や奈良のことを
もっと知りたい。

第4回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年7月25日(火) 19時~21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 27名
- ◇内容 優良実践事例の授業分析
大和郡山市立片桐西小学校 教諭 中澤哲也氏
「地域の産業を生かしたESD実践」小学校3年生 総合的な学習の時間

○実践内容

大和郡山市は金魚が伝統産業として続いている

朝どり金魚の自動販売機もある

全国金魚すくい選手権大会は有名

→ それらは子どもにとっては「当たり前」

- 教材**
- ・柳町商店街の「金魚ストリート」
 - ・市で公認された「金魚マイスター」

金魚ストリートは、各店舗が金魚に関する様々な工夫をしている

「御金魚帖」(店を回ると御朱印のようにスタンプがもらえる)

10年前に、呉服店を営む北谷さんが取り組みを始めた

「観光客が金魚で楽しめる街にしたい」

金魚マイスターは、市で公認されると公共施設などで普及活動を行う



大和郡山市の金魚について知っていることを出し合う

→ 大和郡山市にとって金魚はなくてはならないものになっている

「なぜ、大和郡山市では金魚が有名なのだろう？」

・金魚を学校で飼育して、観察を通して金魚のもつ魅力について調べてみよう

金魚が安心して暮らせる観察池に！ → 飼育池を見るとネットが張っている(鳥除け)

土嚢袋を重しにしてネットを張る

金魚マイスターさんにインタビュー… 長生きする飼い方、金魚と自然環境、金魚への思いなど

「みんなにはもっと金魚のことを大好きになってほしい」

「大和郡山市は金魚のまちだといろんな人に自慢してほしい」

誰かに言われたのではなく、自分のまちをよくしたいと思って活動されている！

・金魚ストリートの見学、北谷さんにインタビュー

金魚すくい体験、金魚の仕分け見学

「この商店街をもっと元気な商店街にしようと思って始めました。今では私の誇りです。」

「みなさんは自分の学校に誇りをもっていますか？」

金魚マイスターさんと商店街の人たちの共通点は何だろう？

自分たちのまちをよくしていこうとがんばっているところ

誰かに言われてやっているのではなく、自分で考えて行動しているところ

自分のまちに誇りをもっているところ

3年生の廊下を金魚ストリートにしよう

3日間開催 全校の人に來てもらって楽しんでもらおう
スタンプラリー ビンゴ クイズ 自動販売機 壁や天井にも装飾
参観での発表会

○質疑・意見交流

- ・この活動はどのぐらい継続しているのか？
 - 総合が固定化していないので今回が新たな取組。
数年は、ブラッシュアップしながら継続できればいい。
- ・地域の人との連携の仕方（どういう情報を出してもらいたいかなど）は？
 - 金魚マイスターの方と打ち合わせをする中で、あまり3年生向きではないと感じたので、話してほしい内容を詳細に伝えた。子どもから質問してそれに答えてもらうような形を中心にした。
- ・生産農家が減少していることや形の悪いものが投棄されてしまうことなど、調べていく中で負の部分に気づいた児童はいなかったのか？
 - 社会科の授業の中で取り扱ったが、ここで特にフォーカスすることはしなかった。
- ・子どもたちがこの学習を通してどう変わったか？
 - 水槽をよく見に行くようになった（自分たちでつくった池だ！）
人に聞くといろんなことが分かる！ 人に注目して考えるようになった。
- ・子どもたちのアウトプットに対する保護者や他学年からの反応は？
 - 他学年からはもう一日やってほしい 保護者からも参加型でよかったという声
学級通信で子どもらの方にもその意見を返す
- ・北谷さんの「学校や地域に誇りをもってほしい」という言葉は、お願いして出てきたものなのか？
 - 打合せで単元構想図を見せながらこちらの思いを話している中で、北谷さんの方からそういう言葉が出てきたので、ぜひ伝えてほしいとお願いした。
- ・実践に対する当初のねらいと、終了後の達成度について教えてほしい。
 - 学校にも多くのごみが散らかっている状況をなんとかしたいと思ったが・・・
負の側面を提示して考えるより、いいところをさらによくするはと考える方が子どもの実態に合っている。結果的にはその方がよかった。
- ・この取組を学校としてどのように発展させることができると思うか？
 - 何もいない池が変わって、2年生も生き物調べでよく来てくれるようになった。
- ・総合が固定化されていて身動きが取れない学校で勤務しているのだが・・・
 - 決まっている活動を、そのときの子どもの実態に合わせて考えると違ったものになることもある
- ・この子どもたちは4年生になってどんな学習を？ 次の3年生もこの学習をするのか？
 - 4年生の授業のことを知らないのが現状。進めてはいるがどうなるかは分からない。
- ・金魚のようなその地域で取り上げたい題材がない場合は？ そんな題材の見つけ方か？
 - 転勤したら、まずは地域の歴史を知ることから始めている 地域を歩く
- ・子どもたち自身が自分たちで何かをつくる、育てるという活動が、いちばん成長するのだと思う。
- ・学校として、各学年の活動を共有することが大事なものは分かっているものの、それをしていないから固定化してしまう要因でもあると思う。もっと積極的に発信していくべきかと感じる。

E S Dとしての授業分析

- ・ E S Dの視点（見方・考え方）
すべての視点があてはまるのでは
連携性 責任性
- ・ 育てたいE S Dの資質・能力
進んで参加する態度…「何とかしたい」「次は〇〇しよう」と思う気持ちが醸成されている
コミュニケーション力…インタビューなどを通して
つながりを尊重する態度…人と人とのつながりが感じられる
他者と協力する態度…みんなで金魚ストリートをつくった
未来像を予測して考える力…今後の自分たちの生き方を考えること
批判的に考える力…なぜ金魚が有名なのかと当たり前を見つめ直す
- ・ 育てたいE S Dの価値観
世代間の公正 世代内の公正 人権・文化の尊重 生態系の保全
幸福感の重視…社会に参画できた達成感、いろいろな人から認められた充実感

いい授業ほど、結果的にすべてがあてはまるようになっていく。
しかし、授業づくりをするうえでは、どこかにフォーカスして考えないと焦点がぼやけてしまう。

授業づくりで大切にしたいこと

「価値観と行動の変容」を目指すために、感性に訴えるような内容に。
教材は自分自身が「おもしろい」と感じたものを。あとは料理の仕方の工夫。

第5回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年8月29日(火) 19時～21時30分
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 36名
- ◇内容 単元構想案の相互検討①

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1) 藤岡晃宏先生（奈良市立三碓小学校） 小学校5年 総合的な学習の時間「世界遺産学習」

「古都奈良の文化財」の現地学習（11月24日）をどう生かすか

校区には文化財のようなものはないが、「残していきたいもの」を考えさせたい
世界遺産写真クイズを導入に、世界遺産そのものや奈良の世界遺産について調べる
ボランティアガイドに案内いただき、東大寺・正倉院・春日大社へ行く
最後に、「三碓八けい（景）（結）（継）を探そう！！」 地域のたからものを考える

意見交流から

- ・奈良は「たからもの」が多すぎて、その価値を理解できていないのではないか。
世界遺産という「もの」だけではなく、有形・無形のものと考えやすいようにしてはどうか。
- ・自分たちの地域にも「守られてきたもの」「大切にされてきたもの」があるはず。
「三碓八けい」を選ぶ基準をみんなで考え合うことで、「たからもの」の価値が理解できるのでは。
- ・継承されてきたもの、されてこなかったものを、人の営みに焦点をあてて考えさせたい。
後継者になることが大事なのではなく、サポーターになることを目標にしたい。
- ・奈良の世界遺産は、どこが「たからもの」なのかをしっかりと追求させたい。
自分の見方で、自分たちの地域の「たからもの」を見つけさせたい。
まずは、単元名に先生のこの学習への思いが表れるようなタイトルをつけることから。

2) 窪田あずさ先生（屋久島町立安房小学校）

小学校3年 音楽・社会・総合的な学習の時間「安房探検隊！」

音楽で「茶つみ」を歌う 屋久島では茶づくりが行われている

屋久島のお茶を飲む → お茶工場の見学（社会科）

地域で作っているお茶について知り、その課題も含めて他学年や他校の友達に発信する

最後に、地域の課題を考え、解決への方策を話し合う

意見交流から

- ・同じ学級の中に茶づくりをしている家庭があるのなら、もっと生かしていきたい。
栄養教諭などにも入ってもらって、「屋久島のお茶はすごい！」と感じさせて学びを進めさせたい。
- ・屋久島の気候や地形、土壌など、お茶づくりに適していることを調べることも大事なのは。
- ・大人になったときにどうなっていてほしいかという視点を大事にして授業づくりしたい。
- ・茶づくりに関わっている人たちの苦労や工夫に迫ることが、社会科の目標でもあるのではないか。
その苦労や工夫が消費者の「おいしい」につながっていることが感じられるように。
- ・音楽で入るなら音楽で終わりたい。もう一度最後に歌うと、歌声が違っているはず。

- ・「安房の課題」という大きなテーマよりも、茶づくりの課題（生産者・生産量の減少）も含めて、もっと屋久島のお茶をアピールするような取り組みを最後にするのがいいのでは。

3) 吉見香奈子先生（松山市立たちばな小学校）

小学校5年 外国語・総合的な学習の時間「見つけた！My Hero ～愛媛と世界をつなぐ人～」

現在、外国語専科 なんとか自分事化できる外国語の学習を目指している

「My Hero」の単元では身近な人を取り上げているが、つい一般的なHeroを考えてしまう

5年生では総合で環境について考えていて、地域について考える学習をしている

愛媛のHeroを取り上げさせたい 世界で活躍する地域のHero

自分が見つけたHeroを英語で紹介させたい

意見交流から

- ・紹介する際に、小学生では覚えられないような難しい言葉を入れる必要はないと思うが。

→ Who is your hero?

She can dance very well.

I like my sister very much.

She is good at～.

She is(形容詞).

これが基本フレーズであって、どうしても日本語でしか説明できないものは日本語で。

- ・Heroはだれかを考える中で、地域のことをよく知ることができる取り組みにしたい。
- ・ALTがいるのなら、その人に紹介するようにすると、愛媛のことを伝える取り組みになるのでは。
- ・発信のところで「canva」を使うと、スライドショーになっておもしろいかも。
- ・発表するときにキャッチフレーズを一つ考えて、それにふさわしい表現は何かを考えるのもいい。

4) 中澤哲也先生（大和郡山市立片桐西小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「2023 片西平和プロジェクト」

昔の写真をAIでカラー化したものを見せる 白黒と比べて生き生きと見える

カラー化に取り組んでいる庭田さん（東京大学4年生：広島出身）を取り上げる

「なぜ、庭田さんはモノクロ写真をカラー化したのだろう？」

小学校5年生のときに、中島地区の被爆前の写真に出会う

今と変わらない現実がそこにある！

修学旅行で庭田さんの講話、いっしょに中島地区を歩く

3学期、市内の小学校に伝える活動 「核兵器を世界からなくすために」

意見交流から

- ・写真という、誰もが持っている思い出が導入というのがいい。
庭田さんは子どもたちと年齢も近く、語り部さんから聞くのとは違って話が入りやすいと思う。
- ・「核兵器を世界からなくすために」は、子どもができないことが多い。「核のことをもっと知ろう」でもいいのでは。フクシマの原発事故のことを取り上げても。
- ・ロシア、ウクライナのことを言っても、なかなか自分ごとにはならない。
- ・庭田さんにせっかく協力してもらえば、子どもの考えたことを聞いてもらう機会をつくっては、庭田さんからのフィードバックがあれば、さらに広がりがある。

- ・私にとっての「平和」とは？ 写真で入ったから、そんな写真を撮って自分にとっての平和について語れる場面をつくってはどうか。

【ルーム2】ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 榎木敏之先生：榎木先生（熊本市立天明中学校）

中学校1年 総合的な学習の時間「見とこ・知とこ」プロジェクト（自然環境編）

生徒の実態

天明地域ではホタルの復活を目的に地域活動が展開されている。地域の環境保全隊の方々が、ホタルの学習をしてくれているが、生徒の学習態度は受け身である。→ 主体的に学習に取り組む態度を育てたい

①天明地域の自然環境の変化を調べよう

ホタル以外にもいなくなってしまった生き物がいるかもしれない

②他の地域では、環境保全活動としてどのようなことをしているのだろう

日本・世界で起きている環境問題や保全活動を調べてまとめる

③他の地域での環境保全活動を参考に、天明地域でできることを考え、行動する。

意見交流から

- ・天明地域では1中4小でホタルの取組が行われているがうまくいっていない。一方4つの公園での取組は成果が出ている。公園での取組に生徒を積極的に関わらせ、地域の方々と協働する機会を提供する。
- ・天明地域では、不要になった海の杭を炭にしたり、川を生き返らせることを目的とした森づくりなどの環境保全活動も展開されている。学校で新たな取組を考えるよりも、既存の団体の取組との連携を中心にして、一生懸命活動している人々と出会わせることで、生徒の変容が期待できるのではないか。

2) 古本大周先生（熊本市立天明中学校） 中学校2年 保健体育科「健康と環境」

①なぜ日射病や熱中症が増えているのだろう。

温暖化の現状（日本と世界）

温暖化の原因

温暖化の影響（台風、食料生産、健康被害）などを調べてまとめる

②自分たちにも地球にも優しい生活スタイルを作り出すために、どのように行動していけばよいのか

意見交流から

- ・大きなテーマなので、「自分事化」がポイントになる。熊本県气象台や熊本県温暖化防止センターと連携し、温暖化の客観的データを取得する。生徒は今の気候が当たり前と思っている。改善するためにはクリティカルに捉えることが必要なので、時間軸を持ち込んで、過去のデータと比較する。
- ・生活スタイルを発信したり、自分の生活スタイルを変えたりしても、温暖化の緩和への影響はよくわからない（見えない）。発信して終わりにならないようにすることが難しい。
- ・日記形式で、自分の取組を記録させ、ある程度たってからレポートにまとめさせる。

3) 井阪愛子先生（平群町立平群中学校） 中学校3年 「修学旅行を通じた平和学習」

○探究から探求へ

探究的な学びでおわることなく、自己の生き方にせまる探求学習を行いたい

①事前学習

沖縄について知りたい気持ちを高めるために。

沖縄に関する詳しい情報を伝え、修学旅行の意義を考え、わくわく感を醸成する行く前に見たいことや知りたいことを整理させたい。

- ・ひめゆり学徒隊のビデオ視聴 同じような年齢の少女たち 自分事化を促す
 - 語り続けないと 資料集を作成して持っていこう
 - それぞれの関心にもとづいて作成する（教員もつくった）
- 戦争について肌で感じ取れるようにしたい
- ・平和のネットワークに連絡をとり、平和の礎に関する資料を取得する

②修学旅行中

- ・平和セレモニー ・平和祈念資料館見学 ・ガマ体験（語り部ボランティア） ・基地など

③事後学習

文化祭で多くの人に伝えよう

社会科での「平和について考えよう」のレポート作成

○探究から探求へ

沖縄をテーマに平和について探究する学習を通して、自分の生き方を考えていく（探求）

アンケート「生きていくうえで大切にしたいことは何ですか？」

意見交流から

- ・探求のアンケートについては、学習前にも同様のアンケートを行い、学習後と比較すればよかった
- ・アンケート内容がよかった。立ち止まって考えることで、修学旅行での体験の意味を、生徒が深めることができたのではないか。
- ・探究から探求へのつなぎをどうしたのか？少し距離感があるのでは。
ひめゆり学徒隊や平和の礎について、同じくらいの年齢の人たちがどのように生き、何を感じていたのかにフォーカスした。同じくらいの年齢の人たちであったことが、自分はどのように生きるのかという探求を促すことができたのではないか。

【ルーム3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 屋良真弓先生（沖縄県南風原町立南風原小学校）

小学校6年 社会科・総合的な学習の時間「平和でゆたかな暮らしを目指して」

算数科を起点にした総合、社会科の横断的な取り組みについて報告した。

教材として取り上げた「花ブロック」は沖縄独特の外壁のデザインであり、戦後アメリカ軍が持ち込んだコンクリートを使った建設によって広がった。

風通しがよくさびることもなく、沖縄織物の絣模様から生まれたといわれ、戦後の沖縄の復興の歴史や風土を学ぶことができる。

本実践では、算数の「対称」の単元で、花ブロックを取り上げ、対称な図形を使った設計に取り組みながら親しんでいく。

その後、花ブロックの歴史的な背景を学び、沖縄の人々が戦後復興にどのように向き合っていたのかを学習する。

参加者からは、花ブロックの教材としての価値が高いために様々な展開が考えられ、どのように学習をまとめていくべきかという点を中心に意見が出された。

2) 竹田光陽先生（生駒市立生駒東小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「今ある生活を、当たり前と捉えない自分になろう」

国や地域によっては学校に通えない子どもたちがいることに気付かせ、卒業を前にした6年生に対し学校に通うことの意味を改めて考えさせようとする実践。

子どもたちにとって身近ではない途上国の貧困を扱うため、どのように子どもたちが自分ごととして考える問いを設定するかを中心に参加者から意見が出された。

実際に東南アジアの学校と交流することも検討されており、実際に現地の人と会うことでどのように学びが促進されるのか、どのように気づきを拾い上げていくべきかについて意見が出された。

3) 栗谷正樹先生（大阪市立今川小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「百舌鳥古墳群を未来に伝えよう」

世界遺産となった百舌鳥・古市古墳群に着目した実践。

戦後復興の時期には、必要な土を得るため古墳が壊されていったことがあった。

それを問題視して古墳を守ろうとした人たちの取組や、現在も保全活動を続けている人たちの思いに気付かせ、地域の文化財の価値に気付かせようとする。

授業者からは現地に足を運んで地域の方にインタビューをした結果などを交えて説明があり、古墳に関わる人の思いを授業内で取り上げていくことの良さが確かめられた。

4) 高良直人先生（沖縄県那覇市立松島中学校）

中学校2年 総合的な学習の時間「すい（首里）まちま〜い 探求学習」

首里にある自然や文化遺産に着目し、フィールドワークを通して子どもたちが感じ取っていく。

そのうえで、「首里の豊かな自然や文化遺産を守り、伝承していくためには、どんなことができるだろう？」という問いによって、自然や文化を守る様々な取り組みに気付いていくという構想。

沖縄の価値は、県外からでは観光自然ばかりが目につくが、そこで生活している子どもたちだからこそ気付くことができる魅力がある。

こうした価値に気付かなければオーバーツーリズムが深刻化して、ますます自然や文化遺産の保全は難しくなるため、ぜひ子どもたちが気付いた魅力を県外の観光客に向けて発信してほしいとの意見があった。

【ルーム4】ファシリテーター：新宮済（奈良女子高等学校）

1) 坂元達哉先生（屋久島町立神山小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「生かそう屋久島のみ力 創ろうわたしたちの未来

屋久島世界遺産登録30周年記念プロジェクト」

世界遺産30周年とかけながら、神山地域を舞台にして神山型SDGsをつくり行動していく
昨年の神山小のESD実践「かわひこ」につづくような実践をつくりたい。

現在具体的な行動について現在考えていて、意見交換したい

意見交流から

- ・島民ができる身近な行動とあるが、具体的な行動は…。
- ・屋久島らしさを追究してほしい。
- ・世界遺産認定を抑えることが大切。

- ・行動化について一つひとつ精査していこう。
- ・エコツーリズムか、サステイナブルツーリズムを教材研究してみたらどうだろう。
- ・「ここみて 屋久島 SDGs 学び旅」的なアクションが面白い。

2) 石山葉月先生(山形県立高畠高校) 高校1年 国語 言語文化 芥川龍之介『羅生門』(全10時間)

授業の中盤までは国語として読む力を育成する、その後ESDを行う。

下人について読み進めることを通じて、普段自分事ではない「貧困」について疑似体験し、貧困について考える。

また貧困についての解決の一つとして社会保障制度について役場の方から学ぶなかで、幸福な生き方について思考していく。展開について意見交換がしたい。

意見交流から

- ・「どうしたら下人にならなかったかな。」
- ・国語の授業で役場の方に出会わせる方を工夫した方がいい。
- ・社会保障について考えることで、解決の方法についても考える。
- ・さまざまな飢餓、極限状態を「羅生門」から伺い、人の本質、幸福について考えていくことの先駆性に期待している。

3) 川邊甲余子先生(奈良市立伏見小学校) 小学校2年 生活科「未来のおもちゃ館」

生活科「おもちゃづくり」の単元において、奈良町からくりおもちゃ館とコラボESDを行う。

教科書通りでおもちゃを作る→奈良で受けつがれてきた「からくりおもちゃ」に出会い、遊び比べる。

→からくりおもちゃが大切に受け継がれてきたことを2年生なりに理解する

→からくりおもちゃを発信するために未来のおもちゃ館をやってみる

意見交流から

- ・「未来のおもちゃ館」となると、すごくたいそうなものを作らなければならない感じがするので、「令和のおもちゃ館」くらいにしておいた方がいい。
- ・「なぜ残されているのか」という問いは2年生には難しいかもしれない。
- ・からくりおもちゃ館とコラボして館長さんと呼んで学習を深めるのがおもしろい。
 - そういった言語化ではなく、館長さんの熱意であるとか、からくりという昔の人の工夫とかを感じて、おもちゃ作りに生かすことができるといったことに焦点を当てればいいのではないか。
 - からくりおもちゃのからくり部分は、言わば昔の人の知恵であり、それらを再現させておもちゃ作りをすることは、そういった知恵を感じる活動なのではないか。そういった知恵が生かされているようなものが身近で例として出せると、からくりという知恵のすごさとかを感じられて、遠い昔の人のことではなく自分ごととして生活の中で工夫することにつながっていけばいいのではないか。

【最後に3つの授業をふりかえりながら授業づくりについて意見交換】

- ・現地に足を運んで、教材理解を深めよう
- ・教員も体験して学ぶことが大切。
- ・ワクワクした授業展開をつくるために、教員もアクティブに活動しよう

第6回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年9月26日(火) 19時~21時30分
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 28名
- ◇内容 単元構想案の相互検討②

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1) 原田龍ノ助先生（奈良市立朱雀小学校）

小学校3年 社会科「おそろしい火事からくらしを守ろう」

消防署の見学を中心に、なんとか火事について自分事化できる学びにしたい

「火事が起きたときにだれがわたしたちを守ってくれているのだろうか？」

→ 様々な人たち、機関が協力していることを自分たちで調べる

どのようにして守ってくれているのだろうか？ → 消防署の見学

他の人に守ってもらって当たり前ではない！ 自分でできることは何か考えさせたい

火事が他人事になっているところから、いかに自分事にさせればいいのか

意見交流から

- ・今の子どもは「火を見る」経験が少ない。まずは火を見る必要があるではないか。映像ではなく、生の火を見せることから導入にしていけばいいのでは。
- ・最初にアンケートをとってみればどうだろうか。火事を防ぐために家でどんなことをしているか、子どもと保護者に聞いてみることで切実な課題意識が生まれるのでは。
- ・消防団の人たちの方が、地域に密着して日常的に活動されているので登場してもらってもいい。
- ・朱雀地区には女性防災クラブがあって、紙芝居などもやっておられるようなのでつながってみては。
- ・消防署の見学では、事前にどのような課題意識を持っていくのかが大事。
- ・「火災報知器が鳴って本当に逃げるのか」 火災報知器鳴らしてみる？
自分の中にある「正常化のバイアス」を見つめられると自分事化できるのでは。

2) 森岡美咲先生（奈良市立三碓小学校）

小学校5年 総合的な学習の時間「わたしたちの町の生物を守ろう」

富雄川の生き物を見に行く（生物図鑑を持って） 絶滅して今はいない生き物もいる

かつては富雄川にもいたペタキン（ニッポンバラタナゴ）

近畿大学の先生や学生さんに協力してもらって、ペタキンを飼育する体験 ペタキンの観察

「ペタキンは、なぜ富雄川から姿を消してしまったのだろうか？」

→ 水田や池の環境の変化、水質汚濁 共生関係にあるタガイやヨシノボリはいる

ペタキンが単に残ったらいいいというのではなく、その生物と関係のある生物や生育環境を守る、取り戻すことが大事

意見交流から

- ・飼育しているのだから、「こんなにきれいな魚がいなくなるのは・・・」という思いを持たせたい
- ・富雄川はきれい？ → 過去はきれいだったが今はそうではない。子どもにはいいイメージがない。

- ・水質調査なども取り入れてみては。
学校の中でこの取組を継続させていくためにも、水質改善に長期的なスパンで考える方向でいいのではないか。
- ・ペタキンが生き続けられる環境とは？
→ 共生関係にあるタガイが少なくなったりなど、数のバランスが崩れると生きられない。
- ・昔ペタキンがいたころの富雄川はどんな様子だったのかを知る場面が必要ではないか。
- ・共生関係もそうだが、「いろいろな生き物がいることが豊かなこと」というゴールに。
「いろいろな生き物がいる富雄川にするには？」という最後の問いがよいのでは。
- ・奈良市内にも同じように飼育している学校もあるので交流してはどうか。

3) 山崎佳那子先生（大津市立仰木の里小学校）

小学校1年 生活科「たのしい あき いっぱい」

校内にある「みのりの森」で、「あきをさがそう」

拾った葉っぱや木の実で遊ぼう おもちゃランドをつくって遊ぼう みんなを招待しよう

E S Dの観点で考えると、最後に「これからもみのりの森で楽しく遊ぶためには、どんなことができるかな？」と考えさせたいが、ここにどうつなげていけばいいか

意見交流から

- ・4年生が総合でみのりの森を改善しようとしていたり、E S Dクラブがいろいろやろうとしていたりするのでコラボしたらよいのでは。
→ 成安成形大学が近くにあるので、学生と遊具を作ろうという計画もある。
- ・森林インストラクターがおられると思うので、つながるといろいろな遊びも教えてくれる。
いろんな遊びができると、この森が「お気に入りの場所」になる。
- ・「お面をつくる」だけでも、いろいろな葉っぱや木の実を使って、子どもなりの発想で広がりのある遊びが展開できると思う。
- ・2年生や4年生ともつながって、いっしょに活動できることも結構あると思う。
- ・森の中で寝転がったりすると楽しそう。まずは森でとにかく思い切り遊ばせること。
- ・1年生の生活科なので、最終的にみのりの森が「好きな場所」「大切な場所」になれば十分ではないか。
もっとこうしてほしいことを、4年生やE S Dクラブに伝えるだけでも発信になる。

4) 臼井達也さん（NPO 法人わかやま環境ネットワーク）

高校1年 総合的な探究の時間「地域の空き家について考えよう」（箕島高校）

和歌山県の空き家率は全国ワースト第2位

空き家になっている背景や問題点などについて知り、未来に向けてどうすればいいか考えさせたい

「まちの空き家には、どんな特徴があって、どんな歴史があるのだろうか？」

→ 自分たちにできることは？ お金がかかる 地域に発信して

空き家の利用にはどんな方法があるだろう？

市役所の方にも入ってもらっていて、行政への提案はできると思う（すでに抱えている家もある）

地域に就職する生徒が多く、地域への愛着や関心を深められたら

意見交流から

- ・橿原市今井町の伝統的な地区も多くの空き家が問題になっている。外部から来た人が古民家カフェな

どをしたりしているが、埋まっていないのが現状。

断熱が弱く住みづらいということも、空き家になってしまう要因にある。

- ・過疎化、高齢化など他の社会課題とともに考えていけないのではないか。
- ・高校で「空き地」について学習した。自分だったらこの土地で何がしたいか考えたりした。空き家も、将来自分が大人になったときにどんな家に住みたいか、リノベーションを含め考えたりできるのではないか。
- ・何か行動すれば一石二鳥でことが進むのがE S Dではないかと思う。たとえば、課題と課題をつなげる。空き家問題と高齢化問題をくっつけて考えてみるとよいのでは。

【ルーム2】ファシリテーター：加藤久雄（奈良教育大学）

- 1) 土屋岳先生（山形県立高畠高等学校）
- 2) 小谷隆男先生（奈良教育大学附属小学校）
- 3) 坂本交司先生（奈良教育大学附属中学校）

記録はありません

【ルーム3】ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

- 1) 太田馨先生（山形県山辺町立山辺小学校） 小学校2年 生活科「山辺町を好きになろう」

山辺町の魅力→豊かな自然、ニット（日本代表の公式セーターにも）、ワレモコウ、リンドウ

まずは、校区の地図作りでどんな店やスポットがあるかを子どもたちから出させ、その後、町探検に行くことで、どんなところを深掘りしていきたいかを考えさせていく

2回目の町探検では、自分が決めたところにインタビューをしに行き、町の人との出会いや対話から、自分たちの町の良さを感じることで、山辺町を好きだと思えるような流れにしたい

その後、自分たちの気づきを1年生に発信することで、学習したことのアウトプットを行う予定
小学校2年生という学齢で

- ・E S Dとして成り立つかどうか。素地を育むという感覚でいいのだろうか。
- ・「行動化」としてどんなことができるだろうか。

意見交流から

- ・E S Dとして目に見えるような成果や行動化は、難しいと思うので、思っておられるように素地を育むというくらいの気持ちでいいと思う。
- ・発信はなぜ1年生相手なのか。学校内での流れとしてそうなっているのか。
 - あまり深くは考えていなかった。流れもあるし、大人はわかっているだろうから、何も知らない1年生に伝えるのがいいかと思った。
 - 大人は本当にわかっているだろうか。地域の大人に向けて発信することで、大人も知らなかったこと、気づいていなかったこともあるかもしれない。1年生も2年生の発表を聞いて、何かしらの学習意欲や生活に変化はもたらされるだろうか。
- ・町の人とお話をしようというのはいいと思う。そこで人に出会い、話を聞くことで、工夫や努力に気づき、自分たちの生活とのつながりを見つけることができるのではないか。それは目標としている相互性や連携性につながると思う。そして、親を含めた大人に向けて発信すれば、買い物をする場所など生活の中に変化が生まれることもあるだろう。
- ・インタビューをするときに、「山辺町は好きですか。」というような質問を必ず入れるとか、聞いた内

容をお互いに聞きあって、共通点をさがしてみるのもいいのではないか。

2) 入澤佳菜先生（奈良教育大学附属小学校） 小学校1年 生活科「おうちのひとのしごと」

家事労働の中で「洗濯」を取り上げて、その工夫や家庭によつての共通点や相違点にきづいていくようなことが目標

お手伝いをさせることが目標ではなく、家の人と一緒に洗濯をしたり、話を聞いたりすることで、洗濯は洗濯機が勝手にやっているのではなく、家の人と考えて洗剤を選んだり、使い分けたりして行っていることであることを感じさせたい

保護者にゲストティーチャーにも来てもらって話を聞く活動を取り入れる

ESDとしては明確な行動化は難しいと思うので、ESDの素地を育むような学習として位置付ける
意見交流から

- ・ ESDの価値観は「幸福感」でいいのではないか。当たり前洗濯されていた服も家の人がいろいろなことを考えて、工夫して洗濯してもらっているということに幸福感を感じるはずだ。
- ・ 貢献できるSDGsは、「健康」ではないか。また、「洗濯しているのはお母さんばかりだ」みたいなことがあれば、「ジェンダー」にもつながるかもしれない。
- ・ 「洗濯は洗濯機がする」ということにクリティカル・シンキングも働くのではないか。
- ・ 保護者にインタビューではなく、ゲストティーチャーなのがいいと思う。母親の立場で話をしたいと思うし、聞いてほしいとも思う。
- ・ 身近な暮らしの中から「洗濯」というテーマで、ESDとして低学年にでも取り組みそうな内容で、すごく面白いと思う。

3) 三上凜矩先生（山形市立第三中学校） 中学〇年 総合×音楽 「花笠音頭」

花笠音頭は、労働者が作業時に歌っていたものがもとになっているが、現代の花笠まつりで歌われているものは、祭りのために歌詞を公募したり伴奏をつけたりしたもので、元の原型は伝わっていない校区に近いところで行われる花笠音頭について、自分たちで調べたり、大学のサークルの人たちとも連携して教えてもらったりすることで、花笠まつりが行われている地元の子どもたちが愛着を持てるようにしたい

他の地域で伝わっている民謡との対比し、その共通点や相違点などにも気づかせたい。

悩んでいること

- ・ 導入での工夫。
- ・ 音楽科としてのESDが成立しているか。

意見交流から

- ・ 小学生時代に表現運動などで経験しているのか。また、山形では花笠音頭を学校や地域で活動しているような実態があるのか。
 - そこは未調査だったので、実践するときには調査して、実態に合わせる必要がある。
 - 学校や地域によっては行っているところはあるが、現任校では行われていない。
 - 発信・行動化として小学生に伝えるというのもいいのではないか。
- ・ 導入で原型の花笠音頭を聞かせて、「これは何の民謡なのか」という問いかけをしてみてはどうか。今のものとは違うということで、生徒も聞いたことがないものであろうから、なんで今のものと違うのかと調べるきっかけになっていくのではないか。

- ・音楽科としてESDの授業づくりをするときには、やはり音楽科としての表現や活動を入れて評価できる方がいい。歌詞に注目すると当時の人たちの思いに触れることができることもある。(例として「茶摘み」など)
 - 歌詞を現代風にリメイクしていくのもおもしろいかも。奈良でも万葉集を「超訳」といって、現代風にリメイクした取り組みも過去にあった。
- ・運動会でソーラン節を踊るが、あれもニシン漁の漁師さんたちの歌であるし、つらい作業の時に音楽の力で乗り越えようとして生まれたものは他の地域にもあるだろう。
- ・今年、自分の小さな子どもを連れて花笠まつりに参加したが、一般参加のところで楽しそうに参加していた。そういうところに参加する、もしくは参加してみようと思える生徒になれば、実践としても価値観の変容がみられるということになるのではないかな。

4) 堀川孝子先生(奈良教育大学附属中学校)

中学校3年 英語×総合 「奈良を発見 お土産 Brush up プロジェクト」

奈良の魅力を発見・発信するために「お土産」に視点を置いて考えた
心に残るお土産とはどんなものか。

ハッピーな体験、作り手の思いに触れるようなものではないかといったことをテーマにお土産を Brush up させて、最終的には企業とのコラボ商品なんかが開発できればいいなと思っている
調査として英語で外国人にどんなお土産を買ったのかをインタビューし、それをグループごとに報告していくと、「大仏」「シカ」といったお土産ばかりになっていて、心に残るようなお土産になっていないのではないかな。そういったところからお土産の Brush up の必要性を感じさせたい

「奈良ならではのカタチに」をコンセプトに、プレゼンを考え、そういったものを企業に向けて発信できたらいいなと思っている。

意見交流から

- ・「心に残るお土産とは」を考えるときに、自分たちの経験をもとに話し合せてはどうか。「なんとなく」や「どこどこに行ったから」ではなく、「こんな思い出があって、このキーホルダーを買った」のようにエピソードが話せるというのが、「心に残るお土産」なのではないかな。例えば外国人の人がシカのキーホルダーを買っていて、なぜそれを買ったのかインタビューしたときに、「シカに噛まれた思い出があるからだよ。HAHAHA」とか「シカがとてもかわいかったから」みたいなものは、「心に残るお土産」だったのだと考えられますね。
- ・「奈良ならではのカタチに」でプレゼンを企業に向けてするのもいいが、「こういうところに行くと、こんな体験ができますよ。」と外国人観光客におすすめしに行くという活動も英語を使う必要性があっただけではないかな。そういったアウトプットをするためには、奈良の良さをしっかりとインプットしなければならないので、調べる必要性が増すのではないかな。
- ・大学でそういったことを考えているところもあるのではないかな。そういうところと連携するのもいいのではないかな。
- ・お土産の商品開発はハードルが高いが、英語パッケージのデザインなども企業に提案するものとしてはいいのではないかな。
- ・この「心に残るお土産」、「ハッピーな体験」といったワードがワクワク感があって、すてきだと思う。

第7回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇実施日時	2023年10月10日(火)19時~21時
◇方法	ZOOMによるオンライン開催
◇参加者数	30名
◇内容	単元構想案の相互検討③

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1) 田中絃太郎先生（長浜市立速水小学校）

小学校3年 総合的な学習の時間「大豆はかせになろう！」

学校の総合的な学習の時間のカリキュラムにある → なんとかESDの視点を入れて考えたい
国語科「すがたをかえる大豆」との連携

1学期種植え → 観察・写真記録 2学期収穫 → 調理（豆腐づくり）・まとめ
3学期まとめの発表 長い時間をかけてようやく食べられるという体験 調理の工夫
調べ学習で何をどのように調べればいいのか

意見交流から

- ・切り口はいろいろあると思う。いろいろな食品がある。食文化の切り口もある。
- ・大豆＝タンパク質なので、家畜を育てることの問題にも入り込めるかも。
- ・豆腐作りでも、合成的なにがりではなく、自然のものを使うとSDGsの視点が入る。
- ・日本の食文化の中で大豆や豆腐などがどのように扱われているのかを調べるだけでも。
- ・「大豆から何ができるか?」「どんな料理があるか?」それだけでもものすごい量がある。
- ・おからの栄養価の高さを考えると、廃棄の問題もからめられていいのでは。
- ・大豆のもつ価値、特に私たちが普段食べているものの中に占める大豆の重要性を感じさせたい。

2) 中嶋千智さん（家庭科教育専修3回生）

小学校5年 総合的な学習の時間「旧JR奈良駅舎」

旧駅舎は、平成10年にいったん解体が決まっていたのに、市民の反対運動があって保存されている
「なぜ解体されず、保存・再利用されたのだろうか?」

当時駅を利用していた人への聞き取り? 市や公民館の人?

昔から守られてきたもので、大切に残していきたいものを見つけさせたい
守ってきた人がいるから残ってきたという認識をもたせたい

意見交流から

- ・「なぜ駅として使われないのだろうか?」から考えることもいいかも。
- ・保存後ずっと活用されていることがすごいと思う。そこをもう少し掘り下げてもいい。
- ・身近なところで最後考えさせるのはいいと思う。
- ・聞き取り後に何を考えさせるのかが、もっと明確になれば。
- ・どこに焦点を当てたいのかが、まだ明確でないところがあるのでは。
それがはっきりすれば、見学のポイントや聞き取り後の展開なども見えてくるのでは。
- ・大事な「たからもの」を守ってきた奈良の人たちの思いや願いにフォーカスするのがいい。

3) 上部遥加さん(家庭科教育専修3回生) 小学校6年 総合的な学習の時間「アマモ場再生」

二見興玉神社の神事の中に「藻刈神事」がある アマモを取っている

「アマモって何だろう？」 海での働き、減少の原因、その影響 再生への取組

自分も中学生のときにアマモを育てて海に戻した経験がある アマモを育てよう

「アマモを守るためには何ができるだろう？」 ひろげる発問

意見交流から

- ・アマモを育てるのが目的？ アマモが育つ海にするのが目的？
アマモを育てることが目的になってしまっただけでは、アマモを海に戻してもなくなるのでは。
- ・アマモがあることで生物多様性が守られていることや、海の環境改善につながっていることをデータとして見せたい。
- ・「なぜアマモがあるといいのか？」が大事になるのでは。
神事であるのは珍しい 「なぜアマモを取っているのだろう？」という問いになるのでは。
- ・「なぜ減ったのか？」「減ったことでどうなったのか？」
- ・アマモの再生に取り組んでいる地域は多いので、そことつながって様子を聞くのもいい。
- ・アマモを再生して藻場が復活したことで、海の様子はどうなったのかを調べるといいのでは。

【ルーム2】ファシリテーター：中澤静男(奈良教育大学)

1) 苗代昇妥さん(英語教育専修3回生) 中学校3年 英語科「I have a dream」

①写真の提示：キング牧師の演説を聴くために多くの人が集まっている。

②教科書及びYouTubeによるキング牧師のスピーチを知る

公民権運動、平和な手法での改革を目指す、中身で人を判断する世界をつくろうとしていた

③Black Lives Matter 今も繰り返される黒人差別の事実の提示

なぜ、差別が残っているのか・話し合い

→想定される生徒の意見 無意識レベルでの差別

他人を差別することで安心感を得たい

④What can I do to realize the world which all people live happily ? をスピーチしよう

まず、日本語で話し合い、スピーチをつくっていく。

生徒に自分が世界をつくっていく当事者なんだという意識をもたせたい

意見交流から

- ・英語の学習と人権の学習のどちらにフォーカスしたいのかをはっきりする
英語の場合は、①基礎的な英語表現を学ぶ、②コミュニケーション力の育成が目標になる。
キング牧師のスピーチを教材にするなら、単に読み取ることが目的とするのではなく、キング牧師の思いにふれることを目的にすることで、伝えたいことを伝える上での英語表現も学ぶことができる。
- ・人種差別で学習展開すべきか、人権問題に広げた方がいいのか？
身近な人種差別に注力した方がいいのでは。
人種差別の場合、自分事化が難しい。当事者に出合わせ、感性にうったえる聞き取りを行う。最近は、来日して働いておられる方も多い。人種差別の体験を持っている方もいるだろう。
- ・加害者と被害者の双方の視点で捉え、なぜそのようなことになったのかを系統的に捉えさせる
- ・当事者意識を持たせるには、同年代のスピーチを教材化するのがよい。
- ・画像での導入ではインパクトが弱い。Black Lives Matter 関連の動画がYouTubeにたくさんある

ので、その方が迫力があるだろう。

2. 大西遥郁さん（教育学専修3回生） 小学校6年 総合的な学習の時間「外来種と私たち」

①2023年6月1日アメリカザリガニなどの規制が始まる。条件付き特定外来種に指定。

②なぜ、規制は始まったのか、それによって何が変わるのかを考えさせる。

③外来種は本当に悪者なのか？駆除する必要があるのかを考えさせる。

④興福寺の放生会・猿沢池の記事 生態系を守るためには外来種を入れてはいけない

意見交流から

・生態系を知ることが重要。外来種は生態系について考えを深めるネタになる。

・「外来種は悪者なのか」は良い問いだと思う。

ハムスターなどをペットとして飼育した子どももいるだろう。かわいいから飼いたいという気持ちにも共感できるだろう。外来種と共存するという前提にも理解を得やすい。そのためにはルールも必要ということで「規制」の意味を考えることができるようになるのでは。

・外来種には人間の都合で持ち込まれたものもある。人間の都合だけでなく、「人間と生物にとって住みよい場所を作るために私たちにできることは何だろう？」という発展の仕方は良い。

3. 志原那歩さん（特別支援教育専修） 中学校1年 総合的な学習の時間「滝宮念仏踊りのこれから」

①役場のポスターを提示しながら、滝宮念仏踊りがユネスコ無形文化遺産に登録された事実を伝える
予想される生徒の反応

念仏踊りは知っているけど、見に行ったことがないのでわからない。どんなことするの？なぜ、ユネスコ無形文化遺産に登録されたの？

②滝宮念仏踊りを調べよう

滝宮天満宮で8月下旬に行われる祭りで、1000年以上続けられている。

菅原道真が雨が降らなくてみんなが困っているときに、7日間祈り続けたのが始まり

踊り組へインタビューする

伝承のための取組を比較する

長野県：しあわせ信州（若者による伝承の成功例）、青森のなまはげ・奈良の太鼓踊り

③なぜ1000年間も続いているのだろう

続けることのメリットを考える

④続けるためにどのような取り組みをすればいいのだろう

予想される生徒の反応

踊り組に参加する、リーフレットを作成する、SNSなどを使って他の地域の人に伝える、他のうまくいっている地域から教えてもらう

意見交流から

・祭りには地域の人と人のつながりをつくる機能がある。

・祭りをすることがはげみになる、という方も多い。

→ でも後継者不足は全国のお祭りにとって共通する課題でもある。

ぼんやりしていたのでは続かないかもしれない。

・滝宮念仏踊り続けるためにを目標にするよりも、念仏踊りが1000年間にわたってつくってくれていた地域の人と人のつながりを維持する、新しくつくることを目標に、自分たちに何ができるかを考

え、行動化してはどうか。そのとき、念仏踊りの価値を実感できるのでは。

【ルーム3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 吉田悠亮先生（奈良教育大学教職大学院教育情報化マネジメント領域 M1）

高校2年 数学・総合（奈良 TIME）「おいしいお茶の淹れ方」

奈良の特産品でもある大和茶を扱い、そのおいしさの秘密を科学の学びを用いて解き明かし、学校内外により広く知ってもらうためにできることを探究する授業構想を紹介していただいた。学校によっては、地元と連携して販売に関わっている取り組みもあることが紹介されたほか、おいしく飲む方法を指数関数の知識を応用して解き明かそうとするアイデアについて質問が出された。

2) 山平楓さん（社会科教育専修3回生）

中学校2年 社会科「災害からわたしたちの暮らしを守るには」

京都の桂川で発生した台風18号による水害に着目し、GISを活用した防災教育について授業構想を紹介していただいた。地理院地図を活用することで、過去の水害の発生記録や、標高や土地利用、地形の状態などが一目で知ることができ、どこに逃げればよいか、どこに災害が発生しやすいかを考えられる。またハザードマップを批判的に検討させる活動が取り入れられ、小学校で行われる防災教育から一歩進んだ取り組みとなるとの意見が出された。

3) 栗山泰幸先生（奈良教育大学教職大学院教職開発専攻 M1） 高校 教科等未定（総合？社会科？）

「主権者としての権利と責任について考えよう～民主的対話と議論を通じて～」

民主的な対話と議論の技術を身に付けさせ、様々なテーマについて生徒が対話をしながら自分の考えを深めていく実践構想が紹介された。「ジェンダーレスお手洗は必要不可欠か」「生活保護世帯に車やスマホは必要か」など、子どもたちにとって当たり前だと感じやすいテーマについて、改めて問い直しをすることに意義が見いだされた。こうした対話に子どもたちが参加できるような工夫として、いかに場の設定をしていくべきか、場の設定は必要か、子どもたちが主体的に議論に参加するうえでどの程度場の設定が必要か、などの点について議論がなされた。

第8回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2023年11月7日(火) 19時~21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 33名
- ◇内容 学習指導案の相互検討①

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1) 真柴唱子さん（アドベンチャーワールド）

中学校1年 社会科・総合的な学習の時間「世界各地の人々の生活と環境」

世界の人々の暮らしと動物の関係から多様性を考え、共生に向けた提案ができるように
中1社会の「世界各地の人々の生活と環境」を手がかりに、生活や環境の多様性、それらの相互依存
関係について学ぶ

→ そこに動物を入れ、動物も環境に合わせて生きていることについて考える
グループごとに世界各地の地理・民族・言語・宗教・動物の情報を調べる
衣食住に触れられる機会（民族衣装を着る、講演会、調理体験など）
動物園に行って体験 野生動物について知る

中間発表 絵本製作 → 読み聞かせ

意見交流から

- ・動物そのものに興味を持たない子どもが増えているように感じる。
（いつでも動物の動画などが観られるからかも） → 提案されたこういう学びができるといい。
- ・そういう立場の方に入ってもらって動物からつながりを考える学習は、子どもにとっても魅力的。
- ・社会科では7~8時間扱いなので、プラス10~12時間の総合でできるのでは。
教科横断的に考えればきっと実現可能だと思う。
- ・人々の暮らしとのつながりという視点に、動物が入れば新たな社会科の学習になる。
- ・せっかく動物園に行くならば、「生で見ないと感じられないこと」に焦点を絞った方が。

2) 高良直人先生（那覇市立松島中学校）

中学校2年 総合的な学習の時間「首里（すい）ま〜い」

身近な首里城付近には、沖縄特有の貴重な文化遺産や自然が数多くある
それらに目を向け、様々な課題に気づき、地域社会のあり方や自分の生き方について考えさせたい
地域のフィールドワーク（事前・事後学習） グループごとにルートマップを作成
「首里城クイズ」 龍潭池に外来種が多くいる問題
中学生が作成するガイドブック、パンフレット
「こんなにすごいものが近くにある！」という驚き

意見交流から

- ・松島中は沖縄県のSDGs研究指定校なので、学校挙げてのESDの取組になっている。
地域から題材を見つけ、先生が変わっても継続できる学びにしている。
- ・フィールドワークに行くときに気を付けていることは？

→ フィールドワークでは、何を感じ、何を学ぶかは生徒に任せている。

そこから次の学習に広がると思う。視野を広げるフィールドワークだと思っている。

- ・外来種の住む池へ行って生き物調査、パンフレットを配布。 → 観光ガイド
- ・子どもたちの持った課題意識から何かしらのアクションがいろいろ出てくればおもしろい。

3) 屋良真弓先生（南風原町立南風原小学校）

小学校6年 社会科「平和で豊かなくらしをめざして」

戦後復興 米軍統治下での沖縄の様子を組み込んでいきたい（知らない児童が多い）

「花ブロック」 基地建設に使用されたコンクリートブロック製造の技術を生かす

これまで算数や国語の授業で「花ブロック」を扱ってきた

沖縄の人たちの苦悩やたくましさ、したたかさに気づかせたい

その時代を生きてきた人たちの生の声を聞かせたい

最後に「豊かな社会」について考えさせたい

意見交流から

- ・発表で終わるのではなく、沖縄の人々の思いや願いにフォーカスして、未来の沖縄について考えるま
とめにしたい。
- ・教科書にはない身近な話になると、子どもの学びが一気に自分事化される。
- ・沖縄の戦後史は、他の地域ではできない。米軍統治下の状況でどんなことがあって、人々がどんな思
いで、どのように生き抜いてきたのかということについて、丁寧に扱うべきだと思う。
- ・SDGs に敏感な子どもだから、「豊かな沖縄」を考える際、どんな課題があるのかを SDGs の視点で考
えることによって、多様な豊かさについての考えが出てくるのではないか。

4) 太田馨先生（山辺町立山辺小学校） 小学校2年 生活科

「だいすき！山辺町！ ～まちたんけんでぼくたち・わたしたちの山辺町はっけん！～」

今年転任したばかりで、自分も地域のことをまだよく分かっていない

山辺町のことをもっと知って、もっと好きになってほしい

校区を4つに分けて行ってみよう 新たな発見、共有、まとめ

→ もっと知りたいこと（学年で18か所）

発表（1年生に） 町の人にお礼

もっと好きになるにはどうしたらいいか

意見交流から

- ・気付きの質を高めるために工夫したことは？
→ 校区を4つに分けると、それぞれの地域の特徴が見えてくる。
- ・先生が全部知っている必要はない。子どもと一緒に町のことを知っていけばよいのでは。
その方が教師もワクワクできる。
- ・教師が楽しんでいる様子を見せると、自然と子どもも楽しくなってくる。
- ・子どものモチベーションがずっと続くようなキーワードがあった方が。
(ひみつ、すてき、じまん、たからもの など)
- ・生活科で同じ活動を繰り返し行う意味。 気付きの質を高める意味でもある。

【ルーム2】ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 井上岳海さん（学校教育マネジメントコース ESD マネジメント領域）

中学校1年 社会科「日本列島の誕生と大陸との交流」

国ってなんだろう？昔から日本という国はあったのか？

縄文時代：温暖化による縄文海進により日本列島が大陸からはなれる

弥生時代：大陸より稲作が伝えられる（稲作技術を持ったグループの漂着？）

稲作の影響

同じところに住むことができる、人口増加 → 環濠集落

争いが起こる

・村を大きくしたい、米を奪いたい

国の成立、リーダーの出現（富をもつ人、特別な力を持つ人）

→ 古墳の大型化と豊かな副葬品

現在につながるものや文化（稲作、仏教、鉄、漢字など）

なぜ、1500年以上の前のものが残っているのだろう

意見交流から

- ・本単元構想案の商業ポイント。
時代の変化を政治だけではなく、気候の変化も要因であったことを伝えること。
- ・学習が教科書内で終始している。具体物や実物を用意して、生徒の学習意欲を喚起する必要がある。写真だけでなく、「本物」を教室に持ち込む。
- ・調べる学習では資料集や教科書だけでなく、専門家を招聘してインタビューした方がいいだろう。
- ・教えなければならないことを確実に指導しつつ、ESDをつないでいく。ESDで育てたい資質・能力と教科の学習との関連を考えること。
- ・同じペースで進める必要はない。おもしろいと思うところは時間をかけてよい。

2) 上田朋幸先生（長浜市立びわ中学校）

中学校2年 総合的な学習の時間「ヨシ行けどんどん作戦」

- ・一年をかけて取り組む全校行事
- ・育てたヨシ苗を琵琶湖に植栽する。21年目の取組
- ・いつ、何をするのかという活動自体はよく分かっている。しかし、なぜこれをするようになったのか、当時の人々の思いはわからない。琵琶湖の水質改善との関係もよくわかっていない。
形骸化しつつある。
- ・年間を通した取り組み
学校で自作した読み物教材で学ぶ
5月～9月 苗の育成
9月 ヨシ苗の植栽 ヨシの生育状況の観察
2月 育ったヨシを刈り取り、次の苗を育てる

取組の背景

20年以上前、琵琶湖湖岸道路の建設、圃場整備などにより、ヨシ原が荒れた。琵琶湖の水質悪化を背景に、中学校として何かしたいというPTAからの要望があった。地元の漁師からは、魚が獲れなくなっているとの情報もあった。

→ 学校と地域が連携して何かできないか というのがスタートだと聞いている。

意見交流から

- ・地域学習のゴールで想定している生徒の姿…自分のまちに誇りを持ち、好きになってほしい。
- ・地域は行動を起こせる場である。多世代の方々との協働・交流の場として捉えること。
- ・地域の方々との交流することは自尊感情を得やすい環境である。20年以上続いている取組ということは、その地域で中学校時代を過ごした方は、同じような活動による「思い出」を共有しており、地域アイデンティティを醸成する取組になっているものと思われる。
- ・形骸化をさけるために、プラスアルファの活動を生徒会・地域で相談する。
- ・生き物調査を行い、データを蓄積することは意味がある。
- ・琵琶湖博物館などの専門機関と連携することで、新たな企画が生まれているのではないかな。
- ・取り組みの成果として琵琶湖の水質改善に役立っていることがわかるには、専門家との連携が必要。

3) 石山葉月先生（山形県立高畠高等学校） 高等学校1年 言語文化『羅生門』（芥川龍之介）

- ・極限状態の人間の心理について。悪を行って生きるか、善のままで死ぬか。
- ・モラルジレンマ そこまで生徒が自分事化できるかが問題
- ・そこから、自分が生きる上で本当に大切にしているものに気づかせたい。自分が感じている「幸福の状態」を見つめさせたい。
 - ・現在は、極限状態に陥る前に「福祉」がある。福祉に関するゲストティーチャーに講演を依頼する。

意見交流から

- ・極限状態（生きるか死ぬか）に陥った下人の利己心を認めるか認めないか。
- ・あなたにとって幸せな状態を問う 価値明確化シートに何が書かれるだろうか。自分の中で本当に大切だと思っている価値を明確にすることは、高校生にとって意味がある。単元の前後でどのように変化するか比較して、変化の原因や変化しなかった原因を突き詰めさせることも意味がある。ただし、生徒が本当のことを記すかどうかが問題だ。
- ・福祉は、金銭的支援だけではない。その人が何をよりどころにすることで生きていけるかを想定し、支援することが大切だ。
- ・福祉行政のゲストティーチャーの講演を、クリティカルに捉えさせる。
 - 共通の幸せに向かわせるための行政による福祉（社会保障）は、どれだけ行う必要があるのか。
 - セーフティネットがあることの重要性。福祉行政の成功例と失敗例。福祉行政の課題：人手不足など。
- ・福祉行政に関わる講演を位置づけるなら、国語科だけでなく国語科・総合的な学習にした方がいいのではないかな。

【ルーム3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 竹田光陽先生（生駒市立生駒東小学校）

子どもたちが世界で起こっている様々な出来事を、当事者意識をもって捉えることができていないのではないかなという課題意識から、貧困の問題に着目させた実践。

子どもたちにとって心理的に遠い問題を扱うため、現地に住んだ経験のある人や貧困の問題に詳しい人の視点で感じたことを聞かせてもらうこともよい視点づくりになるとの意見が出された。

また自分たちにできることを考える場面では、「～してあげる」というスタンスで関わらせては本来の目的とは異なってくる。

現地の様子を知ること、そのうえで現地の子どもたちと自分たちとの共通点に目を向けること、また物的な豊かさにとらわれることなく、日本では見られなくなった豊かさ、交流した国にある豊かさに目を向け、子どもたちが学ばせてもらうことも一つの取組のアイデアではないかという意見が出された。

2) 田中紀裕先生（長浜市立湯田小学校）

学区内の川の様子について、どのような生き物がいるのか、どれくらいきれいな川なのかを調べ、どのように川と関わって生きていくべきか、パンフレットにまとめていく学習。

特に単元末にどのような取組をさせるべきかが課題。

また川と子どもとのかかわりがどの程度深くあるのか、その中で子どもたちがどのように探究課題を見出していくのかという点について、検討していく必要があるとの意見が出された。

アドバイスとして時間軸で川の様子を見つめさせたり、どのような目的で、誰に対してパンフレットを作成したりするのかを子どもたちと検討することが必要ではないかという意見が出された。

3) 長嶺有希さん（特別支援教育専修3回生）

中学校第2学年の総合的な学習の時間／家庭科の授業が提案された。

相対的貧困というデリケートな話題を扱うことの難しさ、問題の複雑さなどについて、参加者から意見が出された。

特に意見が出されたのは、食事から得られる幸せは満腹感だけではなく、家族と一緒に食事を囲む団らんや人との関わりだということである。

例えば子ども食堂を運営されている人が、「子ども食堂という名称を前面に出すことで本当に支援が必要な子どもが来づらくなる」と考えて運営されていることを紹介すること、子どもと人との関わり合う場としても大切にされていることを紹介することが、よい導入となるのではないかと意見が出された。

第9回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇実施日時	2023年12月5日(火)19時~21時
◇方法	ZOOMによるオンライン開催
◇参加者数	36名
◇内容	学習指導案の相互検討②

【ルーム1】ファシリテーター：中村友弥（奈良市立朱雀小学校）

1) 原田龍ノ助先生（奈良市立朱雀小学校）

小学校3年 社会科「おそろしい火事からくらしを守ろう」

子どもにとって火事はイメージしにくい

火事の原因を考えさせる → 火事が起きたとき、助けてくれるのは・・・

消防士だけじゃなくて 消防団の人、自治会の人、警察の人など

「火が消えた後はどのように過ごしたらよいか？」

消防署見学・・・消防士さんたちの苦労や工夫

「自分たちにできる火災予防は？」 家族とも確認 → 記事にして地域に発信（火災予防マップ）

意見交流から

- ・他学年にも発信した方がよいのではないか。
- ・火事が起こったときだけでなく、事前・事後に焦点をあてているのがいいと思う。
- ・地域の誰に向けて発信するのかによって内容が変わってくるのではないか。
- ・「正しく怖がる」ことをどれだけ実感できるかが大事だと思う。
- ・もし消防署見学ができないのなら、リモートでつなぐことでも対応できると思う。

2) 臼井達也さん（NPO 法人わかやま環境ネットワーク）

高校1年生 総合的な探究の時間「地域の空き家&店舗の利用価値の創造」

和歌山県立箕島高等学校で2021年から導入されているSDGsベースの教育プログラム

「まちづくり」というテーマから、毎日通っている学校の周辺地域について目を向ける

空き家、空き店舗に着目

空き店舗の改修に向けて、希望やアイデアを創出

→ 専門家を講師に招き、ヒントを得ながら改修を計画 提案・発表

この1年だけではできない 来年度以降へのステップ

意見交流から

- ・最終的にデザインをどのように決定していくのか。
→ 予算のこともあるので、そこが最大の悩み。でも、生徒の意思は極力尊重していきたい。
- ・地域の課題やニーズは違うので、それが明らかになればコンセンサスは図れるのでは。
- ・発表会でいろんな人からコメントをもらえることがいい。
- ・もし今年採用されなかったアイデアも、次の1年生が引き継げるものがあると思う。
- ・高校生のこの段階で、こういう社会参画ができることは大きな学びだと思う。

3) 窪田あずさ先生（屋久島町立安房小学校）

小学校3年 総合的な学習の時間「わたしたちのまち ～安房地域の秘密を探り、守ろう～」

自分たちの地域の課題を見つけ、課題解決を図れる児童の育成を目指す

安房のお茶を取り上げてみた 鹿児島のお茶は有名だが屋久島のお茶はそれほどではなお
如竹先生の教えについても今年もやっている

お茶工場では、「そんなに人手は足りない」と言われ、少し困っている

意見交流から

- ・課題ではなく、強みやこだわりをフォーカスしてもいいのでは。
- ・人手は足りないと言えども、安房のお茶づくりへの思いについて触れられればいいのでは。
- ・次の働き手がないと困るのではないだろうか。そこが考えるポイントかも。
- ・如竹踊りと何かタイアップできたらおもしろいが、できないだろうか。

【ルーム2】ファシリテーター：新宮済（奈良女子高等学校）

1) 坂元達哉先生（屋久島町立神山小学校）

小学校6年 総合的な学習の時間「生かそう屋久島のみ力 創ろう私たちの未来」

屋久島をより良い場所にしていきたいという強い思いをもっている。このことから、SDGs 達成のための取り組みを行っている。「使わない部屋の電気を消そう！」などのポスター掲示を学校で行っている。

その一つの取り組みとして、5年生の総合的な学習の時間に、屋久島の伝統野菜である「かわひこ」を島内の耕作放棄地で育てる活動を計画している。

意見交流から

- ・耕作放棄地問題は、どうしても解決しにくい
- ・児童が屋久島を大事に思っているからこそこういう実践ができる
- ・耕作放棄地に目を向けた子供たちがすごい。子どもたちの行動が、大人を変えていく
- ・発信として子供たちの意見を行政に伝えられると良い
- ・屋久島の耕作放棄地を解決するために活動している団体がたくさん存在する。
→ 続的方法を教えてもらえる可能性がある。地域に良い人材がいる可能性もある
- ・地域や中学生を巻き込んで芋煮会ができそう。
→ 毎年収穫祭をしたら、地域に受け入れられて楽しい行事になりそう。
今年度は植えて終わりになってしまいが、地域になったら中学生も巻き込みやすい
- ・農地があつたらいいことがある、多くの役割がある（気温・生き物）ことに気づかせることが大切。
そういったことを教えるために、耕作放棄地マップを作成できそう。そのマップを知らせるときに芋煮会を実施すれば、発信しやすいかもしれない。
- ・地域を巻き込んだカワヒコを広げる催しをすることで耕作放棄地を減らす。
→ 持続性を持った活動にするため、長期的な目で見ても目的のために適切な手段を考える。

2) 西田生先生（白浜町立日置小学校） 小学校5年 家庭科「食べて元気！ご飯とおみそ汁」

みそ汁には、家庭によって具材の差がある → そこから、地域の食材や旬の食材に目を向ける
家の人に聞いて我が家の味噌汁を学ぶ。

栄養士から給食の味噌汁を知る。調理実習で味噌汁を作る。

最後には、自分の家でみそ汁を家で作りたいと児童に思ってほしい。

意見交流から

- ・地域の素材を生かすことができそう。
- ・他の地域のみそ汁の具材を紹介するのも良いかもしれない。
- ・地域の人を巻き込んだ指導案だが、現在の小学校と地域とのかかわりは？
→稲作体験を地域の人としたり、海岸の清掃活動を行ったりしている。
- ・この指導案で考えられそうなESDの観点 → 漁師汁でガラを使う。使う責任
- ・味噌汁について話し合う活動を加える。
- ・家庭の味噌汁の具材から多様性を感じる。地域性や家庭の味 → 地元への着眼点

3) 住田新太郎先生（松山市立中島小学校）

小学校3・4年 総合的な学習の時間「磯の博士になろう」

教材観：愛媛県の中島は、みかんの島。養殖漁業。

1学期 海の生物を調べる

2学期 海の環境を壊す、マイクロプラの問題について学んだ。海岸を訪れると実際にプラスチックがあることを実感。大学生が授業協力して、漂着物をアート作品にする活動。

2、3月に「スポゴミW杯2023」を実施予定

→拾ったらポイントを得られる。スポーツと社会奉仕活動の掛け算

意見交流から

- ・勤務地の白浜でも海岸掃除を地域が中心となって行っている。しかし、参加者がしたくてしているのかは疑問。
- ・海から遠い場所で海に関する実践したが、自分事化させる過程で悩んだ経験がある。松山では海の問題を自分事化出来ているか？
→海は児童の生活に溶け込んでいるが、意欲をもって清掃活動に参加できているようには思わない。だからこそ、2学期にゴミではなく、材料集めとして清掃活動を捉え直した。
- ・海のすばらしさや豊かさが分かっているはずなのに、ゴミ問題に当事者意識が高まらないのはなぜ？
→ゴミ拾いがみんなのためになっているというのが理解できていない。悪影響を自分事にできていないのかもしれない。問題解決に向けての意識を高めていけられるようにする必要あり。
- ・海に親しむ→海を分析することができれば学びが深まるかもしれない。
奈良の小学校で海の実践をした際は、海洋ゴミの自分事化が難しかったが、実際に海に近い中学校の生徒が魚を分解したところ、本当に魚からプラが出てたのをオンライン交流で知って、海のゴミ問題に実感を持っている児童が多かった。
→屋久島の4年生とのオンライン交流が実施可能かもしれない。

【ルーム3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 田坂一稀先生（長浜市立長浜北小学校） 中学校1年 技術・家庭科（技術分野）

「持続可能な材料『竹』について考える ～竹灯籠の製作を通して～」

竹材に着目し、環境にやさしい材料を使用した製品を製作する。竹は、かつて里山の中で、たくさん活用されてきたが、近年では、里山が荒廃し放置林として問題視されることが多い。竹を活用する方法を考えたり、実際に竹を材料にして製作したりすることを通して、竹材料の良さや課題に気付

いていくことができる。セミナーでは、材料そのものの良さだけでなく、里山という周辺地域の持続可能性を考える上でも、優れた題材であるという意見が述べられた。授業者も、制作するだけでなく、使用済みの竹材を竹炭として使用することを活動に組み込む予定をしておき、様々な観点から持続可能性について考えられる教材だといえる。竹材は購入する予定であったが、地域にも竹林があるとのことなので、荒れている竹林に実際にいって課題を見つけたり、放置されている竹を使わせてもらったり、地域の方から昔の竹製品について話を聞くなどすることで、課題意識も明確になることが提案された。

2) 井阪愛子先生（平群町立平群中学校）

中学校3年 総合的な学習の時間「修学旅行を機会とした平和学習」

修学旅行を機会とした平和学習を通して、沖縄戦での年代の若者たちのことを「我がこと」として考え、平和学習をそれぞれが課題意識を持って探究すること、そして自分の生き方について考えが深まることをねらって構想・実践した。課題解決をめざす「探究」を通して、自己の在り方をみつけていく「探求」を総合的な学習の時間に位置付け、後輩たちに学んだことを発表したり、自分の生き方を見つめなおす時間を設けたりした。学徒隊の姿を通して、悲惨な状況下であっても、あきらめずに生きようとする姿に気付かせようとしており、平和学習としての探究にとどまらず、子どもたちが自身のこれからの在り方についてフォーカスできるよう、単元構成がされていた。

3) 弓削直斗先生（長浜市立塩津小学校）

小学校3学年 総合的な学習の時間「見つけよう伝えよう 塩津の宝物」

子どもたちは、1学期に、近くを流れる川の調査を行い、その美しさに地域の良さを感じていた。2学期には、1学期の学習を踏まえ、川以外にどんな良さが地域にあるのかを探る活動を行った。それぞれの児童が知っている町の良さを共有したり、道の駅の見学をしたりして、塩津の良さを再発見していき、タブレットを用いて保護者や地域の方へ向けて発表する取組を行った。学習を通して、地域の一員としての自覚を持たせようとした。きれいな川が流れているということについて、子どもたちは普段から見ているにもかかわらず、それまでは気付いていない。当たり前のようにある光景について、新しい視点で見直すことができたことが、まず成果として挙げられる。また、子どもたちが、地域を新鮮な目で見て地域に発信することで、その発表を聞いた大人たちも、普段意識しない良さに改めて気付くことができる。

【ルーム4】ファシリテーター：加藤久雄（奈良教育大学）

1) 藤岡晃弘先生（奈良市立三碓小学校） 小学校5年 総合的な学習の時間

「わたしたちの住む三碓のたからものはなんだろう。～見つけよう！三碓遺産～」

世界遺産のない地域での世界遺産学習

昨年の反省から・・・世界遺産をもっと身近に感じてほしい！

世界遺産の登録基準について調べ、自分たちで地域の遺産の登録基準を考える

現地学習+ボランティアガイドさんとの交流 「守ろう 地球のたからもの」を使用

意見交流から

・奈良の世界遺産の登録基準とは？

→主に歴史的な視点で登録されている。

- ・子どもたちもそれについては納得している？
→自分たちの地域に歴史的なものが少ないので悩んでいる部分でもある。
- ・世界遺産学習を通してどのように自分たちの地域のよさに結びつけるか。
- ・地域の遺産として歴史的なものは少ない。
なんで自分たちの地域にある寺は世界遺産にならないのか？と子どもたちから出てくればおもしろくなりそう。
- ・まず教師がモデルとして地域の遺産を紹介してあげると、冬休みに探そうという意欲につながったり、探すための視点にもなったりする
- ・発表先についての工夫はなにかあるか（やる気を引き出す効果！）

2) 三上凛矩先生（山形市立第三中学校）

中学校2年 音楽科「郷土に伝わる民謡のよさを考えよう（花笠音頭）」

ねらい：花笠音頭が引き継がれこれからも受け継いでいこうという心を育みたい
歌詞から広げていく 「なぜ花笠音頭は引き継がれていったのだろうか」
花笠音頭の文化的・歴史的価値に気付くためにインタビュー活動もする
音楽としての民謡の良さに気付く

意見交流から

- ・生徒がどんな姿になってほしいのか？
→花笠音頭はきっかけで、生徒には文化を引きつぐのは大事なんだという感性を育みたい。
- ・花笠祭りの起源は？
→水田の工事で呼吸を合わせるために歌になった。
→初めの形とは違う。
- ・コロナ禍で中止になった祭りが多々あった中で、また復活したのはなぜかという視点で深めてもいいのでは。
- ・有形固定資産と無形文化遺産の起源について注目する。
- ・音楽の授業としてはどうだろうか？ 社会科と教科を横断してみてもどうか

3) 宮崎真臣先生（菊池市立第菊池北中学校） 中学校3年 社会科「地方自治と私たち」

もっと菊池市を住みよい町にするのはどうすればいいのかを考えるを通して、自分たちの地域について改めて見つめ直し、主体的に政治に参加しようとする生徒を育みたい
ワークシートを活用して、地域の課題やよきを見出していく
生徒たちがまとめたものを企画書として行政に提出する
菊池市は多様な人たちが住んでおり、その中で生きる市民の一人としてしっかり考えてほしい
市の政策課には校内発表の時に来てもらい、講評をいただく形を2年前から続けている

意見交流から

- ・去年との違いは？
→二年前、地域の方を入れずにやってみると、突拍子もない案が出てきたが、去年は地域の方を入れると発想が凝り固まってしまった。
- ・自分との生活が密接にかかわっているのが面白そう。
- ・生徒の発想力を大切にしたい。

- ・事前アンケートと実践後のアンケートをとってみると、政治に関する視点で変容を評価することができる。
- ・ヒマワリシートがいろんな教科でも使用することができる。
- ・中学校3年生でも政治に関する意識は少ない

【ルーム5】ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

1) 川邊甲余子先生（奈良市立伏見小学校） 小学校2年 生活科「未来からくりおもちゃ館」

生活科の目標から、試行錯誤し、楽しんで活動することをめあてとする。

→「失敗をたくさんしよう」「実際に遊びながら」といったことを大切にしている。

からくりおもちゃとは、江戸時代から現在も残されている、自然素材を活かしたおもちゃであり、ゲーム機で遊ぶことが多い児童にとって馴染みは薄いですが、様々な工夫やしかけからたくさん学んでほしい。

導入段階で「ならまちからくりおもちゃ館」の館長から、残していこうという思いを聞いたり、からくりおもちゃの仕組みを予想したり、実際からくりおもちゃに触れる活動を取り入れた。そうしたことから、からくりおもちゃを残していこうという館長の気持ちを考えたり、自分たちも作ってみたいという気持ちを持ったりすることができた。

自然素材の利用は難しかったので、空き箱などを使って作っていった。また実際に触れた、からくりおもちゃのきれいな見た目も意識して、テープをなるべく使わないとか、接着面が見えないようにといったことも意識しておもちゃ制作に取り組んでいる。

毎回ふりかえりを書いて残すことで、作業したことを言語化し、思いを共有することもできている。校内の作品展での展示を来週に行うが、作り手の想いを伝えるために使い方の説明も作成している。国語科の「馬のおもちゃ」とも関連させて、書き方を指導している。作品展のルールとしては、手にとって遊んでもらうことはできないが、遊んでもらってなんぼなところもあるので、自分たちが見ているところで遊んでもらいたい。

意見交流から

- ・実際に見たり聞いたりといった活動が、館長の熱い想いやおもちゃに対しても身近に感じるためにいいと思う。
- ・使い方の説明で国語科との関連を意識されていていい。
- ・次年度へ続いていくといい。
- ・作品展では難しいかもしれないが、ぜひ、自分たちの目の前で触れてもらえる機会を作ってみてください。
- ・実際に遊びながら、「友だちが作ったものだから大事にしたい」と感じられているのがいい。
- ・試行錯誤しながら、おもちゃのしくみを考えたり、創意工夫して多様なおもちゃを楽しみながら作ったりしている活動になっているので、多様性やシステムズシンキング、すすんで取り組む態度に重きを置いていいのではないかと。そこから、「残していこう」という思いが生まれ、文化尊重や世代間公正の価値観が芽生えるといったイメージにする方がいいのかもしれない。

2) 田中絃太郎先生（長浜市立速水小学校）

小学校3年 総合的な学習の時間「大豆はかせになろう ー大豆と食文化ー」

速水小学校では、地域の農家の方や JA の方、保護者との協力で大豆を栽培→収穫→加工（豆腐づく

り)といった活動をしている。地域との協力を大切にして活動させていく。

大豆は食品として様々な形を変えて食生活に関わるだけでなく、環境改善の側面もあり、その多様性について国語科の「すがたを変える大豆」とも関連させながら、調べ学習をすすめる。最後には調べたことについての発表の場を考えている。

畑が校内にあるわけではなく、農家の方の畑で栽培していただいているので、「育てている自覚」を持たすためにも定期的に観察に行き、記録を残していくことを大切にしている。

多様性(大豆の)と自然環境・生態系の保全を重視する価値観を主に考えている。

意見交流から

- ・発表会が農家の人やJAの人など、協力した地域の人にも聞いていただけたらいいと思う。
- ・大豆の環境改善とは具体的にどんなものがあるのか?
 - 大豆油から液体燃料や車の部品になったりということがある。また、「大豆ミート」は大豆をもとにした肉のように見立てた加工食品であり、健康食として注目されるが、牛を育てるための穀物の量を考えると、採れた大豆の分だけ「大豆ミート」になるので、環境に良いということ。
 - 大豆油からの液体燃料が実際にどれぐらい利用されているのか、車の部品となっていることはメーカーからの話が聞けるといいのではないか。
- ・豆腐づくりはすごく魅力的な活動であるが、アレルギーなどの心配は大丈夫か?
- ・大豆は輸入に頼っている食品であるが、そういったことに関しては
- ・湖北地方には、大豆を潰して汁にいれるような郷土料理が給食に出てくると聞いたことがあるし、長浜には「なかや」という有名そうな豆腐屋があるようで、そこにも豆腐田楽が郷土料理として紹介されていた大豆づくりがさかんな地域だったのではないか?

3) 橋口和真先生(屋久島町立八幡小学校) 小学校3・4年複式 総合的な学習の時間

3年「発見、発信、屋久島の自然」4年「自然を守る取り組みを考え、発信しよう」

海のレンジャー体験と山のレンジャー体験をアクティブレンジャーの方々と体験し、子どもレンジャーとしてどんなことができるかを考える。児童の半数は移住してきた家庭の児童で、自然を満喫した生活を送っている中で、「豊かな自然が当たり前」だと感じている中で、クリティカルに感じられるようにしたい。

海のレンジャー体験では、屋久島の海のいいところ(多様な生態系があるなど)と困っていること(ゴミが流れ着いてしまっている)などを感じられる活動を行い、山のレンジャー体験では、調べ学習として、妖怪、外来種、ヤクザル、ヤクシカなどのテーマを決めて調べ学習を行う。また、ヤクタネゴヨウという絶滅危惧種であるマツの保全活動を見学し、プロの保全活動と自分たちの活動との比較から、活動の充実を図る。

SWOT分析を利用し、もともとの弱みに対しての解決方法などを考えていきたいが、分析のいい方法があったら教えてほしい。

相互性(屋久島の自然や動植物の関係)、島に住むものとしての責任性、世代間公正(残していきたい)など

意見交流から

- ・ヤクシカの増加で食害が出ているという課題について、猟師さんからの話を聞くこともいいかもしれないし、奈良もシカについては同じような課題があるが、屋久島では焼肉屋さんや飲食店でシカ肉が食材として当たり前のようにある。観光客へのアピールでシカ肉の消費を増やすことができるのでは

ないか。

- ・「問いづくり」をしていくことで生まれてくるかもしれない。
- ・SWOT 分析では、4つのエリアの付箋を違う色で書かせて、それらを動かしながら、なぜ疑問の形 (what, why) で問いづくりをしていくといいのではないか。

第10回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇実施日時	2024年1月16日(火) 19時~21時
◇方法	ZOOMによるオンライン開催
◇参加者数	34名
◇内容	学習指導案の相互検討③

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1) 土屋岳先生（山形県立高畠高等学校）

高校2年 公共「政治参加と公正な世論形成」

主権者としての意識を高めたい

全体の前で発言することが苦手な生徒が多い

政治や選挙に関心がないというより、「自分たちが関わっていいものではない」という認識

自分たちの町をよりよくするために 高校生でも政治に参加できることを理解させたい

最終的には高畠町への政策提案をさせる

意見交流から

- ・高校生で世論形成について学んだことはないが、今では必要なことだと思う。
- ・初めに「自分たちでもできるんだ」と感じられるものがあればいい。何かモデルを示したい。
- ・一人ではできないことも、みんなでやればできるということを実感させたい。
- ・「選挙あるある」のクイズは面白そう。
- ・町の課題については理解しているようなので、
- ・町の総合計画を見て、自分たちの感じている課題と擦り合わせると、より身近に考えられる。そこに役場の担当者にGTに来てもらって説明してもらったらどうだろうか。

2) 大西遥郁さん（教育学専修3回生）

小学校5年 総合的な学習の時間「外来種と私たち」

昔よく飼われていたアメリカザリガニ、アライグマ、ミドリガメが野生化している問題について知る
環境省の動画「STOP アメリカザリガニ」「日本の外来種対策」を視聴

興福寺猿沢池の放生会で金魚を放流していたのをやめた事例（何百年も続いていたのに）

外来種はすべて退治しないといけないのか？ 外来種の命も大切なのでは？ ディベート

賛成・反対ではなく、その理由を考え交流することで外来種への関心が持てればいい

「人間も生き物も住みやすい場所をつくるためにわたしたちにできることは？」

最後に「おいしい！ 食べて活用！アメリカザリガニ」の動画視聴

意見交流から

- ・外来種の命も大切なのではないかという視点は大事。どのように折り合いをつけるか？
- ・トレードオフの問題とっしょだと感じた。
- ・外からきたものをただ排除すればいいという考えにならないようにするところがいい。
- ・ディベートさせるにはそれまでの学習の積み上げが大事なると思う。
- ・放生会の事例は導入に入れる方が、課題意識が生まれると思う。

- ・アメリカザリガニは食べられるのかもしれないが、食べられるかな。
- ・ディベートが最後の方がいいかもしれない。

3) 志原那歩さん(特別支援教育専修3回生)

中学校1年 総合的な学習の時間「滝宮念仏踊りのこれから」

「風流踊り」としてユネスコ無形文化遺産に登録された ポスター「この躍動! 世界基準」
踊りのある8月のこの日は多くの人が集まってくる

踊り組に参加している人、主催者にインタビュー 訪れている人にインタビュー

踊り組には小中学生もいるが、見に来る人は大人がほとんど 継承者不足
地域(綾川町)のよさや素敵などところを見つけさせたい 他地域との比較

「住まいるあやがわフォトコンテスト」を参考に

念仏踊りの継承やこれからの綾川町について考えをまとめ、発信

意見交流から

- ・まず見に行く、参加する人を増やすことを目標にするといいいのでは。
- ・子どもの参加が少ないのは、毎年見るべきものとは感じていないのでは。
大人の人なぜ毎年見に行くのかをインタビューしてみてもどうだろうか。
- ・この踊り以外に地元の誇れるものは? より多くの人に綾川町のよさを発信させたい。
→ 棚田、讃岐うどん発祥の地
- ・「この躍動! 世界基準」を導入にすれば、何が世界基準なのかという課題意識が生まれるのでは。
- ・それぞれが見つけた地域のよさを調べ写真にとって、フォトコンテストに応募することをゴールに。

【ルーム2】ファシリテーター：中澤静男(奈良教育大学)

1)：谷垣徹先生(奈良県立青翔中学校・高等学校)

中学校1年 総合的な学習の時間「私たちの暮らしと水」

毎年の春の校外学習が形骸化している。学びがいのある内容に充実させたい。

サイエンス系の探究学習として単元開発をしたい。

吉野川分水ができるまでの奈良盆地の農業の課題：水不足

吉野川分水ができて、安心して米作りができるようになった。

奈良県の「ひのひかり」：おいしいお米 おいしいお米はおいしい水から

森の水の源流館の見学

①源流の森 美しい水がつくられる森は、多様な生き物のすみかでもあった。

②川上宣言と出会う：川上村の人たちの水に対する行動

中流域に住む自分たちは、川のために何か行動しているのか?

③自分の住んでいるところの環境測定を行う(ならコープと連携)

サイエンス系として科学データに基づいた取組としたい

④秋の校外学習 大阪市長居の自然史博物館(下流域としての位置づけ)

学芸員からの講義を受ける

⑤システムズ・シンキング 川の環境が上流・中流・下流とつながっている。

⑤青翔宣言の作成

意見交流から

中流域に住む自分たちが、川の水質保全のために何も行動していないことに気づかせ、大人を巻き込んだ行動化につなげてほしい。

2) 井上岳海さん(学校教育マネジメントコース ESD マネジメント領域)

中学校1年 総合的な学習の時間「古代のタイムカプセルから未来を創れ」

埋蔵文化財を ESD の教材にしてみたい。認知考古学の援用。

- ①地域にある埋蔵文化財を知る。
- ②地域の文化財が自分たちにどのような影響を与えているか、守られてきたのかを考える。
- ③博物館等で古代の道具を調べる 朝鮮半島との交流があることに気づかせる
- ④古代の人が気候に即した暮らしをしていたことを、学芸員に教わる
縄文時代の大きな気候変動
- ⑤古代人の知恵から持続可能な社会の手がかりを見つける
- ⑥持続可能な社会づくりのためにできることを宣言する。

意見交流から

- ・埋蔵文化財は生徒にとって身近ではないので、実物ふれたり実際に使ったりできる方がいい
- ・埋蔵文化財は「守ってきた」と言えるのだろうか？その価値を伝え、これからの保全方法を考える方がよいのではないか。 → 公園化・資料館化・放置
- ・認知考古学の援用について：古代人も我々も同じホモサピエンスである。感性的には同じである。
- ・大陸との交流による先進文化の受容：言葉が通じない中でも、受け入れたかった。
大陸由来の土器・土器の破片：古代人の大切にしていたものに違いない
- ・地域に根差した宣言の方がいいのではないかな。

3) 苗代昇妥さん(英語教育専修3回生)

中学校3年 総合的な学習の時間「私の考える みんなが住みやすい街 東大阪市」

グローバル化の進展により、町工場の多い東大阪市には技能実習生という形で外国人が多く住んでおられる。人種差別やヘイトスピーチを乗り越え、外国人と共生できる社会の実現は喫緊の課題である。様々な国籍の人たちにとって住みよい東大阪市をつくっていききたい。

単元展開の概要

- ①英語科でアメリカの公民権運動について学ぶ。Black lives matter の訳語を調べる。
- ②大阪府ヘイトスピーチ解消推進条例を取り上げ、日本での人種差別問題を知る。
- ③日本に住む外国人にインタビューする。「住みやすい街に必要なことは何か？」
- ④みんなが暮らしやすい東大阪市について考え、行動化する。

意見交流から

- ・日本に住む外国人に、日本に来て困ったことやうれしかったことをインタビューし、まとめることは現状把握するだけでなく、生徒が外国人の方々に積極的にかかわっていきこうとするきっかけにもなっている。
- ・人権学習ではナイーブになりがち。最初で出会い方が重要。苦労されていることにフォーカスしがちだが、前向きに生きておられる方にその理由を尋ねるなど、プラスの出会い方を考えてほしい。
- ・生徒の行動変容をある程度想定した方がいい。次の一手を準備するためにも。

【ルーム3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 長嶺有希さん（教育学専修3回生）

中学校2年 総合的な学習の時間「スーパーで何を選ぶ？ -安定した生産・消費のために-

食料自給率の問題に目を向けさせ、持続可能な食生活のために自分たちにできることを考えさせる学習を構想した。参加者からは、小学校の第5学年で扱う食料自給率の学習を踏まえて、どのように中学校での学習を設計していくかについて、意見が交わされた。また考えたレシピをもとに実際に調理をして、文化祭で販売するという取組が、他者からの評価を得られるよい機会になるとの意見が出された。今回の指導案は、食料自給率と消費行動に着目して設計したものであるが、食生活に関わる持続可能性は食料自給率以外の問題を含めたものであるし、また材料の購入、レシピの考案、販売宣伝までを含めた一連の取組として構想することもできる実践であるとの意見が出された。

2) 森岡美咲先生（奈良市立三碓小学校）

小学校4年 総合的な学習の時間「わたしたちの町の生物を守ろう」

かつて富雄川に住んでいたニッポン・バラタナゴを題材とした授業を構想した。生き物観察や水質調査の体験活動をしたり、近畿大学と連携したりして、なぜニッポン・バラタナゴが住めない川になってしまったのか考えさせようとした実践である。ニッポン・バラタナゴが住める川にしていくための方法を考えさせる学習では、小学生の発想として「ごみを捨てない」という意見が多く出ることが予想されるが、関係する生き物を含めた生態系を創っていくことが必要であり、それをどのように子どもたちに理解させていくのかが大きなポイントになると思われる。

3) 吉田悠亮さん（奈良教育大学教職大学院 教育情報化マネジメント領域）

高校2年 数学科・総合的な探究の時間 「おいしいお茶の淹れ方」

奈良県の名産品である大和茶を題材として、収穫体験や試飲体験などを通して、大和茶の魅力に気付かせ、校外外でその魅力を広める活動を構想した。指数関数を取り入れるということについて、数学が生活の中に入っているという点についておもしろさを感じる。一方で、小学校の4年生で実施する大和茶の学習をどうするか、高校生らしい探究としていく上でどのような学習(特に行動化)が必要か、という点が考えどころであると思われる。

【ルーム4】ファシリテーター：加藤久雄（奈良教育大学）

1) 山平楓さん（社会科教育専修3回生）

中学校2年 社会科（地理的分野）「自然災害からわたしたちの暮らしを守るには」

意見交流から

- ・GT…右京区役所の方を招く（ハザードマップを作っている人）
- ・渡月橋の嵐山周辺は、平成25年の台風で被災している。過去にも被災した地域で実践予定。
- ・ポスターの発信先を高齢者に限定したのは何故？
町内会が機能していない。生徒がその点に貢献。能登の地震でも高齢者の避難に難があることが分かった。
- ・実践者としてのこだわりは？
→自分たちの住む地域に特化した実践が可能となる。責任を実感させたい。
- ・社会科の地理的分野としての学びは？ 地図の読み取り方や、地域調査の手法を学ばせたい。

- ・ハザードマップは、読む人の世代によって見え方が変わるのでは？
年齢別のハザードマップは作れない？
- ・クリティカルシンキングを働かせるきっかけになるかもしれない。

2) 澤村舞花先生（菊池市立泗水小学校）

小学校1年 生活科「たのしいあきいっぱい」

意見交流から

- ・国語の学習（説明文）とも関連づける。「見立てる」
- ・どんぐりを使ったおもちゃを作る子が多くいた。
- ・幼稚園児を招くことで目的意識がもてる。成功させられたら達成感も味わえるだろう。
- ・子供たちの感性や気付きを高められるような授業実践になっている。
中学校の授業にも取り入れたい部分。
- ・2年生にどのようにレベルアップする？
→1年生は季節のもの。2年生はより科学的なおもちゃを作る。
3年生から始まる理科の学習に接続する。
- ・感じる力（五感を通じて） 体験と表現の一体化→気付きの質を高める。

3) 栗山泰幸先生（奈良教育大学教職大学院 教職開発専攻）

中学校2年 社会科（歴史的分野）「近現代の日本と世界-開国と近代日本の歩み

- 『明治新政府の成立と立憲国家についてプレゼン授業しよう』

意見交流から

- ・自身の教育観を反映させた授業実践を構想している。
- ・プレゼンに向かう児童の動機はあるのか？
学習内容のまとめ以上に、学んだことへの感想や心の中を表現していく場として位置付けたい。
- ・つぶやきを拾う。思いを素直に表現し合える雰囲気作り。認め合える学級の雰囲気を作りたい。
- ・ノートには考えを書くが、表現できない子。（正解を求めすぎる生徒の姿、社会の雰囲気）
- ・生徒指導の機能を生かした、教科の授業づくりを行いたい。
→その際、ESDの視点を取り入れると有効に働かだろうと考えている。
- ・Google クラウドのレポート（まとメモリー）で学びの蓄積をしてきた。
成績向上のための自分専用の学びではなく。みんなで学びを共有する。

【ルーム5】ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

1) 中嶋千智さん（家庭科教育専修3回生）

小学校6年 総合的な学習の時間「継承したいわたしたちのまち」

現在スクールサポートにも言っている佐保川小学校を想定。

JR 奈良駅旧駅舎を題材に。

解体決定から地域の保存の声→人々の思いと行動が社会の変化を起こした事例に触れ、その良さや背景を知ろうとし、受け継いでいく気持ちを持たせたい。

意見交流から

- ・2004年頃のこと、車輪に乗せて移動していたような映像を見た記憶がある。普段しないこととして

- 印象に残っている出来事である。そういった奈良にとって大きな出来事を題材にしている点が良い。
- ・旧駅舎の構造や「大和モダン建築」なども旧駅舎の魅力として注目してはどうか。奈良ホテルや菊水楼もこの建築様式に当たるようだ。
 - ・当たり前にあるものが当たり前でないという視点は、ESD において重要視したい視点なので大事にしてほしい。
 - ・身の周りから考えるときの具体案としてどんなものを想定しているか？
→お地蔵さん、平城宮跡、佐保川の桜並木、大佛鐵道記念公園など
 - ・大西先生が以前、社会科の実践で素晴らしい取り組みをしていたので、資料を見せてもらうなどして、人々の思いを感じるためにはどういった人と出会うのがいいのか、どんな話が聞けるといいのかなど教材研究をもっとして、指導者側がイメージをもって指導観などに反映する必要があるのではないか。佐保川の桜についても、大西先生の素晴らしい実線があるので教えてもらうといい。

2) 上部遥加さん（家庭科教育専修3回生）

小学校5年 総合的な学習の時間「私たちの海のアマモを守ろう」

地元である三重県伊勢市の小学校を想定。

身近な海、アマモ、藻場を題材にして、三重県水産研究所とも協力したい。

社会科で出てきた藻場への興味を持っていたことから、「海のゆりかご」と呼ばれるアマモについて学習していく。水産研究所とも協力しながら、学校でアマモを育てられるか、その生育にはどんな条件が必要かなど理科とも関連付けながら学習をすすめる。

学習の最後には、海岸清掃など自分たちにできることを考え、行動化につなげていきたい。

意見交流から

- ・アマモを育てることで海の環境を整える。そうした活動の指標として生き物調査がいいのではないか。児童も積極的に活動するであろうし、水産研究所との協力があれば難しくなさそうである。
- ・歴史的な地域として調べていくことも面白いのではないか。アマモを刈り取る神事もあるようであるし、そういった視点からも海とともに生活してきた二見だからこそ、どのように海を守ってきたのか、この地域に住む自分たちはどうあるべきかといった価値観の変容がみられそうである。
- ・「海のゆりかご」といった生物視点だけでなく、赤潮を防ぐような役割もあって「ブルーカーボン」と呼ばれるように環境面でも大事にされてきているのではないか。
- ・アマモを育てる環境にはどんなものがあるか。
→理科「植物の成長」との関連で日光や気温・水温といった環境を比較しながらできたらと考えている。
- ・アマモの神事を導入にしてはどうか。知っている児童がいるかもしれないし、知らなければなおさら、海岸に落ちているあの海藻って二見にとって重要なものだったのだと感じられるかもしれない。
- ・児童からアマモについて、「調べたい」と主体的に学習が進んでいく中で、「どんなふうに育つのか」「どんな役割があるのか」など、詳しい人に聞いてみたい、育ててみたい、こんな活動がしたいと学習がすすんでいたり、広がっていきるととてもいい活動になりそうである。

第11回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2024年2月6日(火) 19時~21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 34名
- ◇内容 学習指導案・カリキュラムマネジメント案の相互検討、実践報告

○学習指導案・カリキュラムマネジメント案の相互検討

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明

1) 藤岡晃弘先生(奈良市立三碓小学校) 小学校5年 総合的な学習の時間

「わたしたちの住む三碓のたからものなんだろう ~見つけよう!三碓遺産~」

世界遺産について知る 登録基準について知る

→ どのような理由で世界遺産に登録されたかを調べ、自分たちの言葉で説明する

「古都奈良の文化財」について調べ、現地学習 ボランティアガイドの方へインタビュー

「たからもの」について見つける 共有

→ 自分たちの地域に目を向け、三碓遺産を見つめよう

登録基準について話し合う(ヒト・モノ・行事・景色)

三碓遺産認定委員会で話し合う スライド作成して発信

国語(表現方法の学習)、道徳(受け継がれてきた伝統文化の学習)

これまで目を向けてこなかった地域のヒト・モノ・コトに関心が広がってきた

「自分にとって」から「地域にとって」という視点になってきた

意見交流から

- ・「聞いて 聞いて 聞いてみよう」(国語)、産業学習(社会科)ともつながっていると思う。
- ・「いいものを見つけよう」という視点で地域を見ているのが地域への誇りにつながる。
- ・基準を決めるときが大事。なぜこの基準なのかについて考えるときの様子は?
→ 各自が考えた基準を「みんなが納得できる」基準にまで話し合って高めていった。
- ・それぞれ価値観が違う中で、子どもの中でも折り合いをつけていく必要もあるのでは?
→ みんなが知っていて、残していきたいとみんなが思えるものに限って決めていった。
先に基準を決めてしまうのではなく、まずは見つけてきたものを大事にした。
- ・学年だけでなく、学校全体に呼びかけて遺産を考えていく方向もあると思う。

2) 橋口和真先生(屋久島町立八幡小学校)

小学校3・4年 総合的な学習の時間「自然を守る取組を考え、実践・発信しよう」

大単元「発見!発信!屋久島の自然」の第3小単元にあたる

第1小単元「屋久島の海の自然について調べよう」(海のレンジャー体験)

第2小単元「屋久島の山の自然について調べよう」(山のレンジャー体験)

子どもレンジャーとして屋久島の自然を守るために自分たちにできることを考え実践する

どうしたら自然を守れるかSWOT分析 課題設定 取組の具体化・実践

→ 成果と課題の分析 裏山のヤクタネゴヨウ(絶滅危惧種)の保全活動について見学し、知る

屋久島町 ESD ウィークなどで発信 新3年生に引き継ぐ

1年間を通しての学習なので、学びの連続性を意識している

教科・領域との関連は、内容面と方法面に分けて記述した 「使えるストーリーマップ」に

価値の判断基準が増えるように たくさんの「ものさし」を持ち、使いこなせるように

意見交流から

- ・複式学級で、3年生でやったことをさらに4年生でやるときの工夫は？
 - 3年…屋久島の自然の基礎知識の洗い出し
 - 4年…昨年度の学習の成果と課題の整理 「もう1回やりたい！」
- ・ESDで育てたい資質・能力をストーリーマップの中でどのようにつないでいけばよいか？
 - 教科の方にも明示した方が分かりやすいかもしれない。
- ・メタ認知を養うには対話を多くする必要があると思うので、それが分かるマップにしたらさらいよい。
- ・2年間同じ学習をする価値は？
 - 2年間かけてやっと分かってきたというところがある。(やり切れていないところもある)
- ・SWOT分析について詳しく教えてほしい。
 - 強み (strong)、弱み (weakness) と、もともとあった内的なものとの外的な要因とを4つの指標に書き込んで分析していく。

【ルーム2】ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 井阪愛子先生（平群町立平群中学校）

中学校3年 総合的な学習の時間「修学旅行を機会とした平和学習」

- ・平群中学校の学校教育目標
人権尊重の精神を中核とし、主体的に学び、心豊かにたくましく生きる生徒の育成
- ・平群中学校の「探究」と「探求」
探究 課題をよりよく解決する学習を通して自己の生き方に迫る
探求 自己の生き方についての考えを深め、道徳科へと学びをつなぐ
問題を「わがごと化」し、探究しつつ、SDGsとの関連に気づかせる
- ・生徒の状況
 - ①問題があることは認識できるが、他人事であり「わがごと化」できていない。そのため、自らの課題としてとらえきれない。
 - ②被援助志向性が低く、helpが出せない。特に教員には出せない傾向。
全国平均:66.4% 平群中:約50%
わかるまで教えてくれる 全国88.9% 平群中:約80%
- ・教員の状況
学校の課題意識:不登校の解消:家庭状況を不登校の原因に考えがち
目の前の子どもに注力できているか疑問。子どもについて話し合う教師集団が必要
- ・単元の背景
沖縄戦の同世代の若者たちのことを「わがごと」として考えることで、自分の生き方について考える生徒を育てたい。
政府が戦争した理由はわかるが、国民はどう思っていたのだろうか？
ひめゆり学徒隊とふじ学徒隊のその後の比較から、自分の人生を考える人に。

- ・修学旅行後、文化祭での発信・学びを後輩につなぐ意識から、道徳教育・ESDの価値観「人権・文化を大切に」へと展開していく。

意見交流から

- ・子どもに何を求めるのか？

ロシアーウクライナ、イスラエルーガザの状況を目の当たりにする今、「我々が選択して平和な世界を構築することが可能なのか」が問われている。相手を理解しようとする心（共感力）の育成が重要だ。自分自身で責任をもって自らの行動を選択する人になってほしい。

- ・わがごと化について

わがごと化するためには、自分の生活を見つめ直すなど、自分の方に矢印を向けた方がいいのではないか。答えのない問いについて、考え続ける態度が重要だと思う。

- ・戦争のこわさはわかるが、自分の生活とはかけ離れており、わがごと化は難しい。

平和をおびやかすものごとは戦争だけではない。日常を変えさせてしまう出来事にどんなものがあるかを考え、それに対する行動化を促す。

- ・6月23日の沖縄慰霊の日に絵本『へいわってすてきだね』の読み聞かせ

平和とは「あたり前」のこと。あたりまえの日々の大切さに気付かせ、平和を大切にする心情を養い、行動化を促す。

2) 森崎史郎先生（熊本市立天明中学校） 中学校1年 理科「活着ている地球」

単元展開の概要

地震のメカニズムについて学ぶ

プレートテクトニクス → 熊本地震など過去の災害に着目

→ これからも、自然災害の可能性があることが分かる

天明地区の防災体制は十分なのか？熊本県の防災体制は十分なのか？

津波対策 液状化対策 河川氾濫による水害

- ・行政の対応ばかりではなく、自分たち中学生にできることを考える
- ・地球のめぐみにも目を向ける 火山・温泉・美しい景観

意見交流から

- ・理科だけで学習を展開することについて

全4時間では厳しい。総合的な学習につなげたり、避難訓練などの学校行事（特別活動）の時間に学びの成果を全校に発表したりなどしてはどうか

- ・火山による影響のプラス面にも目を向けることは重要。

土壌分析などを行い、火山灰による農業への影響を多面的に考える。

- ・地震など自然をコントロールすることはできないことを学びつつ、ただ怖がるのではなく、大地の恵みについて考えたり、災害に備えたり、災害発生時のシミュレーションを行うことで、安心感を醸成することができるのではないか。

○実践報告

大島英樹先生（福岡市立香椎小学校）

小学校3年 総合的な学習の時間「つたえよう！ えいようまんてん大豆パワー」

地域のことは「好き」 主体的に学習に取り組む態度、表現力に課題 食べ物の好き嫌が多い

「すがたを変える大豆」(国語)、「植物の育ち方」(理科)の学習

大豆の食品についてもっとくわしく調べよう → 家庭で1週間調べてみる 給食の成分表

→ 調べてみたいこと・チャレンジしてみたいこと

・大豆の栄養って? ・豆腐をつくってみたい ・味噌を作っている人に話を聞きたい

校区に豆腐、醤油、味噌を作っている人がいる

○味噌の工場見学

○醤油の作り方を体験

○豆腐工場のオンライン見学 → 自分たちで豆腐作りにチャレンジ(うまくできなかった)

作っている人はすごいなあ! 大変なんだなあ!

○きなこ、もやし、納豆も作ってみたい → すべて体験

↓ 伝えたい

大豆フェスティバルをしよう

アレンジレシピをつくりたい(調理方法や味付けについて知りたい) 地域の方や調理員さんに聞く

とうふのアレンジレシピをつくるために身近な人にインタビュー

とうふココア、とうふもち、パンケーキなど、様々なアイデアを出す

専門家や友達にアドバイスをもらったりした

↓

スライド、劇、紙芝居、パンフレット、試食会などで伝える

主体的な活動はできたが、どこまで自分事化できたか 3年生の経験値では難しいところも

意見交流から

・学習して子どもの変容は?

→ 給食を大事に食べようとする姿が見られるようになった。

・今は自分事になっていなくても、家庭で新たなレシピをつくるなど今後につながっていけばいいのではないか。

・「自分事にさせなければ」ではないと思う。実践を聞いている範囲では、子ども自身がピンときていないだけで、3年生なりの自分事にはなっているのではないかと感じた。

・学校全体に発信することで全体の残食が減るなど、発信する意味が出てくると思う。

・表現力を高めるための工夫は?

→ 国語、理科など他の教科において連携して、相手を意識して工夫できるよう指導を重ねた。

子ども自身の「伝えたい」「教えたい」という思いを大切に、「だれに?」を明確にさせた

・子どもの意欲づけの工夫は?

→ やりたいことができる学校の風土がある。子どもがそれに乗っかっている。

・食物アレルギーなどの配慮は?

→ 幸い学年の中には一人もいなかったが、今後するならばいちばん配慮していく必要はある。

・食の大事さ、ありがたさを実感できるいい実践だと思う。大豆という実はものすごく身近なもののすごさが3年生なりに理解できたのではないか。

令和5（2023）年度 近畿ESDコンソーシアム・奈良県立万葉文化館
「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 開催要項

1. 目的

ESDを指導できる教員の資質・能力の向上には、継続的な研修を実施する必要がある。近畿ESDコンソーシアム活動の一環として、奈良県立万葉文化館と連携し、「万葉集・明日香村」を中心とした国語科・社会科や総合的な学習の時間等での授業づくりを中心とした連続セミナーを開催する。研究員による万葉集の内容や時代背景等に関する情報提供、大学教員等による単元デザイン作成に関する助言のもと、現職教員および学生が指導案を作成し、授業実践を行うことで、教員としての資質・能力の向上を目的とする。

2. 主催 奈良教育大学・近畿ESDコンソーシアム

3. 協力 奈良県立万葉文化館

4. 会場 奈良県立万葉文化館

5. 実施日

- ①令和5年 5月27日(土) 近隣のフィールドワーク
- ②令和5年 7月15日(土) 万葉集についての話題提供、館内見学
- ③令和5年10月28日(土) 授業構想案の検討
- ④令和5年12月 9日(土) 学習指導案の検討
- ⑤令和6年 1月27日(土) 実践事例の報告会

※ いずれも10時～12時

6. 参加者

近畿ESDコンソーシアム構成団体に所属する教員等
奈良教育大学の学部生・大学院生・教職大学院生
奈良万葉文化館 企画・研究係長 井上さやか氏
奈良万葉文化館 主任研究員 阪口由佳氏
奈良万葉文化館 主任研究員 竹内亮氏
奈良教育大学 教授 中澤静男
奈良教育大学 特任教授 加藤久雄
奈良教育大学 特任准教授 米田猛
奈良教育大学 特任准教授 大西浩明

第1回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2023年5月27日(土) 10:00~12:00
◇場所 県立万葉文化館周辺
◇参加者 【学生】無量井、松井、吉岡、川田、東、難波、森、井上
【万葉文化館】竹内、井上、阪口
【大学教員】加藤、米田、大西 計14名

- ◇内容 明日香村内のフィールドワーク 「遺構の保存と活用について」
飛鳥京跡苑池 → 飛鳥宮跡 → 飛鳥寺西方遺跡 → 飛鳥寺

1. 飛鳥宮跡苑池

飛鳥宮に隣接し、飛鳥川のそばにある
河岸段丘を巧みに利用したつくり
東アジア（主に新羅）の古代苑池と似ている
朝鮮や中国には、このような苑池に招待する風習があった
→ 当時の国際関係の象徴
ずっと一面田んぼであった
大正時代に見つかった石 → 「ここには何かある」
一人の研究者の言葉から、99年に発掘調査をして全貌が分かる
→ 日本書紀の記述と研究者としてのソマティックマーカー



苑池をのぞむ場所から

2. 飛鳥宮跡

①北の正殿跡

天皇の私的な空間と考えられる
東西24m、南北12mの建物
正殿の周りには人の頭ほどの石で舗装されている
道路を挟んだ北側に全く同じ構造の正殿がもう一棟あった
柱の位置が分かるように整備された
→ こういう平面展示は草刈りが大変
遷都1400年に合わせ、2030年までに整備予定
（「飛鳥宮跡活用基本構想」：奈良県）
平面展示と立体展示を組み合わせ、当時の飛鳥宮を再現しようとしている
役場もすでに移転した



正殿跡の平面展示

②井戸跡

1972年に「伝飛鳥板蓋宮跡」として国史跡に指定されたが、2016年に長年の発掘調査の成果を基に、「飛鳥宮跡」に変更された。
→ 4つの宮跡がほぼ同じところに造営されている
井戸が復元されているところも、実際の遺跡は数メートル下に埋め戻されている

③万葉歌碑



「采女の 袖吹きかへす 明日香風
都を遠み いたづらに吹く <志貴皇子>」

藤原京に都が遷ったことを嘆き悲しんでいるが、
飛鳥からは歩いて40分程度

→ 今までは煌びやかだったのに

采女としての役目ももうないのか

心理的に「遠くなってしまった」ことではないか

3. 飛鳥寺西方遺跡



「入鹿の首塚」において

「飛鳥寺西の槻樹（つきのき）の広場」ではないか
（日本書紀の記述から）

中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通して出会った場所

壬申の乱では飛鳥古京の戦いの舞台

蝦夷や隼人などの辺境に住む人々を招いて饗宴を行う場

兵隊の集合場所

ケヤキの木はまさにこの地のシンボルツリーであった

「入鹿の首塚」と言われる石塔は、そんな聖なる木があったことを伝えるためのものではないか
そう言われるようになったのは江戸時代ごろか

遺跡には砂利が敷かれていたが、一部敷かれていない部分があった

その部分はかつてのケヤキの木の長い根が張っていたのではないか

その太さから考えて、かなり大きな木（樹囲3~4m）であったと推測される

4. 飛鳥寺とその周辺



講堂の柱の礎石がそのまま見られる

隣接する来迎寺の中にも

1400年前のものがそのまま見られるのも明日香の魅力

飛鳥寺講堂の柱の礎石

【まとめ】

- ・「よく分からない石造物」ではなく、学術的な裏付けのもとに明日香を教材化することが重要
- ・万葉集だけでなく、古事記、日本書紀も出発点は明日香の地
飛鳥は「日本文学発祥の地」と言えるほどのポテンシャルがある

第2回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日 時 2023年7月15日(土) 10:00~12:00
◇場 所 県立万葉文化館
◇参加者 【学生】松井、東、井上、田中、飯田
【現職教員】藏前
【万葉文化館】井上、阪口、竹内
【大学教員】加藤、米田、大西 計12名

◇内 容 万葉文化館研究員からの話題提供、館内見学

1. 話題提供(企画・研究係長 井上さやか氏)

「采女の 袖吹きかへす 明日香風 都を遠み いたづらに吹く」

飛鳥宮と藤原宮は30分距離だが、心理的距離感。

寂しいイメージ。

説明しすぎない方がいい(マンガから入り、最後に原文)

興味を持つ前に説明しすぎると、勉強したくなる。

教え込みでは興味は湧かない。

万葉文化館をなぜ交通の便が良い奈良市に建てなかったのか。

それは万葉のゆかりは飛鳥だから。その場所で詠まれたのを学ぶのが大事。

飛鳥(飛ぶ鳥)は明日香という土地の枕詞。

用語の変遷を深ぼりして行くと興味が湧く。

知る機会が本当に大事である。

文法説明から入るのではなく、視覚として漫画を使いあとは背景や作者を知るとよい。



2. 館内見学(竹内研究員、阪口研究員)

①復原遺構「飛鳥池工房遺跡」

もともこの場所には江戸時代以来の農業用ため池があった。

飛鳥時代後期(7世紀後半)の大規模な工房跡

南地区: 工房で使われた原料、製品、工具などが多数出土。

素材は金属(金・銀・銅・鉄)、ガラス、玉類、粘土(瓦)、漆、木 など。

原料を溶かす炉跡の遺構

日本最古の铸造貨幣「富本銭」がこの工房で生産。

北地区: 飛鳥寺に関連する木簡が多数出土。

「天皇」と書かれた木簡もあるが、その内容はよく分からない。



飛鳥池工房遺跡(南地区)

②万葉劇場「宮廷歌人 柿本人麻呂」(上映時間14分)

持統朝から文武朝の時代は、和歌の最盛期。

天皇の座を約束されながら思いがけず若く世を去った草壁皇子の死を悼み捧げた挽歌

東(ひむがし)の野に炎(かぎろひ)の立つ見えて かへり見すれば月傾(かたぶき)きぬ

「かぎろひ」…厳冬の早朝。太陽光線のスペクトルによって現れる現象 光の乱舞

③一般展示室

古代の市に迷い込んでもらうコンセプト

・「歌の広場」で歌垣の風習を知る

歌垣…歌の掛け合い 男女の恋歌のやり取り

市でさかんに行われていた

アニメーションで「風土記」「日本書紀」に載る、さらに古い時代の歌垣にまつわる話を紹介

「常陸国風土記」には筑波山での歌垣の記録

歌垣で妻問いの宝(求婚された証)を得られなければ、

一人前の男女とは言えない

歌垣では歌以外にも、お酒やごちそう、音楽や舞も楽しまれた

古代の市は、辻や大きな木を目印に開かれたと考えられている

現在の市場のように、食べ物や生活用品など、様々な品物が集まる物流の場

多くは物々交換によって品物の売買が行われていたが、和同開珎は市での売買でも利用された

藤原京以降の都には必ず市が設けられるようになったが、古代の市は都に常設される以前から存在していた

万葉集には、海石榴市(つばいち)、軽市(かるのいち)などが詠まれている

紫は 灰指すものそ 海石榴市の 八十の衢(やそのちまた)に 逢へる児や誰

たらちねの 母が呼ぶ名を 申さめど 路行く人を 誰と知りてか

・古代発音の復元(タッチパネル)

古代の歌はどのような旋律や発音で歌われていたのか

6通りの歌い方で聞く

実際のメロディーは不明だが、今よりも高低があり、音の種類が多い
言葉の発音も異なっていた

・万葉集の表記を知る(タッチパネル)

万葉集はすべて漢字で表記されている

意味のある漢字(例:山)、万葉仮名(例:夜麻)だけでなく、様々な工夫が見られる

万葉集の歌人が書いた文字が正倉院などに残されている

・様々な万葉集コーナー

奈良時代に書かれた原本は残っていない

いろいろな人が写した「写本」によって伝わり、江戸時代に印刷され(版本)、今に至る



「歌の広場」



「万葉集の表記を知ろう」

第3回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日 時 2023年10月28日(土) 10:00~12:00
◇場 所 県立万葉文化館
◇参加者 【学生】東、井上
 【万葉文化館】井上、竹内
 【大学教員】加藤、米田、大西 計7名

◇内 容 授業構想の検討

1. 東晃太郎さん(社会科教育専修3回生)

飛鳥時代・万葉集を地理学の視点から考える授業を展開したい
全国の地を表す言葉が含まれる万葉集を知るには、万葉歌碑が有効である

ただし、すべてが必ずしも万葉歌が詠まれた場所に建てられているとは限らない

万葉文化館の「万葉百科」、奈良女子大学の「万葉歌碑データベース」をもとに調べさせる

関心をもった万葉歌碑に刻まれている万葉集を取り上げ、全国地図に点で表していく

→ 万葉集は日本の至る所で詠まれていたことに気づく

→ 伝える活動

【意見交流から】

- ・地形は当時と大きく変わっている。それが分かれば面白い。
分かりやすいのは川筋や海岸線。
万葉集に詠まれた地形と今との違いに気づけば、地理との関連が見えてくる。
香具山も、もとは山容が違ったという説がある。
- ・万葉集は、そのあとの時代の歌に比べて、その場で詠まれたものが多い。
特定のポイントを決めて、どこで詠まれたのかを考えるといいかも。
実はその場所に行っていないということも分かるかも。
- ・全国地図に表すのはデジタル? シールで?
緯度・経度まで分かればかなり正確になる。今はそこまでの資料はない。
- ・地名の由来を調べれば面白いと思う。
「なぜ、そんな名前なんだろう?」というところはたくさんある。
- ・まずは、対象の学年や教科などを絞れば、もっと具体的に授業の流れが見えてくる。
一から万葉集について知って考えるのは難しいから、中学生の国語? 社会? 総合?
- ・全国地図に表して、そこから考える展開が必要ではないか。
単に、「全国各地で詠われている」だけでは浅いと思う。
「なぜ、そんなに全国各地で詠われているのだろうか?」を考えることで、万葉集の価値が見える。
そこから何を考えさせたいのかを明確にする必要があると思う。



2. 井上寿美さん（大学院教育学研究科 伝統文化教育・国際理解教育専攻）

漢詩や万葉に出会うきっかけづくりを、詩吟や和歌の表現を通じて子どもたちに伝えたい
私には、受け継がれて来た漢詩が心の支えや栄養となっている



山上憶良

瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲はゆいづくより来りしものそ
まなかひにもとなかりて

安眠しなさぬ → 憶良の思いを想像しながら歌ってみよう

「なぜ山上憶良は子どもや生活の様子を歌にしたのだろうか？」

子どものことが何よりも大切 離れていると寂しい

頼山陽が母への思いを読んだ詩を詩吟で吟ずる

→ 自分は家族に支えられている、大切に思われていることへの気づき
和歌や漢詩を、書道や絵などに表現 発表会

【意見交流から】

- ・ 詩吟は江戸時代に国学研究が盛んになって、漢詩に節をつけていったことから始まった。
流派によって吟じ方に違いがあり、120以上の流派がある。
いわゆる、何百年前につくられた漢詩に、後の時代の人々が節をつけたもの。
そういった詩吟が生まれてきた背景は学ぶ必要があるのではないか。
- ・ 「犬養節」で有名な犬養孝さんの節も、彼が勝手につけたもの。
万葉集の歌が作られたころはどのように歌われていたかは分からない。
しかし、歌であって歌われていたはず。
- ・ 取り上げる山上憶良の歌は、彼が70歳ごろの歌であって自分の子どものことを歌ったものかは分からない。
- ・ 導入は詩吟でいいのでは。声に出して表現するというところこそが大事であるというゴールでも。
声に出す → 歌に込められた思いをどう歌うかを子ども自身が考え工夫することが大事。
- ・ 発表会も、表現の仕方は子どもに選択させた方がいいのでは。
- ・ 万葉集も歌われていたことを知る調べ学習のために万葉文化館を訪れる。



第4回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日 時 2023年12月9日(土) 10:00~12:00
◇場 所 県立万葉文化館
◇参加者 【学生】川田、東、井上
 【万葉文化館】井上、阪口
 【大学教員】加藤、米田、大西 計8名

単元構想案の検討

1) 東晃太郎さん(社会科教育専修3回生) 中学校3年 総合的な学習の時間

「近江の海 沖つ島山 奥まけて 我が思ふ妹が 言の繁けく」

「あられ降り 遠江の 吾跡川柳 刈りぬとも またも生ふといふ 吾跡川柳」

二首とも柿本人麻呂が詠んだ歌(近江八幡、静岡にそれぞれの歌碑がある)

近江と遠江・・・似ているけど、何が近くて何が遠いのだろう

「あふみ」淡海(琵琶湖)・・・近江 「とほつあふみ」遠い淡海(浜名湖?)・・・遠江

→ 万葉集に収められた歌に出てくる地名に興味を持たせる

滋賀や静岡など大和以外でも万葉集が詠まれている

「万葉集はどれだけの場所で詠まれていたのだろうか?」

万葉歌碑の分布を調べ、全国地図にシールを貼り付けていく

「なぜ、万葉集は日本の全国各地で詠まれていたのだろうか?」

万葉集を調べて、関心をもった歌や身近な地域の歌を発表しよう

【意見交流から】

・導入でいきなり「近江」「遠江」が出てきて難しいのでは?

→ 最初に身近な地域の歌で入って、先に全国の歌を調べシール貼りでもいいのでは。

・「万葉集」に収められている歌が、「万葉歌」であるという理解をしてほしい。

巻7は作者不明の歌が多く、様々な地域の歌が意図的に集められていると考えている。

・地名で万葉歌を探っていくのはおもしろい。

・最後に発表させるのは、何をどのように発表させたいか?

→ どの地域でも、思わず歌にしてみたい風景や景観がある。そんな表現することへの思いに迫りたい。

・歌には詠まれているが、今はどこか分からないような地名もある。それがどこかを探っていくのも楽しいと思う。

・大伴家持の邸宅が今の一条通りにあったという。家持作の歌を紐解くと見えてくるものがある。そういう探究的な学びはおもしろい。



2) 井上寿美さん(大学院教育学研究科 伝統文化教育・国際理解教育専攻)

小学校6年 総合的な学習の時間「詩歌を表現してみよう」

まずは詩吟を体験させる(2時間)

漢詩「寒梅」を見て、そこに書かれた意味を考える

詩を声に出して読む 発声 吟じる練習 グループ・全員でミニ発表

「万葉集の和歌を朗詠しよう」 詩吟よりもっと昔の歌

「瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして俣はゆいづくより来りしものそまなかひにもとなかかりて
安眠しなさぬ」(山上憶良)

→ パズルにして現代の言葉に当てはめてみる(万葉仮名でも) 和歌で歌ってみる

漢詩と万葉歌との共通点について知る

万葉文化館の見学と講話…万葉集についての理解 万葉歌の歌い方

和歌や漢詩を、書道や絵、音楽などに表現 構成吟や書道吟に挑戦 → 発表会

「今まで奈良に伝わっている文化は他にはないだろうか？」

【意見交流から】

- ・6年生にとって、歌の意味を理解することは難しい。歌について調べるのも、ネットから調べると疑わしいものもあって、そこは情報リテラシーに関わってくる。
- ・奈良に伝わる文化とは何をイメージしているか？
→ 墨、筆、太鼓、祭り、習俗など、何でもいいと思う。どのように受け継がれてきたのか、なぜ受け継がれてきているのかが感じられればいいと思う。
- ・発表会にあたり、「何でもいい」ではかえって子どもが困る。いくつかを提示して選択させる方が。
- ・万葉文化館に実際に行くことで、「歌垣コーナー」から万葉歌の歌い方を学べる。研究員の方との出会いもあって、学びが深まる。図書コーナーで調べることも可能。
- ・歌をどれだけ自分事にできるかがカギ。そのきっかけが詩吟というのが目新しい。

卒業論文中間報告

川田大登さん(国語教育専修4回生)

中学校国語科における『万葉集』教材の開発についての研究

-古典の世界に「親しむこと」に着目して-

中学校国語科における『万葉集』の指導に関連する指導事項

第3学年〔知識及び技能〕(3)ア

「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。」

古典の世界に「親しむ」ことができる授業がなされているか疑問

中学校3年生で古典の学習が「あまり好きではない」、「嫌い」と答えた生徒の割合は7割弱

「意味が分かりにくい」「難しい」「面白くない」「めんどくさい」…

古典の世界と現在とでは、言葉や文化的背景が大きく異なることがあり、それによる古典の世界のわかりにくさがある

教科書の記載を見ても、歌同士のつながりを見出しづらく、歌ごとに一貫性のない指導に終始してしまう可能性がある



→ 『万葉集』の世界に親しみを持たせる教材の検討

視覚的に『万葉集』または学習する歌の世界をイメージできる視覚的な教材の開発

【意見交流から】

- ・現在の教科書が、「親しむ」ではなく「理解する」ものになってしまっている。(受験対策)
- ・教科書の脚注にある歌の解釈がすべてではないはず。
→ 「主体的な解釈、批評を行い、価値を発見する」方が大切
- ・視聴覚教材として、万葉日本画が使えるのではないか。
- ・いかに内面化させるかが大事なはず。そうでないと「親しむ」にはならない。
万葉人とわたしたちはいっしょなんだと実感できることが大事。



第5回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2024年1月27日(土) 10:00~12:00
◇場所 県立万葉文化館
◇参加者 【学生】東、井上
【現職教員】石田(都跡小学校)
【万葉文化館】井上、阪口
【大学教員】大西 計6名

学習指導案の検討

1) 井上寿美さん(大学院教育学研究科 伝統文化教育・国際理解教育専攻)

小学校6年 総合的な学習の時間「詩歌を表現してみよう」

漢詩「寒梅」を見て、そこに書かれた意味を考える

詩を声に出して読む 発声 吟じる練習 グループ・全員でミニ発表

「万葉集の和歌を朗詠しよう」 詩吟よりもっと昔の歌

「瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲はゆいづくより来りしものそまなかひにもとなかかりて
安眠しなさぬ」(山上憶良)

→ 万葉仮名のパズルにして現代の言葉に当てはめてみる

宇利波米婆 伊豆久欲利 胡藤母意母保由 麻斯提斯農波由 ……

憶良の歌を、①そのまま歌う ②作曲する ③書道で表現 ④絵で表現 選択させる

万葉文化館の見学と講話…万葉集についての理解 万葉歌の歌い方

館内図書館で発表に向けて調べ学習

→ 発表会(地域の人に) 持ち時間5分で発表、コメント

学習のふり返り

「今まで奈良に伝わっている文化は他にはないだろうか？」 → 調べ学習、発信

【意見交流から】

- ・万葉集は声の文化だったものを文字にするときに、外国の文字である漢字が必要になった。そういう流れを理解する意味でも興味深い授業になる。
- ・導入でいきなり漢文を見せられても拒否反応を起こす子どももいると思うので、クイズ形式にするなど、何か工夫がいると思う。

「寒」と書いて「冬」と読ませたり、「暖」と書いて「春」と読ませたりしている。

こういう発想の豊かさを感じ取らせたい。

- ・発表会で憶良の歌だけに絞ると、同じ発表が多く出る可能性がある。
→ いくつか他の歌を用意しておくといいのでは。
- ・その流れからすると、万葉文化館への見学は発表方法を考える前の方がいいのではないか。



- ・「文化」と言われても小学生には幅が広すぎてなかなか考えつかないと思う。
 - 「大切に受け継がれてきたもの」「これからも残していきたいもの」などに言い換える方が。
- ・せっかく地域に向けて発表会をするなら、各自が調べた地域に伝わるものも発表させたい。
 - 発表会はいちばん最後の方がいい。

2) 東晃太郎さん(社会科教育専修3回生) 中学校3年 総合的な学習の時間

『「え！そうなん！ここの地名の由来は万葉集なん？マップ」をつくろう』

～過去 — 現在 — 未来を見つめる道具として～

「万葉集→地名」となったものを探究する

(例) 愛知県の「あいち」

「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る」(巻三)であるが、この「年魚市潟」は「あゆちがた」と読み、名古屋市熱田区、南区の当時海岸であった一帯を指している
これを紹介し、万葉集が地名の由来となった例を生徒たち自身が探究

→ 万葉歌碑風カードに作成し、マップにまとめていく

「え！そうなん！ここの地名の由来は万葉集なん？マップ」を中学校体験入学で小学校6年生に発信する

→ 小学生から「え！そうなん！」ポイントをつけてもらい、自分たちのまとめや紹介の仕方について評価してもらう

未来次として、

①今後もあらゆる地名に着目する

その場所の地名の由来は何からきているのかを考えるきっかけになれば

②万葉集が由来となっているものを見つける

万葉集が過去—現在—未来を見つめる道具として活用できることに意義があるとする

【意見交流から】

- ・万葉集に詠まれた地名が由来になっているものは少ない。中学生が調べるのも難しいと思う。
 - 万葉集が由来となった地名に限定しない。
由来となった地名は由来となった地名として紹介する。
万葉集に残されている地名へと範囲を広げる。
都道府県や市町村単位ぐらいの規模の地名を探っていけるようにする。
旧国名に着目して表現する方法でもいいのでは。
- ・マップの名称は、「え！そうなん！ここの地名は万葉集に出てくるん？マップ」に変更。
- ・昔との海岸線との違いが見えてくるとおもしろい。
今は内陸になっているのに、「なぜこの歌は海のことが詠まれているのだろう？」…とか。



令和5年度 森と水の源流館 ESD授業づくりセミナー 開催要項

1. 目的

水リスクは、気候変動リスクと連動する世界的リスクの1つとして、世界経済フォーラムの年次総会（通称ダボス会議）でも認識されており、水問題を教材としたESDは、水保全への教育的取組として重要である。そこで、奈良教育大学ESD・SDGsセンターと川上村森と水の源流館が協力し、「水の恵み」や「森林環境」に着目した授業づくりセミナーを開催する。森と水源流館スタッフによる自然環境保全の取組や水生生物などに関する情報提供、大学教員による単元デザイン作成に関する助言のもと、現職教員やESDを学ぶ学生が相互に意見交流しつつ指導案を作成することで、ESDを指導できる教員としての資質・能力の向上を図る。

2. 主催

奈良教育大学ESD・SDGsセンター、森と水の源流館

3. 会場

オンラインによる開催（第5回はハイブリッドでの開催を予定）

4. 開催日時と研修内容

- 第1回 令和5年6月24日（土）川上村及び源流館の紹介・ESDの授業づくりの基本
 - 第2回 令和5年7月 8日（土）優良実践事例の分析
 - 第3回 令和5年8月 5日（土）単元構想案の相互検討
 - 第4回 令和5年8月26日（土）学習指導案の相互検討
 - 第5回 令和6年2月 3日（土）授業実践報告会：森と水の源流館にて
- ※ 開催時間はいずれの回も10時～12時（オンラインにて開催）

5. 参加者

ESDティーチャー、マスター、スペシャリストの現職教員
近畿ESDコンソーシアム構成団体に所属する教員等
奈良教育大学の大学生・大学院生・教職大学院生
森と水の源流館 事務局長 尾上忠大 及びスタッフ
奈良教育大学教授 中澤静男
奈良教育大学准教授 及川幸彦、大西浩明
奈良教育大学研究員 杉山拓次 ほか

2023年度 第1回森と水の源流館授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

◇開催日時 2023年6月24日(土) 10時～12時

◇方法 ZOOMを用いたオンライン

◇参加者

現職教員：新宮（奈良女子高等学校）、谷垣（青翔高等学校）、中谷（和歌山大学附属小学校）、奥戸（奈良市立平城小学校）、阿部（山形市立千歳小学校）、原（奈良学園高等学校）、中本（田原本町立田原本小学校）、島（大牟田市立吉野小学校）、

企業：吉田様（GEX）、川西様（GEX）

源流館：尾上、成瀬、上西、古山

学生：木村、田中、東、澤井、長嶺、芝田、井上（教職大学院）

大学：大西、中澤

計 23 名

【セミナーの内容】

1. 川上村及び森と水の源流館の紹介（尾上氏）

2. 源流館スタッフの自己紹介

3. ESDの授業づくりの基本（中澤）

(1) ESDの大きな枠組み

①持続可能な社会の創り手を育てるため、価値観と行動の変革を促す教育である ということ。
(経済重視だけでは地球・人類社会は持続不可能である) つまり、些末な知識や技能の習得よりも、人間性の育成に重点がある。

②ESD・〇〇 の特徴

- ・ ESD・環境教育 ESD・人権・平和教育 ESD・国際理解教育
 ESD防災・減災教育 ESD・気候変動教育 ESD・文化遺産教育など
- ・現状把握だけでなく、過去との比較から現状をクリティカルに捉えなおし、目指したい将来を意識し、そのための行動化を促す。(時間軸)
- ・現状把握だけでなく、他地域との比較から現状をクリティカルに捉えなおし、目指したい将来を意識し、そのための行動化を促す。(空間軸)
- ・これまでの自然現象・社会現象の変化における先人の働き、現代まで受けついでこられた人々(現在進行形を含む)にフォーカスし、あこがれ・感心から次世代を担う当事者意識を育む。(人から学ぶ、ロールモデル化)

(2) ESDの教材を見つける

①様々なセミナー、シンポジウム、ワークショップ、講演会に自分から参加して、刺激を受ける。
また面白そうな人を見つけて「名刺交換」する。

②身近な地域を中心に、教員自身が関心のあるネタを探す。

- ・文献調査：〇〇市史を読む。図録を読む。解説を読む。ミニコミ誌に目を通す。
- ・現地調査：現地に行って、自分の目と身体で捉える。
- ・インタビュー調査：博物館などの学芸員にインタビューする。現地の人にインタビューする。「名刺」を持参すること。

(3) ESD教材を深掘りする

- ・研究ノートの作成（PCでも可）
- ・教材に関係ありそうな場所を訪問し、比較し、共通点・相違点の抽出。
- ・教材に関係ありそうな人を訪問し、根掘り葉掘り聞く。何度も行く。

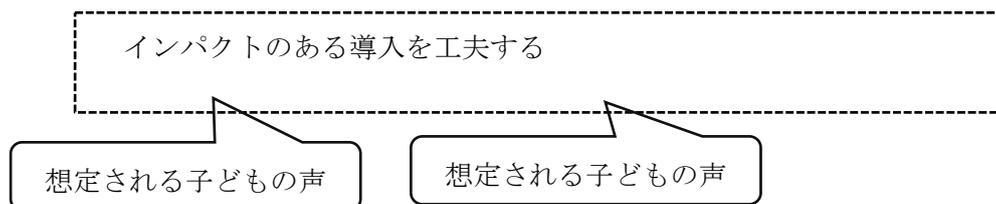
(4) 単元をデザインする：単元構想案を作成する（大西氏）

【単元構想案の様式】

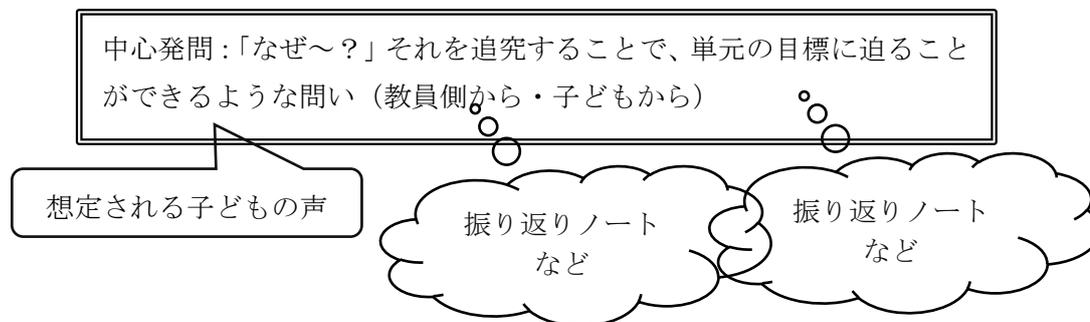
3つの発問で単元をデザインする：単元構想案を作成する（A4で1ページ）

1. 単元の目標
2. 単元展開の概要

導入



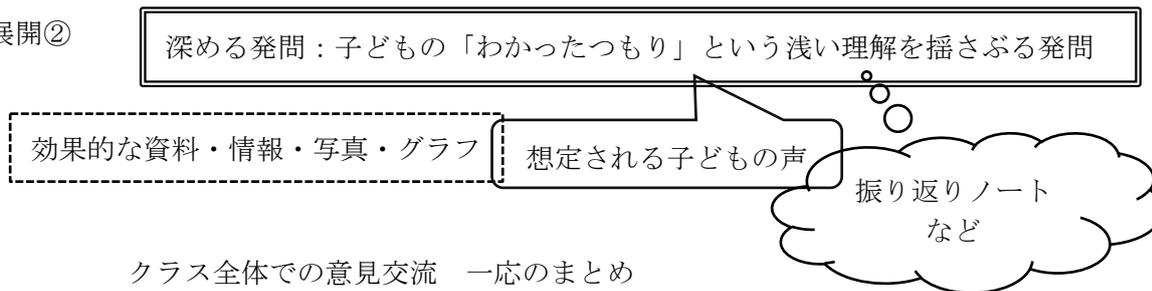
展開①



各グループでの仮説の作成と調査活動

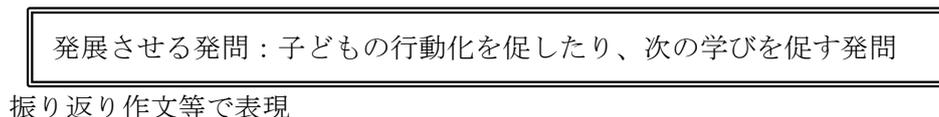
各グループでの調査活動のまとめの作成

展開②



クラス全体での意見交流 一応のまとめ

展開③



○ESDの価値観、視点、資質・能力をあと付で考える（これが授業における力点になる）

6. ESDにおける評価について

- ・自己評価カードを蓄積し、それをもとに学習後にレポートを作成し、メタ認知力を高める。
- ・相互評価により、①アイデンティティ形成、②最近接発達領域への刺激を行う。

2023年度 第2回森と水の源流館授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 7月8日(土) 10時~12時
- ◇方法 ZOOMを用いたオンライン方式
- ◇参加者

現職教員：中澤(郡山西中)、阿部(山形市立千歳小)、新宮(奈良女子高校)、中本(田原本小)、
島(大牟田市立吉野小)、谷垣(青翔高校)

学生：奥村、東、芝田、上部

スタッフ：尾上、成瀬、上西、高田

大学：大西、中澤

計16名

◇内容：優良実践事例の紹介

「地域の暮らしをみつめる」：大和郡山市立郡山西中学校総合的な学習の時間 2年生(中澤先生)
生徒数85名 1年間を通じた取り組み

目標：生徒の実態・コミュニケーション力に課題がある

地域の状況 ため池(金魚池)が多い 雨が少なく水不足

身近なマンホールのフタに吉野川分水の文字

校区にある水管理の標識「大迫ダムから88.8キロ」の表示

①事前学習：疑問を持って源流館を訪問する

10個のテーマを教員側で考え、生徒の提示した

源流館との事前打ち合わせのポイント

「答えを言わないでください」

②当日

生徒は展示にも集中 「もっと時間が欲しかった」

スタッフに質問する生徒

水の恵みを生かした地域づくり

③事後学習

郡山西中学校校区の現状を把握しよう

- ・地域の「よさ」と「課題」を出し合う
- ・保護者にもインタビューして現状を把握する
- アンケートの作成・集計・データ作成
- ・時間軸をずらす：地域の現状をクリティカルにとらえるために、お母さん世代への聞き取り調査とおばあさん世代への聞き取り調査

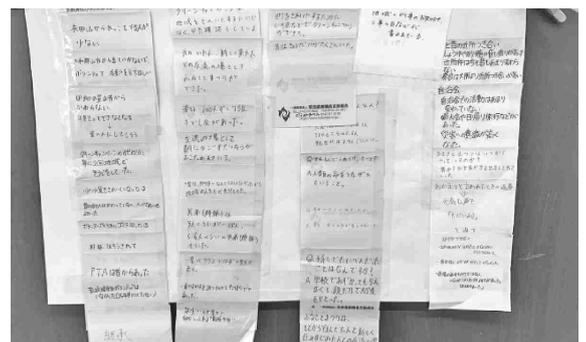
ポストイットを使ってお母さん情報とおばあさん情報を色分けした。貼りながら、カテゴリーを考えていた

◇改善すべき事柄ベスト3

◇継承すべき事柄ベスト3

◇発展させたい事柄ベスト3

④理想の地域デザインを模索する：グループで企画をつくってみる



- ・市役所の総合企画課からアドバイスをいただく
- ・市の総合計画を教わる（協力できることを見出す）

⑤行動化：ボランティア清掃 → 充実感、やりがい

- ・自分事化
- ・地域の当り前をクリティカルに捉えさせる
- ・こうなればいいなあという理想で終わらせない



【成果】

- ・コミュニケーション力は向上・改善
- ・自分からあいさつする
- ・スタッフなどとの出会い 真剣に取り組んでいるーあこがれ → ロールモデル

【意見交流】

①10個のテーマに設営について

- ・10個のテーマは教師側で注目してもらいたいものと考えて提示した。生徒には3つほど選択させた。

②実施しなかった企画書の取り扱い

- ・50周年行事に生かしたい
- ・地域の「ふるさとまつり」の出店にも生かしたい

③企画書作成時へのアドバイスについて

- ・誰が見てもわかるものをつくろう
- ・モデル（様式）があった方がいいだろう

④地域の捉え方

- ・改善・継承・発展は言葉が難しいのでもっと簡単な言葉に
- ・よくなったことも取り上げて、そのための努力に着目させる

⑤川上村と地域をつないだ実践はよかった

企画書の実行ができなかったー授業の計画性が重要

お金の問題があり、子どもだけではできないこともある

全時間数は30時間

⑥ついてこれない生徒への支援について

グループ分けを工夫した（関心が共通している者で集め、対話を通して知識や意欲への好影響）

「わからない」と言える関係づくり

⑦コミュニケーション力だけでなく積極性や行動力も向上した

保護者の協力について 月1回のPTAの話し合い時に依頼した

⑧SDGsとの関連について

テーマを先にもってくると、「テーマのための学習」になりがち。地域の課題から入って探究し、後付けでテーマとの関連に気づかせるという学習でよい

⑨行動化につなげるゲストティーチャーの活用について（新宮先生）

- ・通年で取り組む、GTとの協働体験を計画する、GTとの本音交流に発展できる、GTの営みにふれ、あこがれを喚起する、体験・対話・あこがれ・社会参画

次回は現職教員の単元構想案の相互検討会を行う

谷垣先生・中本先生・近野先生、阿部先生・佐藤先生他

2023年度 第3回森と水の源流館授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

◇開催日時 8月5日(土) 10時~12時

◇方法 ZOOMを用いたオンライン方式

◇参加者

現職教員：中本(田原本小)、新宮(奈良女子高校)、阿部(山形市立千歳小)、谷垣(青翔高校)

橋本(福岡市)、

学生：長嶺、木村、東、芝田、井上(院)

スタッフ：尾上、成瀬、上西、高田

大学：大西、中澤 計17名

◇内容：現職教員の単元構想案の相互検討会

1. 「私たちの暮らしと水」谷垣先生(奈良県立青翔中学校1年総合)

導入：水不足のニュース

昔の人々も水不足で困っていた 高橋佐助さん(御所の人)の事例紹介

展開1：「水の始まりはどんなところだろうか？」津風呂ダム及び源流館の見学

生き物観察 バックテスト、川上宣言

展開2：中流はきれいな水なのだろうか

探求基礎 ならコープ環境測定活動における酸政雨調査

県内のあちらこちら(生徒の居住地)の水の分析

→ 川上村の水より水質が悪いことが判明

→ 青翔宣言の作成

このときに川上村の取り組みを参考にする

川上宣言

川上村の人たちの取組 ゴミ対策、CO2対策

多種多様な生き物の存在による効果 フルボ鉄

【相互検討】

- ・宣言作成だけでなく、行動化も想定する(行政・住民の巻き込み)
- ・川上の水と県内各地(生徒の居住地)の水の飲み比べ ←感性に訴える
- ・水道事業がストップしたら、生活はどのようになるかを想像する 水運びの体験
←感性に訴える：この学習の意義が伝わる
- ・津風呂ダムを見学する必要性が不明なので再検討

2. 「奈良公園 推し活プロジェクト」新宮先生(奈良女子高等学校1年 探求)

目標：奈良公園の生態系保全を大切だと意識できる生徒を育てる

導入：奈良公園のポスターのロゴを考える

「人とシカが共生する奈良公園」という基本コンセプト

展開1：鹿苑のシカの写真 ←共生していると言えるのだろうか

共生の意味を考える

展開2：奈良公園において共生をもたらしてきたものを歴史的に捉える

奈良公園の生態系を支えるシステムにおけるシカの役割

現状の人とシカの共生を受け継いでいくために何をどうすればいいのだろうか？

← 川上村の取り組みを参考に考える

【相互検討】

- ・奈良のシカ愛護会と連携し、シカの現状における課題を生徒に伝えてもらう（専門家との連携）
- ・奈良公園にあるさまざまな問題を見出し、その解決のためにつながったほうがいい企業を考える
- ・他教科とのつながりがあるのは評価できる。
- ・『鹿と日本人』を読んで研究してください。
- ・他者の巻き込み方 女子高生の強みを生かす
CG をもちいたイラスト ダンス 紙芝居 TICKTOCK などの SNS

3. 「野菜の栽培」阿部先生（山形市立千歳小学校4年生 総合）

背景：3年生の時に大豆を育てたがうまくいかなかった。→最後まで育ててみたいという願い。

展開1：地域で栽培されている食べられるものにはどんなものがあるだろうか？

山形県：日本1の芋煮フェスティバルが開催されている。

千歳地域の里芋が使われている。

里芋農家・鈴木さんとの出会い お手伝いさせてもらう

「里芋は連作が難しいので、キュウリやトマトの栽培もしている」

展開2：リベンジ！大豆栽培

自分たちのマメ畑もきれいにしよう。でも、発芽しない。

牛乳パックで発芽させてから移植すればいいことを教わる

展開3：おいしい芋にするために 水の大切さを教わる

馬見ヶ崎川の水質調査・水生生物調査 川に入り 水の美しさを実感する

展開4：全校たてわりウォークラリー「地域めぐり」

馬見ヶ崎川の川岸に放置されているゴミに気づき回収する。

展開5：千歳地域の特色を考える

酒田市立浜中小学校4年生との交流

コミュニティセンターのお祭りに参加する

【相互検討】

- ・前の学年での学習とつながっているのがいい。大豆栽培→里芋栽培の流れがよい。
- ・多様に展開されているが、中心はどこにあるのか？
- ・どのような行動化を想定しているのか？
- ・里芋栽培は連作が難しいため、トマトの栽培に転換しているとおっしゃっているが、里芋は湿った土地を好むのに対して、トマトは乾田が必要。田の作り替えは実は大変なことなので、その苦労は聞いた方がいい。

4. 「外来種は殺すべき？ —生物多様性を考える—」中本先生（田原本小学校4年生 総合）

目的：外来種を単純に排除するのではなく、立ち止まることができる子どもを育てたい

導入：6月1日付 ニュース 特定外来種

アカミミガメ アメリカザリガニなど 飼育はよいが販売や放出は禁止

実際に飼育している児童もいる。 地域を流れる寺川にもいるかもしれないな？

展開1：源流館の古山さんから外来種について学ぶ（専門家との出会い）

寺川にカゴをしかける

展開2：特定外来種は排除するだけでいいのだろうか？

- ・生き物に対する責任感
- ・アメリカザリガニは、1927年にウシガエルのエサとして20匹が持ち込まれたのが最初。それが逃げ出して、全国に広がった。

展開3：人も動物もよりよいくらしができるようにするためにできることを考える

- ・グローバル化の進展によって、さらに多くの外来種がやってくるだろう。

【相互検討】

- ・「生き物六法」で教材研究してください。
- ・当初はよいと思われたものが今は問題になっていることが多い。
- ・特定外来種への対応、「条件付き」に着目して、なぜそうなのかを考え、他の生き物との共生を考える際のルールとする。
- ・個人の主観をまとめ上げるのが難しいだろう。感情に流されることなく、一歩引いて客観的に考えることが大事だが、4年生には難しいだろう。

次回は、8月26日（土）10時～12時ZOOMを用いたオンラインで開催します。

内容は

- ①現職教員及び学生の単元構想案の相互検討会
- ②現職教員のESD学習指導案の検討です。

ZOOMはこちらです。

第4回森と水の源流館授業づくりセミナー

時間: 2023年8月26日 10:00 AM

Zoom ミーティングに参加する

<https://us02web.zoom.us/j/81357860423?pwd=ejJzLy8zWVpNSGkyVkRCK29YQlpQZz09>

ミーティング ID: 813 5786 0423

パスコード: 835899

2023年度 第4回森と水の源流館授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

◇開催日時 8月26日(土) 10時～12時45分

◇方法 ZOOMを用いたオンライン方式

◇参加者

現職教員：中本(田原本小)、新宮(奈良女子高校)、阿部(山形市立千歳小)、近野(天童市立寺津小)
橋本(福岡市)、中谷(和歌山大学附属小)、加藤(川上村役場)

学生：田畑、木村、芝田

スタッフ：尾上、成瀬、上西

大学：大西、中澤 計15名

◇内容：現職教員の学習指導案の相互検討会

1. 「海の豊かさを守ろう」近野先生(天童市立寺津小学校4年生 総合的な学習)

地域の特徴：最上川水域にあり(須川、寺津沼)、農業が盛んな地域

児童の実態：表現力を高めることで、自尊感情を育てたい

授業実践の背景：社会科での「水はどこから」の学習 川ゴミに気づく

ネイチャーセンターとの連携で湧き水の学習、水田の役割(緑のダム)を学ぶ

→ 水田に関わるテーマを設定し総合的に学ぶ機会としたい

海洋政策研究所との連携で海ゴミに関わる学習や、それを防ぐ取り組みがあることを知る

→ 自分たちも海洋に関わる学習をやってみたい → 学習テーマの設定へ

・自分の生活とつなげて問題を考えることができる子どもを育てたい

自己のライフスタイルを見直す機会に、企業の取組にも関心が向くように

体験的な学習活動：寺津沼の掃除をしてみよう

鶴岡市役所(海ゴミ対策をされている)への協力依頼

→ 鶴岡市の学校(下流の小学校)を紹介していただく

児童主体の学習に：外部とのコミュニケーションの窓口として実行委員会を設置する(4名/8名)

【相互検討】

①導入が丁寧で、子どもたちの思いを受け止めた授業実践になっている

子どもの反応を想定して、子どもが楽しめそうな取組を計画している

外部機関との連携でコミュニケーション力も育つ

②海を意識化するために

実践の途中で海を意識化させる手立てがある

夏休みに海に行った感想の交流 社会科での水の実践

海が近い学校(鶴岡市の学校)との交流

③地域の外部機関との連携のきっかけ

フットワークを軽くする

早く子どもの反応を想定し、計画修正しながら外部機関と連絡を取り合いながら子どもの反応と外部機関に協力してもらえそうなことを合わせていく。

2. 「すばらしき奈良公園を発信しよう」新宮先生(奈良女子高等学校：探究)

川上村で実践されている吉野川の保全活動から学ぶ

川上村のポスター

川上村では河川敷や山林周辺において以下のことをしないでください！

①火気の使用、②ゴミの放置、③水をよごす行為

『川上宣言』を掲げ、「水源地の村づくり」に取り組んできた川上村では、2009年から「川上村環境基本条例」を制定し、すべての人に自然環境保全の意識と配慮ある行動を求めています。

◎市民参加の重要性を源流館から学ぶ（行政の取り組みだけでは改善できない）

→ 奈良公園のシカに関わる問題を取り上げ、自分たちにできることを考えていく。

【相互検討】

①発信対象に関して

奈良市民はシカとのつきあいかたはよくわかっている。問題行動をするのは外から来た人

川上村においてもバーベキューなどで河川敷をよごしたり、ゴミを放置したりするのは外から来た人

→ 発信は観光客に対してするべきだろう

②発信方法に関して

観光客に対する発信 企業と連携し、チラシを広告に入れてもらう

宿泊ホテルに置かせてもらう

海外の人が使うアプリで発信する

シカ募金-販売機に掲示する

女子高生が得意なイラストを使用する

3. 「千歳地域の特色は何かを考えよう」阿部先生（山形市立千歳小学校4年生総合的な学習）

3年生時の栽培活動の失敗から 枝豆栽培のリベンジ → 豆豆リベンジャーズ

リベンジャーズの活動の一環で農家の方に指導していただく その方は実は里芋農家

日本一の芋煮会で食べられているのが千歳地域の里芋であることを教わる

千歳地域の特色ある農産物が里芋であることを知る

→ 地域のために自分たちの里芋を育てて、コミュニティセンターのお祭りで、地域の人たちに
おいしい芋煮を食べてもらおう

千歳地域の里芋がおいしい理由 水質がいいのではないか

→ 山形県環境科学研究センターの濱田さんに馬見ヶ崎川について教わる

山形市農政課に協力依頼し、千歳地域の土壌について情報提供を受ける

地域めぐりウォークラリーの実施し、川ゴミがあることに気づく

→ 美しい山形クリーンアップキャンペーンに参加する

最上川下流域にある酒田市立浜中小学校との交流（10月22日の山形SDGs活動発表会で発表）

【相互検討】

①交流について

芋煮に海の幸を入れるということにして、海との連携を計画してもおもしろいのではないか

②発信について

発信にはメディアとつながって広く発信することと、身近なところで詳しく発信することがある。

大事なのは子どもの変容であり、地域社会の変容であるから、発信方法や場所などを考慮する。

4. 「プロジェクトQ シンギョロック誕生ストーリー」橋本先生（福岡市立小学校5年生総合）

ギョロックの価値

- ・給食でブリの切り身が提供できるようになったが、廃棄する部分が多く出ている
→ 未利用部位を使用したい
- ・給食でのブリ提供に関わる人々にGTを依頼し、出会いの場をもつ
漁師、加工業者（アキラトータルプランニングの博水さん）、流通（運搬業者）
- ・水産物提供に関わる苦勞を知る
- ・福岡県の漁業の課題を知る
→ ギョロックを食べることがそれらの人々を応援することになることに気づかせる
→ 9月末にはギョロックを給食で提供する

【相互検討】

- ①座学から入るのではなく、まず「ギョロックを食べる」ことを学習のスタートにすることで、子どもたちの学習意欲の向上につながるのではないか。
- ②未利用部位やフードロスに対する漁師さんの思いを聞き取ることが子どもの意識を変える
- ③ギョロックへのわくわく感を高めるために、校内放送や掲示板を活用する
- ④今回の学習を契機に①自分のフードロスを記録したり、他教科とのつながりを考える

5. 「幸せな社会を目指し、知恵と力を合わせる」中谷先生（和歌山大学附属小学校3年生社会科）

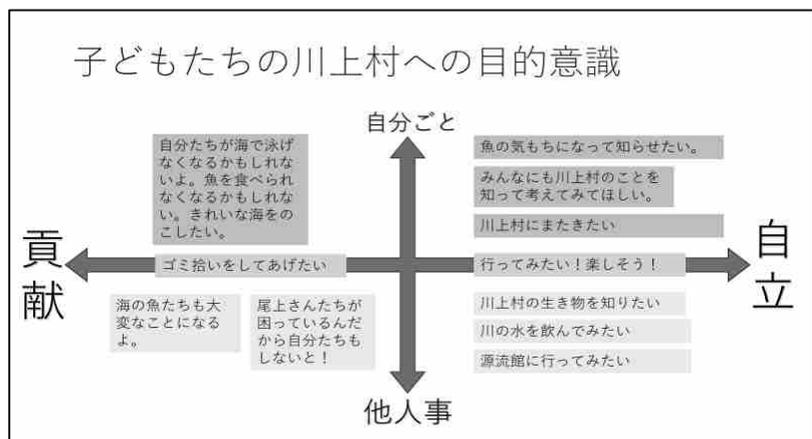
中谷先生の社会科学習の基本コンセプト

まちや仕事を
調べる

まちや人を
好きになる

幸せな社会を
目指し、知恵と
力を合わせる

3年生の社会科と総合で 知る・好き・協力



まちのために頑張っている人、仕事を頑張っている人との出会いから、課題に対する自分事化を促し、さらに現地で学ぶことで、行動化を促す。

第5回森と水の源流館授業づくりセミナー 実践報告会

日時 : 2024年2月3日(土) 10時~12時

場所 : 森と水の源流館

参加者: 対面18名、オンライン参加14名 計32名

大学より: 中澤静男、大西浩明、杉山拓次



1. 挨拶: 尾上忠夫氏(事務局長)

今年度「ふるさとづくり大賞」(総務省)の団体賞を受賞

ESDを軸とした流域交流、調査研究活動が評価された

「ESD動画100選」(環境省)に選定される → 動画視聴

2. 実践報告

○谷垣徹先生(奈良県立青翔中学校・高等学校) 「私たちの暮らしと水」(中学校1年)

校外学習を中心としたカリキュラムデザイン ← SSHのためESDのための時数がとれない

水不足のニュース 「大和豊年米食わず」

吉野川分水実現に向けた人々の営み

校外学習(森と水の源流館)

「探究基礎」の授業において、環境測定活動(ならコープ)に参加

科学的データから自分たちの生活を見つめ、行動を考える(青翔型ESD)

→ 中流に暮らす私たちにできること 「青翔宣言」



実践後に・・・

・学年一斉読書活動「森を愛さぬ日本人」

・技術家庭科「木づかい運動」

・秋の校外学習 大阪自然史博物館 「日本の林業には明日はないが、明後日はある」

「川上宣言」にある川上村の人たちの思いをもっと多くの人に伝えたい

派手なことではできないが、自分にできることをやっていく!

「水が当たり前だと思わなくなった」「家庭で自然についての話がなくなった」

中下流の人たちの流す水への意識の差 → 周りの人を巻き込んで一緒に行動できるようにしたい

○中谷栄作先生(和歌山大学教育学部附属小学校) 「きれいってなんだろう」(小学校3年)

学校のいいところは「きれいなところ!」 → 違和感

「ピッピカピン大作戦」

学校をきれいに まちをきれいに

世界をきれいに 心をきれいに

生活の中に少しずつ水との出会いを近づける

つり ビーチでゴミ拾い

マイクロプラスチックを見つける



町中、川沿いでのごみ拾い

→ 上流の方から流れてきているのでは？

川上村はきれい！ 途中で汚れてしまっている！ 森・川・海はつながっている！

9月、川上村へ行こう（学校行事の関係でまだ行けない） 「3B宣言」の作成

ごみ拾いを広げる → 「自然をきれいにする心を3Bから広げます」

11月になってようやく川上村へ行く

「ありがとうや大好きが源流の森にとどくように」

心の距離を近づけることができた（水のこと、森のこと、ごみのことが身近になっている）

感情を伴って自分ごとにするのができた（大好きになる経験を学びとつなげる）

○原 孝博先生（奈良学園中学校・高等学校） 「奈良学園中学校・高等学校環境活動の取組」



敷地の半分が里山

ゲンジボタル、サギソウなど貴重な動植物も見られる

SSH 環境教育を全校生徒に実施する

中1 ゲンジボタルが住みよい環境にするために
再生可能エネルギーに関する学び

中2 ホタルの環境の変化

高校 環境科学実習

棚田で米を栽培しながら生き物の観察・調査

「森里海の連環」研修

ブナとヒト（白神山地） コウノトリとの共生（豊岡） サンゴとの共生（八重山諸島）

コロナ禍での制限により、川上村研修がスタート

「水源地の森と吉野林業」「未来の風景づくり」「源流学の森づくり」「歴史の証人」 など
本物に触れたこと、専門家の話を聞いたことで生徒の感覚が変わったのではないか。

「吉野川紀の川源流学」研修を構想中

森川里海について、それぞれ学べると考えている

森・・・水源地を守る取組

川・・・川上村にダムがある理由

里・・・大和平野改良区

海・・・製塩

○藪内智史先生・新宮済先生（奈良女子高等学校） 高校1年「奈良公園を中心とした探究の実践」

勉強への苦手意識

→ 学ぶ楽しさを見つける、自分の関心事を見つける
奈良公園をテーマに、学習したことを観光客に発信する
（動画作成、デジタル紙芝居など）

東大寺大仏のヒミツ？（SDGsと関連があるらしい）

奈良公園の人と自然との共生とは？

奈良は地震がきても大丈夫なの？

地域の防災のためにできることは？（3学期に実践中）



教科横断で探究を進める（歴史総合、生物基礎。英語コミュニケーションなどに関連させる）

奈良ではシカは神の使いとして大切にされてきた 天然記念物になる（歴史総合）

外国人観光客に説明（英語コミュニケーション）

生態系とは？ シカと関わっている生物は？（科学と人間生活・生物基礎）

「人とシカの共生する奈良公園はどうやって市民に守られてきたのか？」

フィールドワーク前日に発信（森と水の源流館、奈良鹿の愛護会）、評価

フィールドワーク 鹿苑への訪問、発信

動画作成 「Nature 甲子園」へ応募

LINE スタンプの開発、ショート動画作成など、得意なことを生かしてアウトプットできるように

自己肯定感が高まり、自分の役割に気づき前向きに学習に取り組む生徒が増えてきた

興味関心を深掘りし、探求し続けられる生徒に 2年生の取組につなげられたら

3. 栗山村長より



先生方がそれぞれの校種の中で、ESD を十分実践されていることが分かり、頼もしく思った。

川上村の様々な取り組みが、流域だけでなく様々な地域において学ぶ題材として使われていることで、私たちにもさらなる責任があると感じている。

今後も、さらにすぐれた教育実践が次々と生まれてくることを期待している。そこに川上村が登場することがあれば、なおうれしいことである。

2023年度 ESD ティーチャープログラム 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

担当：ESD・SDGs センター研究員 杉山拓次

春日山原始林や奈良公園の自然環境を ESD に活かすための場として様々なテーマでフィールドワークを実施する。また、五感を使うなど、自然と交感することで、持続可能な社会に必要な不可欠な自然環境保全の重要性の気づきを促す機会とする。

対象：本学学生、大学院、教職大学院生、

近畿 ESD コンソーシアムの教員等 ESD ティーチャープログラム参加者

定員：各回 20 名程度

【実施内容】※日程は全て予定

■第 1 回 春日山原始林の自然と課題（春日山遊歩道北部～若草山）

2023 年 5 月 27 日（土）10:00～15:00

春日大社から春日山遊歩道～若草山までを歩き、特徴的な自然環境と課題について学び・体験します。

■第 2 回 雨の日の森を歩く（春日山遊歩道北部）

2023 年 6 月 24 日（土）9:00～12:00

普段は訪れることのない雨の森の様子を体感し、森と水の関係について考えます。

■第 3 回 春日山の石仏（滝坂の道・地獄谷）

2023 年 7 月 15 日（土）10:00～15:00

春日山原始林の特徴とも言える文化的背景である石仏群を巡り、自然と人の関わりについて学びます。

■第 4 回 春日山原始林の夕暮れ～夜（春日山遊歩道南部）

2023 年 8 月 12 日（土）18:00～20:30

電灯のない月明かりだけの森の中で過ごし、夜の森の気配を感じます。

■第 5 回 奈良公園の夕暮れ～夜（東大寺二月堂周辺散策）

2023 年 8 月 20 日（日）17:30～20:00 ※中止

東大寺周辺を夕暮れ時に散策し、夜の奈良公園を体感します。

■第 6 回 奈良公園の自然（奈良公園・飛火野周辺）

2023 年 9 月 9 日（土）9:00～13:00

奈良公園の景観的な特徴を学ぶとともに、自然を活かしたアクティビティを体験します。

■第 7 回 朝の春日山原始林（春日山遊歩道北部）

2023 年 10 月 7 日（土）6:30～11:00

早朝の春日山遊歩道を歩き、朝の森の空気を体感します。

■第 8 回 高円山の自然（高円山）

2023 年 10 月 21 日（土）9:00～14:00

春日山の南側に位置する高円山を歩き、春日山との違いを体験するとともに森の利用について考えます。

■第 9 回 春日山遊歩道 1 周ウォーク（春日山遊歩道南部～北部）

2023 年 11 月 3 日（金・祝）9:00～16:00

春日山遊歩道を 1 周し、異なる植生や人との関わりなどについてじっくりと歩き体感します。

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第1回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年5月27日（土）10:00～15:00

参加者：8名（学生：6名 教職員：杉山、中澤）

■実施場所：春日山原始林・若草山

■第1回 春日山原始林の自然と課題（春日山遊歩道北部～若草山）

2023年5月27日（土）10:00～15:00

概要：春日大社から春日山遊歩道～若草山までを歩き、特徴的な自然環境と課題について学び・体験する。

10:00 春日大社国宝殿前集合

10:30 春日大社見学

11:00 春日山遊歩道（北部）

12:00 五感の体操

13:00 葉っぱジャンケン

13:30 昼食

14:00 オノマトペゲーム

14:20 若草山山頂

15:10 解散

■概要報告

春日山原始林北部遊歩道を歩き若草山を下るフィールドワーク。参加者は全て1回生で、奈良県外出身者であった。春日大社へ行ったことがないという学生もいたので、春日大社を簡単に説明し、参拝してから春日山遊歩道へ向かった。この日はよく晴れて気温が上がる様子だったが、森の中へ移動すると、涼しい風が吹く。春日山原始林の成り立ちやこれまでどのように守られてきたのかを解説しつつ、折に触れて、葉や木に触れる体験を促した。また、解説の中で出てきた「植生の遷移」や「ギャップ」などの用語について、高校時代に学習したことが、どのようなことを指していたのかを実際に目にする事で再確認されたようだ。

原始林内の下層に植物がほとんどないこと、奈良県によって設置された保護柵内では、下層植生などの回復が顕著に見られることなどを確認し、シカによる採食圧が高い状況についても確認した。

コース後半からは、感性の体操や葉っぱ図鑑、オノマトペゲームなど五感を使って体験するアクティビティを挟みながら、春日山原始林の自然環境の特徴や現在の課題について話をしながら歩いた。

若草山頂からは、奈良を一望し、奈良公園の自然が貴重な景観を産んでいることを意識させるとともに、ナンキンハゼの課題について確認した。

最後に中澤先生より春日山原始林の自然が1000年に渡り維持されてきたのは、人々の関わりがあった

からという話があった。勅命で神山化した春日山だが、トップダウンではなく、その勅命を守ってきた市井の人々の関わりが、現在の春日山原始林につながっている。これからの春日山原始林も同様に関わり続けることが必要である。今後もフィールドワークを通じて春日山原始林や自然環境と人の関わりについての視点を提供していきたい。

■写真



春日大社の説明



感性の体操



オノマトペゲーム



オオセンチコガネ



山頂集合写真



二号目から奈良公園の森つながりを意識する



生長中のナンキンハゼ



若草山と春日山

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第2回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年6月24日（土）9:00～12:00

参加者：8名（学生：7名 教職員：杉山、加藤）

■実施場所：春日山原始林

■第2回 雨の日の森を歩く（春日山遊歩道北部）

2023年6月24日（土）9:00～12:00

概要：普段は訪れることのない雨の森の様子を体感し、森と水の関係について考えます。

9:00 春日大社国宝殿前集合

9:10 挨拶・フィールドワークスタート

9:20 春日大社 龍王社にて春日山原始林の解説

9:30 水谷神社・イブキ・水谷川等の解説

10:00 春日山遊歩道（北部）フジ・天然記念物石碑・洞の仏頭石・クモタケ・ナギ等解説

11:00 五感の体操・森で寝転ぶ

11:30 折り返し

12:10 遊歩道入口にて解散

■概要報告

第2回目となる春日山原始林フィールドワークのテーマは「雨の森」。残念ながら当日は雨ではなく、曇り空。それでも前日まで雨模様が続いていたため、梅雨時期の森を体感することができた。今回もほとんどが県外出身の1回生。コースが短いこともあり、通常の解説ポイント以外のその日見ることのできる動植物を中心に調べていった。第1回のコースをより短い距離で歩くが、1ヶ月の違いで見ることのできる動植物が変化している。

森と水の関係については、春日大社の龍王社や水谷神社の解説版を活用し、春日山原始林が水源の森であることを解説した。一方で、原始林内では6月初旬の豪雨の影響で崩落箇所などが見られたため、本来の水源地としての機能が衰えていることも確認できた。

動植物等については、毎年6月～7月に発生する「クモタケ」というキノコや、青く巨大な「シーボルトミズ」など、なかなか見ることのない生き物を観察することができた。

キビタキやオオルリなどの囀りがよく聞こえていたので、五感を使った体験においてもゆっくりと自然に身を委ねるような形で体験を促し、10分程度であるが森で寝転ぶ体験も行った。

初めて参加した学生にとっては、自然への関心が高まるような感想等が得られた。

今後も春日山のフィールドを頭と体で体感する機会としたい。

■写真



春日大社の説明



水谷神社を解説



モミとナギの手触りを比較する



ムラサキシキブの解説



手前の土嚢は、6月豪雨の際に崩落



春日山が岩盤で構成され土壌が少ないのを確認



五感の体操（みみをすます）



森で寝転ぶ

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第3回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年7月15日（土）9:30～16:00

参加者：4名（学生：2名 外部：2名 教職員：杉山、中澤）

■実施場所：春日山原始林

■第3回 春日山の石仏（滝坂の道・地獄谷）

2023年7月15日（土）9:30～15:30

概要：春日山原始林の特徴とも言える文化的背景である石仏群を巡り、自然と人の関わりについて学びます。

9:30 飛鳥中学校校門前集合

9:50 挨拶・フィールドワークスタート

10:10 白乳神社横の仏像見学

10:30 滝坂の道・入口（妙見宮道標付近）にて感性の体操

10:50 滝坂の道散策・寝仏、夕日観音、三体地藏、滝坂地藏、朝日観音 見学

12:30 首切り地藏到着・昼食

13:00 地獄谷へ移動

13:30 地獄谷石窟仏見学

13:50 春日山石窟仏見学

14:50 新池上手の阿弥陀磨崖仏見学

15:00 首切り地藏休憩所から滝坂の道を下山

15:30 飛鳥中学校前にて解散

■概要報告

第3回目となる春日山原始林フィールドワークのテーマは「石仏」。春日山原始林の南端を走る旧柳生街道（滝坂の道）には、奈良時代より僧侶の行場として活用されており、いくつかの石仏が残されている。今回のフィールドワークでは、石仏を中心にフィールドワークを実施。時代背景などを想像しながら散策した。

学生の参加者は、4回生と1回生の2名。また、報告者が所属する「春日山原始林を未来へつなぐ会」のメンバー2名が参加した。

集合場所の飛鳥中学校から滝坂の道への途中、春日大社境内地にある「白乳神社」の傍に、首の折れた仏像があり、これを見学した。よくよく見ると背中部分に袈裟も彫られていた。

そこから、滝坂の道入口付近の妙見宮参道の広場で、恒例の五感の体操を実施。苔の気持ち良い場所のため、寝転んで地面も感じる体験を行った。

滝坂の道については、過去と現在によるシカの影響や、現在の植生保護柵などを確認するとともに、ムクロジや倒木の様子など自然の様子についても観察等を行った。また、滝坂の道沿いの「寝仏」「夕日観音」「滝坂三体地蔵」「滝坂地蔵」「朝日観音」など歩道から確認できる石仏について見学し、場所によっては、双眼鏡なども用いて観察を行った。

昼食を首切り地蔵休憩所ですとった後、この日のメインである地獄谷石窟仏へと向かった。春日山原始林から林野庁の管轄となる地獄谷国有林に入る。人工林の森だが、土砂が削られ、シカの樹皮剥ぎによる枯死木なども見られた。

高円山ドライブウェイを横切り、地獄谷石窟仏へ。奈良時代の作とも言われるこの石仏は、それまでのものとは異なり、細い線で繊細な仏像が印象的であった。参加学生も非常に関心を持って観察していた。なお、住所地が記載されている林野庁の看板は「奈良市高畑大字地獄」となっている。

その後は、高円山ドライブウェイから春日山石窟仏へと登り、見学。地獄谷石窟仏とは時代が異なるが、こちらにも規模の大きな洞窟に多くの石仏が彫られており、参加学生は熱心に見学をしていた。

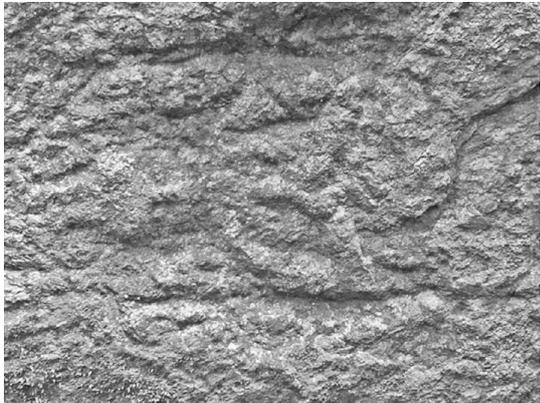
また、石窟仏への途中、奈良公園や春日山の天然記念物境界とともに「大乘院殿御領山」と掘られた石柱も確認し、かつて周辺に興福寺の支配が及んでいたことも確認した。

春日山石窟仏から、滝坂の道を少し下り、途中道を外れたところにある「新池上手の阿弥陀磨崖仏」を最後に見学。目線より下に掘られた石仏は、どこか愛嬌のある顔立ちなのが印象的であった。

再び首切り地蔵に戻ってから、滝坂の道を下山し、飛鳥中学校で解散。

この日の気温は 30℃を超える状況であったが、滝坂の道は川沿いの木陰のため終始涼しい風が吹いていた。1日でかなり多くの石仏を見て回ることができ、満足度の高いフィールドワークとなった。

■写真

	
<p>森で寝転がる</p>	<p>寝仏</p>
	

滝坂地蔵



朝日観音



ニホンヒキガエル



奈良の地獄



地獄谷石窟仏を見学



地獄谷石窟仏・左右の壁にも線刻されている



地獄谷付近では変形菌（粘菌）も観察できた

春日山石窟仏の西側の如来像

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第4回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年8月12日（土）18:00～21:00

参加者：6名（学生：5名 外部：1名 教職員：杉山、中澤）

■実施場所：春日山原始林

■第4回 春日山原始林の夕暮れ～夜（春日山遊歩道南部）

2023年8月12日（土）18:00～21:00

概要：電灯のない月明かりだけの森の中で過ごし、夜の森の気配を感じます。

18:00 春日山遊歩道南入口集合

18:15 挨拶・フィールドワークスタート

19:00 妙見宮にて軽食。ムササビに関する説明

19:30 寝転びポイントまで移動

19:50 寝転びポイントで、地面に寝転ぶ。

20:30 ライトを照らしながら下山。

21:00 遊歩道南入口到着、解散

■概要報告

第4回目となるフィールドワークは、夜の森。夕方の少し涼しくなってきた時間に遊歩道の入り口に集合。森へ入ると涼しい空気が流れているのを感じることができた。

夕暮れの時間、歩道は暗いが、見上げると木々の高いところに夕焼けがあたり赤く染まっているのが見える。木々が光を遮っていることによって森の空気が涼しいことを実感しながら歩く。時折、足を止めて、春日山原始林の大きな木々についての解説を行った。

次第に薄暗くなっていく森を歩きながら妙見宮まで。軽食をとりながら暗くなっていくのを待った。春日山の夜の生き物の代表であるムササビについて、人との関わりなどを解説していると、ムササビの鳴き声が聞こえてくる。観察できないかとしばらく待ってみるが、なかなか近くに訪れてくれる気配はなく、森の中で寝転ぶポイントまで下山することとした。

暗い森を歩き、夜の森の空気を感じる。ポイントまで到着すると、それぞれシートを敷いて、道の真ん中で寝転んでもらう。ポイントは木々の間が空いているギャップのため、そこから星が見えている。しばらくすると、ムササビの鳴き声が何度か聞こえてくるものの、近くまで寄ってくることはなかった。寝転んで空を見上げていると、台風も近づいていたこともあり、風がごうごうと音を立てて吹いたり、森は決して静かではなく葉の揺れる音、動物や虫の鳴き声や気配を感じることができた。

30分程度時間を過ごしたのち、遊歩道入り口まで下山。途中、「ホーホー」というフクロウの鳴き声があったのち、ギャー！と叫ぶような声が聞こえた。また、ライトの明かりに目がひかり、ムササビも確認することができた。昼の様子とは大きく異なる森の様子を感じる機会となった。

■写真



夕日を背にフィールドワークスタート



遊歩道は日が差さず暗い



夕焼けの陽があたる林冠部



空はまだ明るい森は真っ暗



妙見宮



森で寝転ぶ



ギャップから見える星空



ムササビに遭遇できた。

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第6回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年9月9日（土）9:00～13:00

参加者：5名（学生：1名 外部：1名（子ども2名） 教職員：杉山、阪本）

■実施場所：奈良公園 春日大社境内飛火野

■第6回 奈良公園の自然

2023年9月9日（土）9:00～12:40

概要：奈良公園の景観的な特徴を学ぶとともに、自然を活かしたアクティビティを体験します。

9:00 飛火野バス停前集合

9:10 挨拶・フィールドワークスタート、フィールドビンゴの配布 ループを使って観察の練習

9:15 御蓋山・春日山を遥拝 飛火野を移動

9:40 鹿苑見学

10:20 春日大社参道からささやきの小径へ

10:50 ささやきの小径でコケ等の観察

11:20 飛火野裏にて、観察、葉っぱジャンケン、

12:00 昼食時間

12:20 お気に入りの場所を見つけて過ごす

12:40 飛火野到着、フィールドビンゴの確認・振り返り

■概要報告

奈良公園、春日大社境内地である飛火野周辺を散策して、奈良公園の特徴的な自然景観について気づいたり、自然の中での遊びを体験するプログラムとした。今回は、現役の教員参加者が、お子さんを連れてきてくれたので、実際にフィールドビンゴの項目を念頭にいれつつ、フィールドワークを実施した。冒頭は、ループを使って、周辺の木に生えているものなどを観察した。

飛火野は、御蓋山・春日山の遥拝場所があるため、そこまで移動して風景を眺めた。飛火野の隣接地にある、サカキの献木エリアの柵の中と外の違いを確認し、なぜ風景が違うのか？などを投げかけ、シカの影響によるところが多いことを確認した。

その後、鹿苑までの間で、葉っぱや木の実などを観察したり、匂いをかぐなどをした。鹿苑では、どのようなシカが収容されているのか、といった点について整理した上で、施設見学を行い、どんぐりの給餌も行った。

鹿苑から春日大社参道に戻り、二の鳥居前で右へ曲がりささやきの小径（下の禰宜の高畑近く）でコケ等の観察。飛火野裏スペースに移動、葉っぱジャンケンの材料集めを行う。葉っぱの特徴でジャンケンを行うアクティビティ、五感を開くアクティビティなどを行った。葉っぱジャンケンは子どもが

気に入って、2回戦を実施した。

次に、周辺で自分自身の気に入った場所を見つけて一人で過ごすという時間を持った。自然の中で一人で過ごすことで、「人間が自然の一部である」ことを意識する時間とした。

ゆっくり時間を過ごして、再び飛火野に戻り終了。ふりかえりで、ビンゴカードの中央に書かれていた「今「日見つけた宝物」を共有すると、ゆったり時間を過ごした際に体験したこと、場所などが「宝物」だったと回答があった。

■写真



ループを使って観察の練習



飛火野から若草山・御蓋山・春日山を眺める



飛火野のサカキの献木の柵の内外の違いを見学



鹿苑のシカの見学



ささやきの小径でコケや小さな自然の観察



飛火野でお気に入りの場所で時間を過ごす

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第7回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年10月7日（土）6:30～11:40

参加者：5名（学生：2名 教職員：杉山、中澤、中城）

■実施場所：春日山原始林

■第7回 朝の春日山原始林

概要：早朝の春日山遊歩道をゆっくり歩き、途中、寝転んだりしながら、朝の森の空気を体感します。自然の中で過ごすことの心地よさを通じて、人間が自然の一部であるという感覚を実感します。

6:30 春日大社本殿カフェ前集合

6:40 挨拶・フィールドワークスタート

7:00 春日山遊歩道 ナギ・月日磐・ムラサキシキブ等について

7:50 耳を澄ます体験

8:00 森で朝食、寝転ぶ

8:40 ゆっくり遊歩道を歩く（ムササビの食痕、コジイの実、ケヤキの実等）

11:00 若草山山頂到着（三角点確認）若草山から下山

11:40 若草山下山（北口）・解散

■概要報告

早朝の春日山原始林を体感することを主目的に企画を行った。この日は曇り空であったが、清々しい時間を過ごすことができた。普段よりもゆったりとしたペースで森を歩き、史跡や自然についてもじっくり体感をしてもらう様に心がけた。早朝で野鳥の声もよく聞こえるため、耳を澄ます体験を好きな場所でじっくり聞いてもらう形とした。水の流れる音がよく聞こえる場所で通常のプログラムでは水の音を印象に残る音として発言する方が多いところ、リラックスしている状況からか、それ以外の音（鳥の声、風の音、足音など）が印象に残ったという発言が印象的であった。

朝の森で座って時間を過ごすことは、あまり経験がないことであると考え、道端にシートを広げて朝食を取る時間を設けた。ゆっくり朝食と温かいお茶を飲んだのち、地面に寝転んでしばらく過ごした。時折通りすぎる人もいたが、ゆったりと森に寝転んで雲の流れを見たり、森の空気をたっぷり吸い込んでもらい、自然の一部である感覚を少し体感してもらうことができた。

それ以降は、疲れのないペースでゆったりと歩きながら落ちている木の実（コジイ、ケヤキの実、シデ類の実）を観察するものの、ただただ自然の中を歩いて気持ちよさを感じる体験とした。

山頂付近では、昨年度実施の際にも遭遇したマムシに同じ様な場所で遭遇するなど、生き物との出会いも体験することができた。

若草山山頂からの風景、鶯塚古墳の三角点からの風景をゆったりと楽しんだのち、若草山を下山。ナ

ンキンハゼの繁茂の状況を確認しながら、春日山～御蓋山～奈良公園と続く風景を眺めた。下山はこれまで南ルートを取っていたが、今回は北ルートを取り下山した。

参加した学生は、森の中でリラックスして過ごすことができたことを印象深く語っていた。また、普段見過ごしている自然の不思議にも気づき原始林や自然の不思議さを楽しんだ様であった。

■写真



野鳥の巣が地面に落ちていた



月日磐



月日磐の解説中



森林ギャップと春日山の現状についての解説



好きな音を探して歩く



今年もマムシに出会えた。

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第8回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年10月21日（土）9:00～14:30

参加者：7名（学生：5名 教職員：杉山、中澤）

■実施場所：高円山

■第8回 高円山の自然

概要：早春日山の南側に位置する高円山を歩き、春日山との違いを体験するとともに森の利用について考えます。

9:00 大学正門前集合

9:10 挨拶・フィールドワークスタート

9:30 高畑町 東山緑地・高畑自然教室フィールド（マテバシイ・アベマキの観察）

10:20 高円山登山口

11:30 火床到着

12:20 山頂到着・昼食

13:00 下山開始

14:30 若草山下山（北口）・解散

■概要報告

春日山の南に位置する高円山のフィールドワーク。高円山は春日山と大きく異なり、薪炭林としての活用の形跡が見える。木の実が多く観察できる季節であったため、高円山までの道中でも、マテバシイや、アベマキなどのどんぐりの観察を行った。

高円山に入ると、倒木が非常に目立った。ナラ枯れ被害で枯れていた木や、シカの剥皮の被害にあった木などが見受けられ、土壌が流れている箇所も多くあった。また、クヌギ、コナラ、カシなどが、根本でいくつかの幹に分かれており、薪炭林としての活用がかつてなされてきたことを確認した。

一方で、近年森を放置してきたことによる、ナラ枯れの発生についても確認することができた。

2014～18年頃にかけて、ナラ枯れ被害が拡大した際に対策したビニール被覆の跡が一部エリアで見られたが、剥がれたシートが飛散しており、マイクロプラスチック問題とも繋がる点について考える機会となった。1時間弱で火床に到着すると、若草山とは異なる風景が印象に残っているようであった。その後山頂に至るまでは、人工林やホテルの跡地など人がどのように自然を利用してきたかを様々な面から見る事ができた。帰りは行きと異なるルートで下山し、行きと同様に途中、木の実やきのこなどを観察しながら下山した。高円山には、春日山原始林とは異なり、人が自然を使って暮らしを維持してきた痕跡と、人が自然を活用しなくなった時間の経過を見ることができた。持続可能な社会を実現する上での自然環境をどのように維持していくかを考える良い時間となった。

■写真



火床での集合写真



倒木が非常に目立っていた



ソヨゴなど赤い実が目立った



下山時に見つけたキノコ

令和5年度 春日山原始林・奈良公園フィールドワーク

第9回 概要報告

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究員 杉山 拓次

実施日：2023年11月3日（金）9:00～15:30

参加者：7名（学生：4名 教職員：杉山、中澤、阪本）

■実施場所：春日山原始林

■第9回春日山遊歩道1周ウォーク（春日山遊歩道南部～北部）

春日山遊歩道を1周し、異なる植生や人との関わりなどについてじっくりと歩き体感します。

9:00 春日山遊歩道（南部入口）

9:10 挨拶・フィールドワークスタート

9:30 南部交番所 準備体操

10:30 妙見宮手前 感性の体操

12:00 首切り地藏休憩舎

13:00 大原橋休憩舎・昼食

13:45 鶯の滝

15:00 若草山山頂

15:30 水谷茶屋前・解散

■概要報告

本フィールドワークで今年度最終回となる。今回は、ESDと世界遺産の授業でのフィールドワークとしての位置付けもあり、受講者が参加する形となった。

春日山遊歩道を南から北へ。途中、鶯の滝、若草山山頂を經由して歩く長距離のコースでフィールドワークを実施した。11月に入り、原始林内では、シイ・カシ類のどんぐりが多数落ちていたため、どんぐりの違いなどを観察しながら歩く。林内の気温上昇に合わせて靄が立ち込め、太陽の光線がくっきりと見える様子に参加学生は感嘆の声をあげていた。

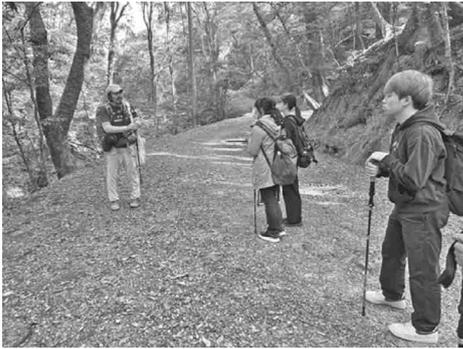
この日の天気は清々しく、今年度のフィールドワークの中で最も快適であった。紅葉にはまだ少し早いものの、色づき始めた木々や、どんぐり以外にも落ちている木々の種子を観察したり、ムクロジの果肉が泡立つことを確認したり、ゆったりと歩きながら、周辺の自然を楽しんだ。

妙見宮の手前では、耳に手をかざすと谷方向の川のせせらぎの音が聞こえたり、イカルの声や樹上でなく虫の声などにも気がつくことができた。また、所々に設置された植生保護柵（防鹿柵）についても場所ごとに設置時期や環境が異なっているため、効果の違いについても確認することができた。

春日杉が多いエリアでは、その大きさに驚き、春日山がさまざまな形で利用され守られてきたことについてもじっくり時間をかけて歩くことで感じてもらえたのではないかと感じた。

若草山山頂からの下山時には、みな疲れて言葉数も少なくなっていたが、天候にも恵まれ気持ちの良いフィールドワークになった。

■写真



どんぐり（カシ）についての解説



木漏れ日の光線がはっきりと見えた



時折立ち止まり風景を楽しむ



妙見宮



通称：Kの木



春日杉の大きさを感ずる



首切り地蔵



世界遺産の碑



滝坂の道で集合写真



若草山山頂からの風景を楽しむ

2023年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

1. 目的

学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の幼稚園、小中学校、高等学校で ESD の理念に基づく教育活動が展開されつつある。また、持続可能な開発目標 (SDGs) への関心が企業や NPO などの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、また ESD の普及を目的に開催する。

2. 主催 近畿 ESD コンソーシアム、奈良教育大学 ESD・SDGs センター

3. 後援 ESD 活動支援センター、近畿地方 ESD 活動支援センター、ASPUniv.Net

4. 開催日時 2024年1月6日(土) 9時50分～17時10分
1月7日(日) 9時30分～12時

5. 会場 奈良教育大学本部大会議室、ESD・SDGs センター多目的ホール、講義棟

6. 日程

【1月6日(土)】

9:30-9:50 受付(奈良教育大学本部)

9:50-10:00 開会行事:大会議室

司会:阪本さゆり氏(ESD・SDGs センター研究部員)

挨拶:宮下俊也(近畿 ESD コンソーシアム会長・奈良教育大学学長)

10:00-12:20 ESD 子どもフォーラム(発表20分+講評・移動10分)

進行:奈良教育大学ユネスコクラブ 吉岡優来、富永望天、田中天央衣

① 大津市立仰木の里小学校

② 福岡市立玄界小学校

③ 橋本市立城山小学校

④ 奈良女子高等学校

講評:宮下俊也(近畿 ESD コンソーシアム会長)

柴尾智子氏(近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員)

12:20-13:30 昼食休憩

13:30-15:30 ESD 実践交流会 I (発表20分+質疑10分)

第1分科会:大会議室

司会:橋本市教育委員会主幹・主任指導主事 木下豪人氏

① 和歌山:白浜町立白浜中学校 西田拓大氏

② 鹿児島:屋久島町立神山小学校 濱崎昇平氏

③ 熊本:菊池市立菊之池小学校 一安尊正氏

④ 奈良:奈良市立伏見小学校 川邊甲余子氏

第2分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会：前大牟田市教育長 安田昌則氏（ESD・SDGs センター研究部員）

- ① 沖縄：那覇市立松島中学校 高良直人氏
- ② NPO：NPO 法人わかやま環境ネットワーク 白井達也氏
- ③ 熊本：熊本市立天明中学校 堀尾綾子氏
- ④ 奈良：奈良市立東登美ヶ丘小学校 紺谷隆氏

第3分科会：101教室

司会：橿原市教育委員会指導主事 葛本雅崇氏

- ① 福岡：福岡市立飯原小学校 河野陽一氏
- ② 企業：アドベンチャーワールド 武分渉氏
- ③ 愛媛：松山市立久枝小学校 三浦智子氏
- ④ 奈良：生駒市立生駒小学校 泉谷利恵子氏、安田有輝氏、
新井賢太郎氏、福林倭吹氏

- 15：45－17：00 ESD 講演会：大会議室
「持続可能な未来のために 一人と自然との共生とは」
NPO 法人 共存の森ネットワーク理事長 澁澤寿一氏
- 17：00－17：10 閉会行事：大会議室
講評：長友恒人氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

【1月7日（日）】

- 9：10－9：30 受付（奈良教育大学本部）
- 9：30－11：30 ESD 実践交流会Ⅱ（発表20分＋質疑10分）

第4分科会：大会議室

司会：奈良市教育委員会指導主事 三木恵介氏

- ① 鹿児島：屋久島町立宮浦小学校 稲留愛氏
- ② 福岡：福岡市立小呂小学校・小呂中学校 枝広隆志氏
- ③ 山形：山辺町立山辺小学校 太田馨氏
- ④ 奈良：生駒市立生駒東小学校 竹田光陽氏

第5分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会：奈良教育大学准教授 及川幸彦

- ① 滋賀：比叡山中学校 伊藤由季氏
- ② 和歌山：白浜町立白浜中学校 中村僚太氏
- ③ 鹿児島：屋久島町立八幡小学校 橋口和真氏
- ④ 奈良：奈良教育大学附属幼稚園 白石真季氏

第6分科会：101教室

司会：奈良教育大学准教授 河本大地

- ① 滋賀：長浜市立北中学校 田坂一稀氏
- ② 愛媛：松山市立東中学校 眞柴さなえ氏
- ③ 熊本：菊池市立旭志中学校 米田祐貴氏
- ④ 奈良：奈良教育大学ユネスコクラブ 山平楓、苗代昇妥

- 11：40－12：00 閉会行事
講評：長友恒人氏、柴尾智子氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）
挨拶：加藤久雄（奈良教育大学顧問）

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】
アースデイ奈良でのボランティア活動 活動報告書

国語教育専修 2 回生 吉岡 優来

1. **実施日** 2023 年 4 月 22 日 (土)
2. **場所** 奈良公園 登大路園地
3. **参加者** 教育学専修 4 回生 木下 結等
特別支援教育専修 2 回生 神吉 優利奈、才田 優佳
国語教育専修 2 回生 田中 愛花、吉岡 優来
社会科教育専修 2 回生 木幡 美幸、横井 琴音
英語教育専修 4 回生 川口 綾菜、福西 隆生、3 回生 苗代 昇妥
書道教育専修 3 回生 栗垣 実咲

4. 活動の概要

奈良公園登大路園地で開催された、アースデイ奈良というイベントでボランティア活動を行った。このイベントでは、世界中で地球のことを思い行動する日である「アースデイ」が毎日続くようにという想いで毎年開かれている。70 を超えるブース出展、ステージ発表、リユース食器・リサイクルなどの活動などが催され、学生はそれらの計画及び運営に携わった。

5. 参加学生の学び・感想

アースデイ奈良に参加して、今回はブース誘導やリユース食器の受付、SNS での配信や撮影、会場の見回りなど実に多くの活動をさせていただいた。これらの活動を通して学んだことを 2 つ挙げる。1 つ目はアースデイのイベントの素晴らしさについてである。アースデイ奈良は様々な世代の人たちが一堂に集まり環境に関して考えるイベントであるため自分自身大変いい影響を受けることが出来た。2 つ目はアースデイが抱える問題についてである。環境イベントにも関わらずプラスチックストローを配っているブースもあり、イベントの趣旨を全員にしっかりと伝えていくことも大切であると感じた。多くの学びがあったアースデイ奈良にこれからも参加したいと感じた。

(教育学専修 4 回生 木下 結等)

私は今回初めてアースデイに参加し、ステージ司会をさせていただいた。ステージ司会を担当して学んだことは、ただ司会をするという意識だけではなく、ステージに立つ人や観客のことも考えて司会をすることが大事だということだ。ステージに立つ人にとっては、紹介や発表前の繋ぐ言葉を司会がすることでステージに立ちやすくなり、観客に向けて「次は何時からこんなことをしますよ」という一言があれば流れが分かりやすくなると思った。司会として大事にすべきことを知ることが出来たと思う。

(特別支援教育専修 2 回生 神吉優利奈)

私は、午前中は本部で受付をし、午後はリユース食器の返却を担当させていただいた。

本部での受付で学んだことは主に 2 つある。1 つ目は、受付に行けないお店に対して、個別に対応することの大切さである。そして 2 つ目は、外国人や老若男女と対応できるコミュニケーション能力が必要であることだ。

また午後のリユース食器では、食器の返却と金銭の返却を分担し他人と協力して働くことを学んだ。説明が十分になかったり、臨機応変に対応する必要があったりと難しい状況のなか、みんなで協力しながら対応できた。

(特別支援教育専修2回生 才田 優佳)

私は、今回のアースデイで学んだことが2つある。1つ目は、コミュニケーション能力の大切さである。アースデイを含むボランティア活動は、初対面の人と円滑に物事を進める必要がある。挨拶と笑顔とポジティブな発言が大切だと思った。

2つ目は、経験を積むことの必要性である。ステージで奈良市長の中川市長と話をさせていただいたが、「大人に物申したいことは？」という質問を投げかけられた。予想外で、とても驚いたが、なんとか答えることができた。それは、大学で沢山の経験をさせていただいたからだと思う。これからは、自身の成長と共に後輩が経験のできる機会をたくさんつくりたい。(国語教育専修2回生 田中 愛花)



ステージ発表の様子

私はアースデイ奈良に参加し、ステージ司会をさせていただいた。そこで、話し手と聞き手が一体になることの大切さ学んだ。初めは、司会原稿ばかりに目が行き、観客の方々の反応を見ていなかった。しかし、顔をあげ反応をみながら話すことで、観客の方々の頷きや笑顔が見え、原稿を棒読みするのではなく、問いかけや反応にあった言い換えもすることができた。そうすることで、より全体の雰囲気も良くなったように感じた。この「一体となる」ことを今後の模擬授業やESDの活動に活かしていきたいと思う。(国語教育専修2回生 吉岡 優来)

アースデイで学んだことはたくさんあるが、一番大きかったものは伝える気持ちについてだ。

私はアースデイで司会をさせていただいた。初めの方はマイクを使っているのにも関わらず、声が全く会場に通らなかった。その後、他の人の司会の様子を見たりして、始めの私に足りなかったものに気が付いた。それは普段話す時よりもはきはきと話すという意識や、観客は少なくとも目の前にいる人に伝えるという意識である。意識を変えたことにより、声は初めより通るようになった。伝えようと意識して話すことは大切だと実感した。(社会科教育専修2回生 木幡 美幸)

私はアースデイで沢山のことを学んだ。特に、私は奈良公園でのネイチャーゲームを主に担当させていただく中で、自然環境を題材にした授業作りについて多くを学んだと共に、子供との関わり方について多く学ぶことが出来た。限られた時間の中での打ち解け方や、大人数の場合への対処が今後の課題だと考えた。

また、リユース食器も担当させていただいたが、普段私たちがどれだけ使い捨てをしているかを実感することが出来た。そのため、より一層環境に優しくすることを心がけようと考えた。

(社会科教育専修2回生 横井 琴音)

参加して学んだことを2点書く。

1点目は、人のもつ力の大きさだ。イベントの開催中はもちろん準備や片付けでも、出店者や参加者といった立場に囚われず、協力し合う人々の姿が多く見られた。このような協力や熱意があったからこ

そ、ここまで大規模なイベントが実現できたのだと思う。

2点目は、多様な人との交流の重要さだ。イベントには様々な年代・国籍の人が来ており、環境問題に強い関心のある人も偶然立ち寄っただけの人もいた。様々な人が互いに刺激を与え合うことで、アースデイの輪が奈良から日本、世界へと広がっていくのだと感じた。

(英語教育専修4回生 川口 綾菜)

私はリユース食器のレンタル受付に携わった。そこで私は一人では対応できていなかったところに気付き、互いに補い合うことで成し遂げることの大切さを学んだ。特に今年度は、海外の方々と交流する機会が多く、恐る恐る話しかけてきた人たちは私が英語で話しかけると表情を和らげてくれた。そのとき、周りの仲間たちは自分が英語で話している間に食器やおつりの準備をしてくれており、全員で協力することでスムーズな対応ができた。今回は自分が初動を担ったが、周囲を見て僕のできることを全力で生かしてくれた仲間たちのようになりたい。

(英語教育専修4回生 福西 隆生)

私は、事前の企画と当日の実施の両方に携わった。企画を作る途中では、様々な意見を取り入れながら話を進め、多様な考えをまとめる難しさや重要性を実感した。多様な意見を踏まえてイベントを作り上げていくうえで、意見を出し合うことは同じ目的に向かって進めていくための下地になることが分かった。当日は、色々な人の環境に関連する取り組みを知ることができた。より一層、環境を守る取り組みを行っていきたいと考えた。

(英語教育専修3回生 苗代 昇妥)

私は昨年に引き続きステージの司会を務めた。

私は人が集まり、大勢の人と盛り上がるということの良さを実感した。大学生活は、コロナ禍でそのような大勢の人と何かをしたり盛り上がったりすることができなかった。今回のアースデイでたくさんの人がステージを見ており、出演者の方の呼びかけに応えるように大勢の観客が湧く様子は、ステージ前から司会として見て、とても胸を打たれる光景であった。人と繋がることの素晴らしさ、素敵さを実感できたアースデイだった。

(書道教育専修3回生 栗垣 実咲)



司会の様子



全体の様子

【近畿コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

片桐西小学校 野外活動支援 活動報告書

美術教育専修 2 回生 東 瑞

1. 日時：2023 年 5 月 16 日(火) 19:00～20:30
2. 場所：大和郡山市里山の駅風とんぼ
3. 参加者：特別支援教育専修 2 回生 才田 優佳
美術教育専修 2 回生 東 瑞
教育学専修 1 回生 溝部 愛心
数学教育専修 1 回生 石田 紗千佳、小田 彪雅、筒井茉啓

4. 活動内容の概要

片桐小学校の児童が野外活動の最後に行うキャンプファイヤーの支援を行った。冒頭の「蚊が飛んできた」というゲームの内容を、寸劇を交えて説明したのちに手のひらや足裏などをタッチし合い気持ちを盛り上げるスタuntsをしたり焚火の火から児童の安全を確保したりゲームに参加し交流を深めたりした。

事前に仕事が割り振られていたわけではなかったが、児童の言動や状況を瞬時に捉え、自分の役割を見つけ出し主体的に行動することができた。

5. 参加学生の学び・感想

今回は、児童が他のグループのスタuntsのルールを知っている状況であった。私にとってそういった状況は初めてだった。児童が、他のグループのスタuntsのルールや盛り上がり方を知っていたので、円滑に進んだ。また、スタuntsをする方、参加する方の両方が、余裕を持ってスタuntsに取り組んでいたように感じた。そのためこの方法は児童にとって良かったと考える。このことから、従来の考えに囚われず、児童にとって良いもの考えることが重要だと考えた。この経験を今後活かしていきたい。

(特別支援教育専修 2 回生 才田 優佳)

私は野外活動の支援を通して2つのことを学んだ。第一に緊張は子供との間に溝を作るということだ。支援のため子供たちと短い時間で打ち解ける必要がある。私たちに向けられた警戒心を解くため親しみやすい言葉遣いや表情を心がけたい。第二に彼らが持つ火の危険の認識は低いということだ。支援中、火に飛び込んでいく子供たちの姿が印象深い。誰かのけがでキャンプを台無しにすることは絶対に避けなければならない。この2つの学びを次の機会を活かしたい。

(美術教育専修 2 回生 東 瑞)

私は今回の野外活動支援に参加して、児童の目線に立つことの大切さを学んだ。はじめはどう児童と触れ合っていけばいいのかわからなかったが、その不安を超える児童の元気にはとても励まされた。そして、キャンプファイヤーが始まってからは、児童がそのときに何を見ているのか、何を考えているのかという児童の目線に立ってみることで、楽しく児童と接することが出来た。今回の経験を通して学んだことを、今後の活動に活かしていきたい。

(数学教育専修 1 回生 石田紗千佳)

私が今回の野外活動支援で学んだことは、子供たちに一瞬で溶け込むことの難しさだ。私は最初はできる限り子供たちと関わろうと思っていたが、子供たちの元気さに圧倒され、最終的に子供たちを火から守る役目に回った。もちろん、火から子供たちを守ることはかなり重要な仕事だが、本当はもう少し子供たちと関わりたいかった。ただ、私が子供たちを火から守っていたことで、子供たちが安全に心置きなく楽しめたのは事実だと思うので、その点に関しては、子供たちの最幸の思い出を作る手助けをできて良かったと思う。

(数学教育専修 1回生 小田彪雅)

私は今回、大学生になって初めて、子どもと関わる経験をした。そこで、児童への声の掛け方の工夫の重要性を学んだ。私は練習の時は恥ずかしいという気持ちを捨てられず、あまり声を出せていなかった。しかし、実際に野外活動に参加して、途中で疲れてきた児童に対して、大きな声で盛り上げたり、自分自身が楽しんでみたりすると、その児童もやる気になって積極的にゲームに参加していた。周りの先生方も、たくさん声を出してその場を盛り上げていた。これから児童と関わる際には、今回の経験を活かした声かけができるようにしていきたい。

(数学教育専修 1回生 筒井茉啓)



キャンプファイヤー終了後の焚き火

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

左京小学校での野外活動支援 活動報告書

国語教育専修 2 回生 吉岡 優来

1. 実施日 2023 年 5 月 17 日（水）
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 英語教育専修 4 回生 川口 綾菜
英語教育専修 3 回生 苗代 昇妥
特別支援教育専修 2 回生 才田 優佳
国語教育専修 2 回生 吉岡 優来
美術教育専修 2 回生 東 瑞

4. 活動の概要

奈良市青少年野外活動センターで、左京小学校の野外活動支援を行った。野外炊飯とキャンプファイヤーでの補助を行った。

5. 参加学生の学び・感想

私は左京小学校の野外活動支援を通して、子どもたちの内面の成長を感じることができた。特に飯盒炊飯では、ご飯・カレー・薪の 3 つの役割があり、子どもたちは責任感をもって自分の役目を果たしていた。その中で、ある児童が「私はご飯の係じゃないから」と言い、ご飯係の児童たちが作業をするのをただ座って見ていた。しかし、他の児童が「一緒に手伝おう」と声をかけたことで、最後には班員全員で飯盒炊飯に取り組んでいた。時には役割にとらわれずに協力することも、よいことであると学んだのではないだろうか。私自身も、このような児童の様子から、責任をもって取り組むことや、柔軟に連携することの大切さに改めて気づくことができた。（英語教育専修 4 回生 川口 綾菜）

今回の活動を通して私が学んだことは、キャンプファイヤーのスタンプ実施時における、声掛けの大切さである。キャンプファイヤーでは、子どもたちがスタンプを行うときに大切なことを復唱したり相槌を打ったりして盛り上げるための声掛けを行った。今回、スタンプの一つにおいてリーダーのルール説明が上手くいかず、順調に進まないことがあった。そのとき、補助に入っている私たちがうまく進行するように声掛けを行うことができ、無事にスタンプを終えることができた。補助として、上手く進んでいないときは助けることができるように、常に状況を把握して適切な対応を取れるように準備するようしておく必要性を理解できた。このような点に留意しながら今後も野外活動支援を行っていきたい。（英語教育専修 3 回生 苗代 昇妥）

私は今回の野外活動支援で次の 2 つのことを学んだ。

1 つ目は子どもたちを信じることの大切さである。子どもたちが野外炊飯で包丁を使っている際に、「危ない」と感じる場面があったが、手伝わずに見守ることにした。すると子どもたちは自分の力で成し遂げていた。そんな健気な様子に感動し、子ども達のできることを信じ手助けをしないことが、子ども達自身の成長になることもあると学んだ。

2 つ目は様々な感情をもつ子がいることである。それはキャンプファイヤーの時に感じたことである。

楽しそうにしている子もいれば、しんどそうにしている子、また怖そうにしている子もいた。様々な思いの子がいることを頭に入れつつ、今後の活動をしていきたい。また、どのような子どもにも寄り添える人になりたいと考えた。
(特別支援教育専修2回生 才田 優佳)

今回、初めての野外活動支援に行き、「楽しさ」の認識の大切さを学んだ。野外炊飯やキャンプファイヤーは、児童たちにとっては非日常であり気分も上がるものである。その「楽しさ」は重視されるべきものである。しかし、円滑で学びのある活動にするためには、「ふざける」ことはしてはいけない。それらの線引きは、友達と注意しあい、先生の話をしっかり聞こうとするなど、児童に意識によってされていた場面が何度もあった。支援する際にも、その「楽しさ」の線引きを子どもたちに意識してもらう工夫をすべきであると感じた。
(国語教育専修2回生 吉岡 優来)

私は野外活動の支援を通し2つのことを学んだ。第1に、緊張は児童との間に溝を作るということだ。短い時間で彼らと打ち解けるためには私たちに向けられた警戒心を解く必要がある。親しみやすい言葉遣いや表情を心がけたい。第2に、彼らが持つ火の危険の認識は低いということだ。支援中、火に飛び込んでいく子供たちの姿が印象深い。誰かのけがでキャンプを台無しにすることは絶対に避けなければならない。この2つの学びを次の機会を活かしたい。
(美術教育専修2回生 東 瑞)



キャンプファイヤーの様子

【近畿ESDコンソーシアム・学生によるESD活動支援】

奈良市立西大寺北小学校 野外活動支援 活動報告書

教育学専修2回生 宮木 舞

1. 日時 : 2023年5月31日(水) 13:30~21:00

2. 場所 : 奈良市青少年野外活動センター

3. 参加者 : 英語教育専修 3回生 苗代 昇妥

教育学専修 2回生 宮木 舞

国語教育専修 2回生 無量井 夏音

美術教育専修2回生 東 端

特別支援教育専修 1回生 長尾 希颯

数学教育専修 1回生 奥村 壮之佑



キャンプファイヤーの様子

4. 活動の概要

2023年5月31日に奈良市青少年野外活動センターにて、奈良市立西大寺北小学校5年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、野外炊飯の指導・補助、キャンプファイヤーの準備、スタンプの実施などである。

5. 参加学生の学び・感想

今回の活動を通して私が学んだことは、安全を確保する重要性である。今回、野外炊飯とキャンプファイヤーで支援を行った。その中でも特に、キャンプファイヤーで火が大きくなり、火の粉がかなり飛んでいた。広い範囲に飛んでいたため、子どもたちが火に近づきすぎないように配慮する必要があるがあった。近づきすぎている子どもに声掛けを行ったり薪を追加する時には特に気を配ったりして安全確保に努めた。子どもたちが火傷や怪我を負ってしまうと野外活動を楽しめなくなってしまう。安全に野外活動を実施できるように今後も支援を行っていきたい。(英語教育専修3回生 苗代 昇妥)

今回の野外活動支援では児童への指示が通りにくく、想像する力がないと無事に野外活動を終えることができないということ学んだ。児童はもちろん私たち大人も野外活動という非日常を楽しんでしまうのでいつもよりも慎重に物事を考えなくてはならないと分かった。(教育学専修2回生 宮木 舞)

今回の野外活動支援では、思っていたよりも児童へ指示を通すことが難しいと感じた。危険な活動が伴うため、指示は重要である。指示を聞く体勢作りをすることや、簡潔にすぐ実践できるように示すことが効果的であると学んだ。(国語教育専修2回生 無量井 夏音)

野外活動は、危険な状況になることが多く、全体にしっかりと注意を払う必要があることを実感した。また、怪我をした児童の対応を事前に準備しておくことが大切だと感じた。一人一人の状態に気づき、対応できる力が必要であることが学習できた。(特別支援教育専修1回生 長尾 希颯)

今回の野外活動支援を通して、児童に対する声掛けが想定よりも届いていなかった事に加えて、想定していないことを聞かれるなど、人数も多いため常に周りに気をつけることと臨機応変な対応をすることが必要であるという難しさがあった。(数学教育専修1回生 奥村 壮之佑)

今回の活動から児童が持つ火に対する危険意識は低いことを学んだ。活動中、燃え上がる火に向かって走り出す子どもたちの姿が印象的だった。今回学んだことを次の機会に活かし安全な野外活動となるよう支援の仕方を工夫したい。(美術教育専修2回生 東 端)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

三碓小学校での野外活動支援 活動報告書

国語教育専修 2 回生 吉岡 優来

1. 実施日 2023 年 6 月 14 日 (水)
2. 場所 生駒山麓公園 野外活動センター
3. 参加者 教育学専修 4 回生 中家 麻弥
国語教育専修 2 回生 富永 望天
国語教育専修 2 回生 吉岡 優来
英語教育専修 2 回生 澤井 咲樹
特別支援教育専修 1 回生 田畑 朗
音楽教育専修 1 回生 瀨本 和律

4. 活動の概要

生駒山麓公園野外活動センターで三碓小学校の野外活動支援を行った。支援として、野外炊飯の補助、キャンプファイヤーでの出し物・補助を主に行った。

5. 参加学生の学び・感想

今回の野外活動で、「支援する」ということは、できないことを手伝いできるように声をかけるといったようなことだけではなく、子どもたちが挑戦できるように、またはやってみたいと思えるようにすることだと学ぶことができた。野外活動では、「上手くできた」「楽しかった」という経験だけではなく、「難しかったけれど挑戦したらできた」「失敗したこともあったけれどみんなと協力できた」といったことも経験できる場であると考え。全て手伝う前に、まずは子どもたちと一緒にどうしたらいいか考えてみたり、安心出来る言葉がけをしたりして、子ども達に勇気を出して一歩踏み出せるようにするといったことを促すことで、子ども達にとって挑戦し学びになることが大切だと考えた。

(教育学専修 4 回生 中家麻弥)

今回の野外活動支援では、野外活動当日だけでなく、事前指導にも何度か参加させていただいた。事前指導や当日を通して、児童たちが野外活動を盛り上げようと自主的に話し合ったり、楽しそうにスタンプに参加したりしている姿が強く印象に残っている。「支援」という言葉をプレッシャーに感じていたが、児童と一緒に野外活動を楽しむことが、支援につながっているのだと学ぶことができた。短い期間で多くのことを学び成長する児童を、間近で見ることができた貴重な経験であった。児童の成長だけでなく、自身の成長も感じることができ、今後はより積極的に野外活動支援に参加したいと思うことのできた活動であった。

(国語教育専修 2 回生 富永望天)

今回の野外活動支援では、当日に参加するだけでなく、先生方との連絡や事前指導などにも携わらせていただいた。

全ての活動の中で、教師のあるべき姿を学んだ。キャンプファイヤーの事前指導をする際には、移動の仕方や学ばせることなど細かく考えておられ、学生とも連携して下さった。当日では、野外炊飯・入浴・キャンプファイヤー、またその間の移動や待ち時間も児童たちに「今どうすべきか考える」という声掛けをされており、指示をすべき部分はしっかり指示しておられた。これらのことか

ら、教師は入念な準備をしたうえで、その場で児童達に考えさせるための工夫をするべきであると学んだ。

(国語教育専修2回生 吉岡優来)

今回の野外活動支援では、学校との連絡や事前指導、当日の野外活動支援に携わった。

今回の野外活動支援で、教師側は全て指示するのではなく、児童にどう行動すべきか考えさせているということを学んだ。例えば、入浴場までの行き方や場所を直接教えるのではなく、地図を見て自分たちで考えて行くように指示していた。小学生だからといって教師が何でも指示するのではなく、考えて行動させ成長する機会を作っているのだと感じた。また、指示をする際、児童に伝わりやすいよう工夫するべきだと学んだ。特に、話す順序に注意し、児童が理解しやすいように言葉を選ぶ必要があると知った。

(英語教育専修2回生 澤井咲樹)

今回の野外活動支援を通して、生徒と密に関わる機会を設けられたとき、いかに生徒の意思を汲み取ることが重要かを学んだ。教師になった際、勉強面や生徒との関わりの面にもこの重要性は色濃く現れる。頭ごなしに生徒に教師の価値観を押し付けることは、生徒の多様性を阻害することになり成長の妨げとなる。野外活動支援にて、生徒主導の活動の補助が生徒の成長を促し得ると感じた。これができる慣用性のある教師になることが生徒の成長に資するのではないかと考える。

(特別支援教育専修1回生 田畑朗)

今回の野活で学んだことは、主に三つある。「どのようにして小学生に楽しんでもらうか」「どんな言葉をかければ良いか」「興味を持ってもらうにはどのようにしたら良いか」である。野外炊飯でカレーが完成し子供たちが自分でご飯を入れる際に、嫌がる子どもがいたが、自分は「やってみる？」としか声掛けできなかつた。しかし、その後「おこげのバリバリとるのが楽しいよ」と声掛けをしながら実践すると、子供たちも「やりたい」と言い出し、率先してやってくれるようになった。このことから、言葉を選んで言い換えることで子供たちの興味を引き出すことが出来ると学んだ。

(音楽教育専修1回生 瀧本和律)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】
奈良市立伏見小学校野外活動支援 活動報告書

社会科教育専修 2 回生 横井 琴音

1. 実施日 2023 年 6 月 15 日(木)

2. 場所 奈良県立野外活動センター

3. 参加者 英語教育専修 4 回生 川田 大登
教育学専修 2 回生 宮木 舞
社会科教育専修 2 回生 木幡 美幸
美術教育専修 2 回生 東 瑞
特別支援教育専修 2 回生 才田 優佳
社会科教育専修 2 回生 横井 琴音

4. 活動の概要

2023 年 6 月 15 日に奈良県野外活動センターにて、奈良市立伏見小学校の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、野外炊飯の補助、キャンプファイヤーの準備、スタンプの実施、キャンプファイヤーの補助などである。



キャンプファイヤーの様子

5. 参加学生の学び・感想

この野外活動支援におけるキャンプファイヤーで一番印象に残ったシーンは、特別な支援を要する子どもがいる班のスタンプで、その子がうまくりコーダーを吹くことができなかつたとき、子どもたちが誰に言われるでもなく、一緒に階名を歌って、学年全員でスタンプを作り上げていたシーンである。先生方の普段のご指導や子供たちのこれまでのかかわりの集積のようにも思えた。今回のファイヤーでは、子供たちの主体性や自治が強く見られ、私たちが積極的な支援を行う場面は非常に限られていたが、今回の状況にうまく合わせて支援をできていた後輩を頼もしく思った。

また、私自身も支援をするうえで重要なポイントを新たに見つけることができたように思う。

(国語教育専修 4 回生 川田 大登)

炎の周りではしゃぎ疲れる景色を全く見せない子供たちのエネルギッシュな姿を見て、友達と声が枯れるまで歌い踊った幼き日の記憶がよみがえった。大人になるにつれ複雑な出来事に接し、悩み苦しむことが多くなった。今回見た彼らの無邪気な姿は、今まで感じてきたつらい気持ちを和らげてくれた気がした。野外活動の支援のために訪れたが、彼らの自然体な姿に支えられた。キャンプ支援のとりこになったので、機会があれば参加したい。

(美術教育専修 2 回生 東 瑞)

今回の野外活動支援では飯盒炊飯の片付けとキャンプファイヤーの支援を行った。初めて訪れた場所だったこともあり、私自身が何をすれば良かったのかが分からなかつた。キャンプファイヤーではあいにくの雨になってしまって準備したゲームが行えなかつた。しかし改めて野外活動は子どもが主役であることに気付かされた。今

後の野外活動に参加するときには分からないことを分からないままにせずすぐに聞き、子どもが主体的に学べる場にしたいと思う。

(教育学専修 2回生 宮木 舞)

今回の野外活動支援では、主に飯盒炊飯の片付けとキャンプファイヤーの支援に入らせていただいた。

まず飯盒炊飯の片付けの際に、自分の意図していない行動で児童に迷惑をかけてしまったことがあった。今後は自分の行動が及ぼす影響について、都度立ち止まって考えるようにする。

またキャンプファイヤーでは、全員が一丸となって盛り上がっている様子であった。

また突如学生がスタンスすることになったが、児童の元気さに助けられなんとか乗り切った。その際、改めて雰囲気づくりの重要性を感じた。

(特別支援教育専修 2回生 才田 優佳)

子ども達が考えて動けるような声掛けについて特に考えさせられた。

飯盒炊飯の時に、担当した班がしっかりした子がいて、その子が主に動いている班だった。その状況を何とかしたくて、その子以外の子に指示をたくさん出してしまった。指示ではなく「今、何ができるかな？」と子どもが考えて行動できるような声掛けができればと思った。このような声掛けは時間に余裕があったはじめての方しかできず、大学生はもっと心に余裕をもって接しないといけないと思った。

(社会科教育専修 2回生 木幡 美幸)

今回の野外活動支援では、飯盒炊飯とキャンプファイヤーのお手伝いをさせていただいた。

飯盒炊飯では、暇をしている児童がいたが、私自身の余裕が無く、どうしたら児童が自主的に何をすればいいのか考え、行動できるような声掛けが出来なかったというか反省が残った。

キャンプファイヤーでは、支援級の児童のために児童が一体となっている場面があり、支援級の子どもとの関わりについて、考え直すきっかけとなった。

(社会科教育専修 2回生 横井 琴音)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】
奈良市立ならやま小中学校野外活動支援 活動報告書

英語教育専修 4回生 川口 綾菜

1. 実施日 2023年6月22日(木)
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 教育学専修 4回生 中家 麻弥 特別支援教育専修 4回生 山本 留維
英語教育専修 4回生 川口 綾菜
4. 活動の概要

2023年6月22日に、奈良市青少年野外活動センターにて、奈良市立ならやま小中学校の小学5年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、オリエンテーリングと野外炊飯の補助、アイスブレイクとしてのスタンプの実施などである。



オリエンテーリングの様子
(屋内)

5. 参加学生の学び・感想

今回の野外活動では、子どもたちを巻き込んで活動するということの難しさを感じた。レクリエーションでは、参加出来ず楽しめていない子が出てしまったり、野外炊飯の火の管理では子どもに任せきれず私が中心になって行ってしまったりした。活動すること、楽しませること、または時間調整や先生の指示にばかりを考えてしまい、子どもたち一人一人に目を向けられていなかったと感じる。野外活動は子どもたちの学びや成長のためのものであるため、もっと広い視野を持ち一人一人が参加し活躍できる場を作っていくべきだ。今回の学びから、もっと余裕を持ち周りを見ながら、全員を巻き込んで活動していきたいと思った。

(教育学専修 4回生 中家 麻弥)

初めて野外活動支援に参加したため、全ての活動においてたくさんの発見と学びを得た。特に、児童に役割を任せつつ、確認が必要な部分はきちんと大人が確認することの重要性は身に染みて感じた。例えば、寝具がないと騒ぎになったとき、私たちが数を確認して配布する形に変えていたため、早い段階で宿泊室にあるのではないかと予想がつき、すぐに見つけることができた。もし、寝具を取るのを児童だけに任せていたら、本当に人数分取ったのか、始めから数が足りなかったのか等、様々な可能性が浮かびすぐには解決しなかっただろう。このように一日を通して確認しておいてよかったという場面と、確認しておけばよかったという場面どちらも体験した。確認の大切さは野外活動支援に限った話ではないと思う。日頃から意識していきたい。

(特別支援教育専修 4回生 山本 留維)

私は野外活動支援を通して、指示を通すことと子どもを引き込むことの大切さを実感した。アイスブレイクとしてスタンプを実施した際、声をはりあげてもなかなか伝わらず、流れが悪くなってしまった。また、何人かの児童は少し後ろの方におり、全員を熱中させることができなかった。児童たちの緊張を解き楽しませるためには、音や掛け声などの工夫で子どもたちの興味をひき、指示を通してスムーズに進めることが大切だと学んだ。今回はボランティアの方々を支えられたが、次回からはたとえ人手が少なくても子どもたちを引き込めるよう、事前に工夫を考え備えておこうと思う。

(英語教育専修 4回生 川口 綾菜)

【近畿ESDコンソーシアム・学生によるESD活動支援】

安堵町立安堵小学校 野外活動支援 活動報告書

国語教育専修 2回生 田中 愛花

1. 日 時 2023年6月27日(火) 19:00~21:00

2. 場 所 大和郡山市立里山の駅風とんぼ

3. 参加者	国語教育専修	2回生	田中 愛花	国語教育専修	2回生	吉岡 優来
	理科教育専修	2回生	大木 諒	教育学専修	1回生	福原 千畝
	社会科教育専修	1回生	小南 舞桜	英語教育専修	1回生	上江 佳加

4. 活動の概要

2023年6月27日に大和郡山市立里山の駅風とんぼにて、安堵町立安堵小学校5年生の野外活動が行われた。支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、キャンプファイヤーの準備、スタンプの実施などである。



キャンプファイヤーの様子

5. 参加学生の学び・感想

今回、私にとって初めての野外活動支援ボランティアであった。学んだことは、二つある。

一つ目は、慣れないことでも努力をすれば克服することである。今回、野外活動支援の経験はないが、リーダーという責任ある役をいただきスタンプの回し役になった。人前で大声を出したり、規定外のことを即興でおこなったりすることが苦手だったが、野外活動支援に参加したことで度胸が付き臨機応変に対応できるようになったと思う。

二つ目は、子どもとの関わり方である。子どもたちと楽しくお話をしている時と、注意するときの使い分けが大切だと学んだ。

(国語教育専修 2回生 田中 愛花)

今回の野外活動支援で、短い時間で児童との距離感を近くするためには、対話が大変重要になるということ学んだ。今回はキャンプファイヤーだけの支援であったため、児童と関わる時間がないまま、スタンプをしたり、盛り上げをしたりという状況であった。その中で、キャンプファイヤー中に児童の輪に入って交流しようとする時、同意を求めるものよりも、質問を投げかけたもののほうがよく反応してくれていた。その後、話しかけてくれたので、児童達との距離感が近づいたように感じた。このことから、児童が自分のことを話せるようにしたり、聞く姿勢を示したりすることで安心感を与え、短時間でも距離感を近づけることができると考えた。

(国語教育専修 2回生 吉岡 優来)

私は初めて野外活動のボランティアをした。今回は安堵小学校の5年生たちと一緒にキャンプファイヤーに参加した。ここから学んだことは、楽しむことは大切なのだが、児童にメリハリを与えなければいけないという点だ。私には児童と楽しむときと児童を注意するときの判断基準がまだ曖昧であるため、このことがとても難しく感じた。今回感じたことを次回以降のボランティア活動に生かしていきたいと思う。

(理科教育専修 2回生 大木 諒)

私は、今回が初めての野外活動だったが、子どもたちが積極的に話かけてくれたり、用意したスタンプを楽しんでくれたりして、とても楽しい時間を過ごすことができた。さらに、先生方の、静かにしないといけない場面で話をしている児童や、火に近づきすぎてしまっている児童への対応を見て、大人の立場としての子どもの関わり方を学ぶことができた。

自分の中で良かった点も反省点も多くあったと感じており、また野外活動に参加する機会があれば、それらを活かしたい。

(教育学専修 1回生 福原 千畝)

今までの野外活動ではキャンプファイヤーを楽しむ側として参加していたが、今回は盛り上げ、子供たちの様子に注意する側に立場が変化した中で、先生方の指導や子供たちの様子のどちらもよく観察することが出来た。子供たちは名札を見なくても自分の名前を覚えてくれていて、暗闇の中後ろ姿だけでもわかるなど、子供たちの吸収力に感動した。先生方は日頃から子供たちを静かにする術や習慣を身につけており、その動作に共鳴して静かになることができる子供たちとの強い信頼関係を感じることが出来た。

(社会科教育専修 1回生 小南 舞桜)

私はこの安堵小学校の野外活動ボランティアが人生で初めてのボランティア活動だった。感想として一番先に出てくるのは、とても楽しかったということだ。私は人と関わるのが好きで、子供と関わることもとても好きである。この活動を通して、どのように子どもたちと接すれば笑顔にできるか、どのように話しかければ答えてくれるかなどを実際に体験するのにとてもいい経験になった。加えて、先生方のご指導も実際に現場に入って近くで見ることができて、とてもいい発見がたくさんできた。またこの野活ボランティアの募集があれば参加させていただきたいと考えた。

(英語教育専修 1回生 上江 佳加)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】

奈良市立平城小学校野外活動支援 報告書

特別支援教育専修 2回生 神吉優利奈

1. 実施日 2023年6月28日(水)
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター

3. 参加者 英語教育専修 4回生 福西 隆生
英語教育専修 3回生 苗代 昇妥
特別支援教育専修 2回生 神吉 優利奈
特別支援教育専修 2回生 才田 優佳
国語教育専修 2回生 吉岡 優来
英語教育専修 1回生 田中 天央衣



キャンプファイヤーの様子

4. 活動の概要

2023年6月28日に奈良市青少年野外活動センターにて、奈良市立平城小学校5年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、野外炊飯の補助、キャンプファイヤー準備、スタンプの実施、蛍見学の準備などである。

5. 参加学生の学び・感想

今回の支援活動で私が達成できたことは2つある。

1つ目は飯盒炊飯だ。昨年度はコロナによる規制が弱まって初めての飯盒炊飯であったため、私たちが勝手に分からず失敗してしまうこともあった。その失敗を活かし、今回は焦がすことなく全ての班にご飯を提供できたことを嬉しく思う。

2つ目はキャンプファイヤーだ。直前の野外炊飯の最中、ゲリラ豪雨に見舞われ、点火台は使えるものの地面がぬかるんでおり屋外での開催が危ぶまれた。しかし、楽しみにしている子どもたちの顔と先生方の残念そうな顔を見て、居ても立っても居られず、子どもたちの入浴時間を使って大きなスポンジで水取りを行うことを提案した。

その案を採用していただき、ユネスコクラブの仲間たちも提案に乗ってくれたことで、無事屋外でキャンプファイヤーを行うことができた。校長先生からもお褒めの言葉をいただき、自分の行動が子どもたちも先生にも喜んでいただけたことを誇りに思う。

今回の成功体験を自信につなげ、また後輩たちに繋いでいきたい。

(英語教育専修 4回生 福西 隆生)

私が今回の野外活動支援で学んだことは、野外活動における判断の大切さである。

今回の野外活動は、野外炊飯を行ったあとに、児童たちの入浴、キャンプファイヤーという流れであった。しかし、野外炊飯の最中、強い雨が降り屋外でのキャンプファイヤーの実施が困難に思われる状況になった。その後、雨は弱まり結果的には屋外で実施することができた。このことから、野外活動においては天候や地面の状態など、いくつかの要素から総合的に判断することが大切であること

が分かった。

(英語教育専修 3 回生 苗代昇妥)

今回の野外活動支援では、野外炊飯、キャンプファイヤー、蛍見学の活動に参加させていただいた。私は今回の野外活動支援の中でも特に、すべての活動が時間通りに進み、かつ子ども達がとても楽しそうにしていた様子が印象に残った。その様子から、子ども達は野外活動を心待ちにしている、心から楽しんでいるのだろうと思った。また、子ども達にとって野外活動は学校では経験出来ないことであり、貴重な機会であることを改めて感じた。次回、野外活動支援に参加する際には、野外活動が子ども達にとって貴重な機会であることを頭に置きながら、子ども達が多くのことを経験出来るように支援したいと思う。

(特別支援教育専修 2 回生 神吉 優利奈)

今回の野外活動支援で特に印象に残っていることは、全ての活動においてほぼ時間通りに進んだことである。野外活動は、非日常的なことであり、想定外の事が起きたり、指示が通りにくかったりすることがあり、これまでの経験では時間通りに進むことは困難なことが多いように思う。その上今回は、途中豪雨に見舞われたにも関わらず、先生方の臨機応変な対応により、円滑に進行した。また児童が協力して活動していたことも大きな理由である。そして、何とか屋外でのキャンプファイヤーをすることができた。雨が降りキャンプファイヤーはできないかと考えられたが、なんとかできたことに非常に嬉しく思った。

(特別支援教育専修 2 回生 才田 優佳)

今回の野外活動支援では、児童と接するときには信頼関係が大きく関わってくるということを実感した。支援をしていた中で、私の近くで泣いてしまった児童や喧嘩をしていた児童が数名いた。そこで、話を訊いてみようを試みたが、やはり全く返答してくれず、対応することが出来なかった。しかし、当然先生方は対応をしっかりとされていた。その姿から児童の性格や周囲の環境などを知ってくれている先生と児童との信頼関係は厚いということを感じた。今後の支援や活動では短い間で信頼関係を築くということは難しいと思うが、その重要性を認識し、今後の活動ではそのことも意識したい。

(国語教育専修 2 回生 吉岡 優来)

今回の野外活動支援は一言で表すととても楽しかった。私にとって貴重な体験となり、充実した時間であった。野外活動に参加するのは今回が初めてで計画通りに進めることができるのか、足を引っ張ってしまうことがないか、不安であった。だが、実際行ってみると、先生方や子ども達、先輩方の力があり、無事終えることが出来た。非常に大きな達成感を感じる事が出来た。途中豪雨の関係でキャンプファイヤーができるかどうか分からなかったが、スポンジで水を吸い取り無事実施することが出来た。子供たちの楽しそうな笑顔を見ることができ、本当に心が温まった。この活動を通して、自分が子供たちと関わることが好きであることを再認識できた。これからも積極的に参加していきたいと思う。

(英語教育専修 1 回生 田中 天央衣)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】
奈良市立一条高等学校附属中学校野外活動支援 活動報告書

教育学専修 4 回生 木下 結等

1. 実施日 2023 年 7 月 7 日

2. 場所 休暇村近江八幡キャンプ場

3. 参加者 教育学専修 4 回生 木下 結等
心理学専修 4 回生 木村直希
英語教育専修 4 回生 川口 綾菜
音楽教育専修 4 回生 藤本尋巳



キャンプファイヤーの様子

4. 活動の概要

2023 年 7 月 7 日に休暇村近江八幡キャンプ場にて、奈良市立一条高等学校附属中学校 2 年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、子どもたちによるキャンプファイヤーでの活動の補助、スタンプの実施などである。

5. 参加学生の学び・感想

私が今回の野外活動支援で学んだことは 2 つある。

1 つ目はサポートの重要性である。今回、私は学生の代表として担当の先生と連絡を取りながら当日のスケジュールなどを決めた。しかし、野外活動支援に参加するのが初めてということもあり、不備があったり、当日の流れが決まらなかったりという問題が起きた。その時に周りの人たちが、アドバイスや当日までの準備を手伝ってくれたことで当日は無事に支援をすることが出来た。自分 1 人ではなく周りの人たちのサポートがあったからこそ成功することが出来たと感じた。

2 つ目は野外活動がもたらす生徒への影響である。今回支援を行った生徒の多くは新型コロナウイルスの影響で小学校の野外活動が中止になっている。その中で活動を行う前からキャンプファイヤーを楽しみにしてくれていた生徒がたくさんいた。その生徒たちと一緒に最高のキャンプファイヤーを作ることが出来たのはとても幸せな時間だった。活動後の生徒の表情やアンケートからも生徒が野外活動を通して充実した時間を過ごせたことが分かり野外活動が生徒にいい影響をもたらしたと感じた。

以上 2 つの大きな学びを忘れず、今後も野外活動支援に取り組んでいきたい。

(教育学専修 4 回生 木下 結等)

私自身野外活動支援は 2 回目だったが、晴天での野外活動支援は初めてだった。また、普段は小学生への支援活動が多いため中学生への支援はとても久しぶりであった。このように今回は野外活動支援を通じて新たな経験をたくさん積むことができた。当日は天気が不安定で途中雨が降ることもあったが、生徒達の活気によって炎は燃え続けた。生徒達と一緒に最高のキャンプファイヤーを作り上げることが出来てとても嬉しかった。

(心理学専修 4 回生 木村 直希)

私がこれまでに参加した野外活動支援は、慣れた野外活動センターで、対象も小学生であった。し

かし今回は、いつもと異なる場所で、対象も中学生だったため、新鮮で学びが多かった。特に、思いをひとつにして皆を巻き込んでいくことの大切さを感じた。コロナの影響で野外活動の経験のない生徒は皆「絶対に成功させたい」という強い思いをもっており、スタンプをする側も参加する側も関係なく、皆が声を出して盛り上げていた。私たちはスタンプをする側だけに注目したり、盛り上げるために率先して声をだしたりしていたが、今後はスタンプに参加する側の気持ちを高めることにも挑戦していきたい。

(英語教育専修 4回生 川口 綾菜)

今回の野外活動支援では、一人ひとりが「みんなで楽しもう」と自発的に動く中学生の姿に感銘を受けた。盛り上がるための声掛けをお互いにかけて合ったり、聞こえない時には「もう一回言って」と優しく伝え合ったりと、お互いを思いやる姿が生徒から見受けられた。生徒の自主的に動き、自分達で助け合うようにしつつも、火の周りに近づきすぎているか、指示が分からず迷っている子はいないか、体調の変化はないか等、生徒のことを常に観察して見守ることが、教員には必要だと学んだ。

(音楽教育専修 4回生 藤本 尋巳)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

東大寺寺子屋 活動報告書

数学教育専修 1 回生 奥村 壮之佑

1. 実施日 2023 年 7 月 29 日(土)・30 日(日)

2. 場所 東大寺

3. 参加者 社会科教育専修 4 回生 吉岩 尚樹 英語教育専修 3 回生 苗代 昇妥
国語教育専修 2 回生 田中 愛花 国語教育専修 2 回生 吉岡 優来
社会科教育専修 1 回生 金川 恵人 社会科教育専修 1 回生 田中 友貴
数学教育専修 1 回生 奥村 壮之佑 数学教育専修 1 回生 小田 彪雅

4. 活動の概要

2023 年 7 月 29 日・30 日に東大寺にて、東大寺寺子屋が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、参加者の誘導とレクリエーション、フィールドワーク、食事の配膳、就寝準備などである。

5. 参加学生の学び・感想

私が今回の東大寺寺子屋で学んだことは、児童生徒とのコミュニケーションの大切さだ。今回のようにフィールドワークが35度を上回る酷暑の中であれば、私たちが的確な指示を出していても、児童生徒の熱中症のリスクは非常に高い。実際、体調の確認は逐一していたがトイレに行きたいと言い出せず、体力的に限界に近い状態で無理をしていた児童が見受けられた。児童生徒とのコミュニケーションが上手いかず、心を開いてくれていなかったら企画自体達成が難しかっただろう。以上のことから私は児童生徒とのコミュニケーションが大切だと感じた。

(社会科教育専修 4 回生 吉岩 尚樹)

今回の活動で学んだことは、様々な人とコミュニケーションを取ることの大切さである。気温が高い中の活動だったため、子どもたちの体調を気遣う声掛けがかかせなかった。子どもたちの学習の場面では、問いかけ方によって子どもたちの意見を引き出せるかそうでないかに大きな差が出ることが分かった。また、保護者の方々には、子どもたちの健康状態や活動の様子を伝えるようにした。これにより、活動終了後の子どもたちの健康を守ることができ、保護者の方に活動の様子を知ってもらうことができた。今回の学びを今後の活動にも生かしていきたい。

(英語教育専修 3 回生 苗代 昇妥)

私が、今回の東大寺寺子屋で学んだことは、連絡網の大切さと、子どもたちへの声かけの重要性である。体調の悪い子どもたちが出てきた時に、連絡網をしっかりと設けていたことで迅速な対応ができた。また、グループリーダーが率先して体調を気にかけて、子どもたちとコミュニケーションをとつ

たことで、「自分を見てもらえている」という安心感をもってもらえたと思う。私は今回、裏方を担当させていただいた。先生方や、先輩方の動きから色々なことを学ぶことのできるいい機会になった。

(国語教育専修 2回生 田中 愛花)

東大寺寺子屋では、質問を工夫することで、児童生徒の考えをより具体的に引き出せるということを学んだ。この活動では、様々な体験を通して、東大寺がどのように社会と繋がっているのかを考えることができた。しかし、初めは緊張をしている児童生徒から意見を聞くことは難しかった。そこで、漠然と質問するのではなく、比較して質問したり、児童生徒の発言を順序だてて考えることができるように補助をしながら質問したりすることなどを意識した。このようにすることで、活発な発言に繋がるということを学んだ。

(国語教育専修 2回生 吉岡 優来)

今回の東大寺寺子屋では、連絡網の大切さと児童生徒の安全管理の重要性を学んだ。特に1つ目は、他の班の様子や注意点を共有したことが役にたった。しかし、フィールドワークに注意を払うあまり本部からの連絡に気づけなかったなど、反省すべきこともあった。2つめについては、熱中症予防をはじめ終始気が抜けなかったが、以前より児童生徒との接し方や大人と子供の意識の違いについても学ぶことができるようになった。

(社会科教育専修 1回生 金川 恵人)

今回の寺子屋で学んだことは、児童生徒との接し方だ。円滑な行動のために、声かけをしなければいけない場面ある。しかし、直接的に助言してしまうのではなく、その子たちに寄り添って話してあげることで大切だと感じた。今回の支援を通して、児童生徒の集団行動を見守る時は、集団を見つても個人を見逃さない、という姿勢が大事だと思う。

(社会科教育専修 1回生 田中 友貴)

今回の東大寺寺子屋で学んだことは、指示通りに動くことの大切さである。指示されていない行動をしてしまうと、予定していた時間に間に合わなくなることを実感した。今までは指示を聞くまで積極的に行動できなかったが、東大寺寺子屋の支援を通して様々な方から指示を聞き的確に行動できるようになったと思う。

(数学教育専修 1回生 奥村 壮之佑)

私が今回の東大寺寺子屋支援で学んだことは、児童生徒をまとめることの難しさだ。私は3班専属の学生サポーターとして、この2日間サポートしたが、話を静かに聞くという雰囲気を作るのが非常に難しかった。しかし、児童生徒の元気さからエネルギーをもらうこともでき、東大寺寺子屋の支援に行くことができよかったですと感じた。今回うまくいかなかったこともあったが、それを活かして、今後の活動にも取り組んでいこうと思う。

(数学教育専修 1回生 小田 彪雅)

【近畿ESDコンソーシアム・学生によるESD活動支援】

大学生とワークショップ！子どもSDGs 活動報告書

国語教育専修 2回生 田中 愛花

1. 日 時 2023年8月6日（日）10時30分～12時00分

2. 場 所 奈良市立富雄公民館 2階 集会室

3. 参加者 英語教育専修 3回生 苗代 昇妥 国語教育専修 2回生 田中 愛花
美術教育専修 2回生 東 瑞 書道教育専修 1回生 間宮 千尋
数学教育専修 1回生 筒井 茉啓

4. 活動の概要

2023年8月6日に、奈良市立富雄公民館にて、大学生とワークショップ！子どもSDGsが行われ、本学ユネスコクラブの学生が参加した。

目標は、以下の三つである。一つ目は、年齢の異なる参加者達や大学生と交流し、各々の考え方や価値観を理解できる。二つ目は、保険や水・衛生、インフラに関する問題を捉え、自分ができる解決方法について主体的に考え、行動できるようになる。三つ目は、SDGsに関心を持ち、継続して取り組もうと考えることができる。これらの目標をもとに、活動を進めた。

5. 参加学生の学び・感想

今回の活動で学んだことは、伝えたい内容を分かりやすく説明する難しさである。小学生を対象に実施したため、伝わりやすい言葉に置き換えたり参加者が体を使って学ぶことができるように内容を工夫したりすることを心掛けた。また、活動の90分間、集中力を持続させるには、話を聞いてもらう場面と、楽しく体を動かす場面など全体の構成にも工夫が必要であることがわかった。今後も、活動を学びある良いものにするために、全体の構成と各場面での工夫との両面から授業づくりを考えるようにしたい。

（英語教育専修 3回生 苗代 昇妥）

今回の活動で学んだことの一つ目は、児童に意欲的に授業を取り組んでもらうための方法である。クイズや寸劇、体験的な活動を駆使することで飽きさせることなく、子どもたちのやる気を引き出せるとわかった。二つ目は、準備の大切さである。今回の活動では、ろ過装置を製作するワークショップを行ったため準備物が非常に多かった。前日まで準備物の用意をしていたので、リハーサルの時間が減ってしまったように思う。今後は、もう少し見通しを持って授業づくりに励んでいきたいと思う。全体を通して、児童の意見を取り入れながら活動を進めることができたので、これからも積極的にESD実践の活動に参加していきたいと思う。

（国語教育専修 2回生 田中 愛花）

今回の活動を通して、児童の積極的な参加を促す活動は、子供のやる気を引き出し、主体的な学び

へ導くことに気づいた。企画の劇やクイズ、そしてろ過装置の工作活動で、児童の好奇心を引き出すとともに、児童の積極的に学びをつかみ取ろうとする姿勢を促した。やはり、好きこそものの上手なれで、「楽しい、もっと知りたい」と思わせる動機づけがカギとなると感じた。これからも、効果的な動機づけを駆使し、児童の主体性を育めるような工夫を心掛けていきたい。

(美術教育専修 2回生 東 瑞)

今回の子供SDGsが初挑戦の企画であったが、児童が体験しながら学びのある講義にするにはどうすれば良いか考えながら計画を立てることが一番難しかったと感じる。講義中では児童の反応を見ながら話を進めることが難しく、リハーサルと違う箇所も多くあったので臨機応変に動く力をより身につけていかななくてはならないと感じた。また、児童の反応を見て動くということは、反応してくれる児童には動きやすいが、反応が薄い児童には動きづらいのだということを感じ、児童が積極的に反応できるような雰囲気づくりも同時に大事なことであったと学んだ。

(書道教育専修 1回生 間宮 千尋)

私は本企画で、児童がより企画内容を理解できるようにするための術を見つけることができた。言葉だけでなく、実際に絵を見せたり具体例を出したり様々な方法があるのだと知った。また、パワーポイントの分かりやすい見せ方や、低学年の児童に対する言葉遣いなども学ぶことができた。今回の学びを活かして、これからも企画の発案や、児童への声かけができるようにしていきたい。

(数学教育専修 1回生 筒井 茉啓)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】
奈良市スポーツ少年団野外活動支援 活動報告書

教育学専修 4 回生 木下 結等

1. 実施日 2023 年 8 月 16 日
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 教育学専修 4 回生 木下 結等
国語教育専修 2 回生 吉岡 優来
音楽教育専修 1 回生 濱本 和律

4. 活動の概要

2023 年 8 月 16 日に奈良市青少年野外活動センターにて、奈良市スポーツ少年団の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、クラフト活動及びレクリエーションの補助、スタンプの実施などである。

5. 参加学生の学び・感想

私が今回の野外活動支援で学んだことは大きく 2 つある。1 つ目は子供たちへの接し方、2 つ目は予期せぬ事態への対応力の 2 つである。

まず、1 つ目の子供たちへの接し方について述べる。今回の野外活動支援には小学 4 年生と 5 年生の子供たちがいたが、中には活動の途中に集中力がきれてしまい自分のしたいことを始めてしまう子もいた。その時にその子に対する接し方の難しさを感じた。無理やり連れていくわけではなく、あくまでその子のペースに寄り添うことが重要であると感じた。

次に 2 つ目の予期せぬ事態への対応力について述べる。当初私たちが考えていた活動がプログラムの関係上行われていた活動と被ってしまうという問題が生じた。その際にほかのメンバーと協力しながら、短時間で私たちの予定していた箇所を修正することが出来た。予期せぬ事態の時にフリーズしてしまうのではなく、私たちが今出来ることは何かということをしっかり考えて実行に移すことが出来たのは私にとって大変大きな意味を持つ野外活動支援になったと感じた。

(教育学専修 4 回生 木下 結等)

今回、通常の野外活動支援とは異なり、児童らも初対面であり、全員で一体感を持って行うことが難しかったように感じる。しかし、活動の中で、体を動かす場面では会話が弾んでいたり、声を掛け合ったりしていた。交流というのは、言葉だけでなく、「スポーツ」などの体を動かすことでも行うことが出来るということを学ぶことができた。

(国語教育専修 2 回生 吉岡 優来)

今回学んだことは子供たちとの打ち解け方だ。スポーツ少年団ということではじめにスポーツの話などをすることで盛り上がり子供たちとの距離が縮まった。早い段階で子供たちとの距離を縮めることで、その後のレクリエーションなどもより一層盛り上がる事が出来た。

(音楽教育専修 1 回生 濱本 和律)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

あすかばんど野外活動支援 報告書

特別支援教育専修 2回生 神吉 優利奈

1. 実施日 2023年8月20日(日)

2. 場所 奈良市立飛鳥小学校

3. 参加者 音楽教育専修 4回生 松岡 花
英語教育専修 3回生 苗代 昇妥
英語教育専修 2回生 澤井 咲樹
特別支援教育専修 2回生 神吉 優利奈
特別支援教育専修 1回生 田畑 朗

4. 活動の概要

2023年8月20日に奈良市立飛鳥小学校にて、児童や地域の方が共に音楽活動を行う「あすかばんど」を中心とした野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、会場運営の補助、スタントの実施、屋外での水遊びの補助などである。

5. 参加学生の学び・感想

あすかばんど野外活動支援に参加し、演奏を聴いた。ユネスコクラブのスタントではギターを担当した。

コロナ禍で大学に入学したため、直接子供と関わる機会は今回が初めてだった。オンライン上の交流とは異なり、子どもたちの表情や声色、動きを直接見て、子供達に積極的に声をかけ短い時間の中で好きなものや夏休みの様子を聞くことができた。また、集団に入れず困っている子供にも、そばで声をかけてアプローチすることができた。

音楽を通して、大人も子供も心を一緒に楽しめる野外活動だった。

(音楽教育専修 4回生 松岡 花)

今回の野外活動支援で学んだことは、臨機応変に対応する重要性である。今回は、3つのスタントを実施したが、本番直前でスタントの順番を入れ替えることになった。順番が変わったがスムーズに進行することができて、参加者も楽しんでくれたように思う。状況に合わせて短い時間で適切な判断を下し、その場を盛り上げることができた。

瞬時の判断は、授業する際にも必要になるだろう。これからも野外活動支援を通して、状況判断力をより向上させていきたい。

(英語教育専修 3回生 苗代 昇妥)

あすかばんど野外活動支援を通して、音楽が作り出す一体感を感じることができ、一生懸命演奏する児童・生徒、地域の方からパワーをもらうことができた。

私達も、音楽を使ったスタンプを行うという形で参加して、場を盛り上げようとしたものの、うまくいかない部分もあったと思う。もっと周りを巻き込んで、一緒に楽しめるように声掛けをするなどの工夫をすべきであった。特に、保護者の方や地域の方にも積極的に参加してもらえるように考えるべきであったと思った。

(英語教育専修 2回生 澤井 咲樹)

今回あすかばんど野外活動支援に参加させていただいて、子供達が様々な人と触れ合う機会が大切であること、皆で1つの活動をする楽しさなど、人との交歓について学ぶことができた。

今の子供達は人と交流する機会や、体を思いっきり動かして遊ぶことが少なくなっていると思う。そのような子供達が、音楽を通して人と繋がる、地域の人も巻き込んで沢山のひとと触れ合う様子を見ることが出来た。このような機会を作ったり、身近な地域での活動に参加したりすることで、子供達の経験や思い出を豊かにする手伝いができると思った。

(特別支援教育専修 2回生 神吉 優利奈)

今回の野外活動支援での活動を通して、スタンプでは、どのように取り組めば子供達を楽しませることが出来るかを意識し、子供達の視点に立って取り組むことが出来た。しかし、全員で空気を作れたわけではないため、次回はより広い視野を持ち状況に応じて柔軟な取り組み方をできるように意識しようと考えた。また、水鉄砲大会では、子ども達が精一杯楽しんでくれている姿を見つつ一緒に参加させていただいたことから、子ども達や地域の人々と心を通わせることの大切さを改めて学んだ。

(特別支援教育専修 1回生 田畑 朗)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

富雄南小学校 野活動支援 活動報告書

英語教育専修 1 回生 田中天央衣

1. 日時：2023 年 9 月 21 日（木）10 時 30 分～20 時 30 分
2. 場所：奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者：教育学専修 4 回生 木下結等
特別支援教育専修 3 回生 志原那歩
英語教育専修 2 回生 澤井咲樹
社会教育専修 2 回生 横井琴音
英語教育専修 1 回生 田中天央衣

4. 活動内容の概要

富雄南小学校の児童が行う、オリエンテーリング(ポイント立ち)・野外炊飯(カレー作り)・キャンドルファイヤーの支援を行った。

オリエンテーリングでは、センターの外での活動であった為、子供たちの安全を第1にメンバーで連携をとりながら行った。野外炊飯では、食材とかまどの2チームに分かれ、カレーを協力して作ることができた。火傷等の怪我なく終わることができた。天候の関係でキャンドルファイヤーになったが、室内でもキャンドルを囲みながら子供達と1つになって充実した時間を共有した。スタンプも大いに盛り上がり交流を深めた。

児童の状況を常に意識して把握し、広い視野を持ちながら連携を取り、主体的に行動することができた。

5. 参加学生の学び・感想

今回の野外活動では大きく2つのことについて学んだ。1つ目は野外炊飯のスキル、2つ目はサポートの重要性についてである。

まず、1つ目の野外炊飯に関して述べる。今回私は初めて野外炊飯でかまどの確認などを行った。不安な部分もあったが後輩や先生たちと確認していく中で自分が学んできた内容を実践で確認することが出来て自信がついた。今後の野外活動でもこのスキルを活かしていきたいと思う。

次に2つ目のサポートの重要性についてだが、野外活動では見えないところで色々なサポートがされている。オリエンテーリングでチェックポイントにたったり、キャンプファイヤー中に盛り上げたり、様々な見えないところでのサポートの1つ1つが野外活動を作っていると感じることが出来た。私自身4回生になりサポートの部分に力をいれつつこれからも頑張っていきたい。

(教育学専修4回生 木下結等)

今回の野外活動は初めての参加であったが、先輩後輩や先生方と協力して無事に終えることができた。当日は気温と湿度が高かったため、児童たちの様子を確認し、気になる児童には水分補給をするように声かけを行った。児童たちが常に安全に活動できるように視野を広く持つことが大切だと学んだ。野外炊飯でも、たくさんの班が同時に活動する中で進みが遅い班や役割分担通りに進められていない班に先生方や私たちがサポートに入ることで円滑に進めることが出来ていたと思う。

このように野外活動では、視野を広く持ち、必要なところに臨機応変にサポートに入ることが大切

なのだと感じた。また、児童が楽しく活動している様子を見たり、一緒にキャンドルファイヤーでスタンプをしたりすることがとても楽しかったのでこれからも積極的に野外活動支援に参加したいと思った。

(特別支援教育専修 3 回生 志原那歩)

今回の野外活動を通して、タイムスケジュール通りに進めるために臨機応変に行動することが大切だと学んだ。野外炊飯のとき、本来児童が行う部分を、時間の関係上、学生たちが行うという場面があった。私自身想定していなかった動きだったが、周りを見て行動することができた。児童たちも役割を分担し、時間を意識して行動している様子であった。次の機会では、この学びをより活かし、より学びを深めたいと思う。

(英語教育専修 2 回生 澤井咲樹)

今回の野外活動支援では、キャンプファイヤーにてスタンプを一つ担当させて頂き、やりきることが出来た。人前に立つことが苦手であったが、それがまた一つ克服できたのではないかと思う。また、悪天候のため、キャンドルファイヤーに変更されたが、滞りなく実施出来た。初めての体験で不安であったが、臨機応変に対応すること、連携をとることの大切さを改めて学ぶことが出来た。

(社会科教育専修 2 回生 横井琴音)

今回の野外活動では、初めて野外炊飯でかまどを担当した。不安もありながらも、先輩や先生、子供たちと一緒に無事成功させることが出来た。火の加減や出来上がりの具合などに注意しながら行い、大きな失敗なく終わることが出来た。この経験はこの先も行う野外活動にも繋がってくると思う。天候のためキャンドルファイヤーになったが、子供たちは全力で楽しんでいた。大盛り上がりで私たちも含め全員が1つになった瞬間であった。

(英語教育専修 1 回生 田中天央衣)



キャンドルファイヤーの様子

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動報告書】

飛鳥中学校野外活動支援 活動報告書

数学教育専修 1 回生 奥村 壮之佑

1. 実施日 2023 年 9 月 27 日 (水)

2. 場所 飛鳥中学校

3. 参加者 教育学専修 4 回生 木下 結等 教育学専修 4 回生 中家 麻弥
社会科教育専修 3 回生 東 晃太郎 国語教育専修 2 回生 吉岡 優来
数学教育専修 1 回生 奥村 壮之佑 英語教育専修 1 回生 田中 天央衣

4. 活動の概要

2023 年 9 月 27 日に飛鳥中学校にて、野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、スタントの補助とキャンプファイヤーの補助、野外活動のためのサポートなどである。

5. 参加者の学び・感想

今回の野外活動支援では主に 2 つのことを学んだ。1 つ目はファイヤーキーパーの難しさ、2 つ目は子どもたちのファイヤーに対する想いである。

1 つ目について、私自身今までファイヤーキーパーをしたことがなく、大変苦戦した。ファイヤーキーパーはキャンプファイヤーではあまりスポットが当たらない場所である。しかし、時間や風向きを見ながら火の大きさを調整するという重要なポジションでもある。そのため、今後ファイヤーキーパースキルを上達させたいと感じた。

次に 2 つ目について、今回のキャンプファイヤーは生徒達からやりたいということで始まったと聞いた。当日まで何度も練習を重ねて自分たちの全力を出し切った生徒達の顔は暗闇でもわかるほどのいい顔であった。キャンプファイヤーに対する想いがなければこのような顔にならなかったと思う。そのため、想いをもって活動することは生徒達の達成感につながるのではないかと学んだ。新型コロナウイルスでこのような活動制限されていたからこそ、今後もっと増えていって欲しいと感じた。

(教育学専修 4 回生 木下 結等)

今回の野外活動では、キャンプファイヤーの運営のお手伝いをさせていただき、生徒達を信じて見守ることの大切さを学んだ。プログラムを盛り上げようと声を掛けていたり、時間がなく変更されたプログラムに柔軟に対応していたり、生徒達の自分自身で考え行動する姿がたくさん見えた。生徒たちの力を信じて一歩引いて見守り、生徒達が活動にかける思いや願いをくみ取って共により良いものにしていこうとすることが、補助する立場として一番意識していかなければいけないことだと思った。次の活動では、盛り上げる、学生が考えて動くということよりも、まずはもっと生徒達にどんなキャンプファイヤーにしていきたいのか、どんな動きをしてほしいかなど生徒達の声に耳を傾けることを大切にしていきたい。

(教育学専修 4 回生 中家 麻弥)

飛鳥中学校では生徒、教員、保護者、地域の人々が協力し合って中学校を支えていることが分かった。片付けの時に教員、大学生に加えて数名の保護者の方が手伝ってくださったり、地域の人々がキャンプファイヤーを見に来られたりしていた。学校行事を多くの人が支えることの重要性を理解した。こういった人々のつながりは、まさに ESD の視点の連携性と育てたい ESD の資質・能力の協働的問題解決力に当てはまると考える。新たな気づきや交流が多くあった。

(社会科教育専修 3 回生 東 晃太郎)

今回の野外活動支援では、主体的に活動することの大切さを学んだ。今回のキャンプファイヤーは、飛鳥中学校の生徒会の生徒が主体となって準備・運営をしており、その中で私は助言をしたり、ファイヤーキーパーなどの支援をした。その支援をする中で、生徒会の生徒達が積極的に質問をしたり、スタンプも沢山練習したことが分かったりしたことが印象的であった。当日も全体を通し、良い活動となり、生徒達も達成感を大いに感じていたとうかがえた。やはり、主体的に「やろう」という意識の下活動することで、達成感を得ることができ、成長につながると考える。

(国語教育専修 2 回生 吉岡 優来)

今回の野外活動支援では、中学生から学ばせてもらったことが多くあった。特に、声だしについてだ。始まる前はマイクを使いたいと言っている生徒もいたが、始まってみるとマイクを使わなくても声がしっかりと全体に届いていた。おそらく、人前で声を出すのが苦手な生徒であると思われるが、それでも声が出せるように努力をしていたのだと思った。大勢の人前で声を届けるようにしようとする姿勢や覚悟、努力など見習わなければならないことがあると感じた。そのため、この活動に参加して、大変勉強になった。

(数学教育専修 1 回生 奥村 壮之佑)

今回の野活動支援では、キャンプファイヤーの支援を行った。中学生が主体となって企画・運営を行っていた。そばで見守り、声掛けを中心に私たちは活動した。生徒達は自分たちがしたいと思っていたことの実現に向け、殻を破って積極的に活動していた。大成功で終え、全員が輝いていた。何か達成したい目標があり、それを成し遂げられた時、人は喜びを感じて成長するということを学んだ。そのサポートをできて私も良い経験となった。

(英語教育専修 1 回生 田中 天央衣)



ファイヤー後の炎

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

都跡小学校野外活動支援 活動報告書

国語教育専修 2 回生 飯田 朱音

1. **実施日** 2023 年 9 月 28 日 (木)
2. **場所** 奈良市青少年野外活動センター (柳生)
3. **参加者** 国語教育専修 2 回生 飯田 朱音
国語教育専修 2 回生 吉岡優来
数学教育専修 1 回生 小田 彪雅
英語教育専修 1 回生 田中天央衣

4. 活動の概要

奈良市青少年野外活動センターにおいて、都跡小学校の野外活動の支援を行った。オリエンテーションではポイント立ちを行い、また野外炊飯やキャンプファイヤーなどを 1 日かけての支援であった。ポイントたちでは、ポイントごとで班を把握し、全班のおおよその位置情報を学生間で共有を行うなど工夫した。野外炊飯では、かまどと中に分かれ、役割を分担してそれぞれの班の支援を行った。キャンプファイヤーでは、子どもたちのゲームを一緒に楽しみ、盛り上げた。途中雨が降り出し、火がつかなくなることもあったが、ファイヤーキーパーが灯油をかけるなどして工夫し、キャンプファイヤーを継続することができた。

5. 参加学生の学び・感想

私が今回の野外活動支援で学んだことは、児童と教員の連携力である。子どもたちが先生の話すタイミングになると、児童達同士で声を掛け合い、先生方のお話を一度で聞きしっかりと行動していた。また、先生方が児童達と共に楽しんでいらっしゃる姿を見た。これらの姿から、日常からの教員と児童の関係性による協力体制が確立されており、今回の野外活動にも活かされているのではないかと感じた。

そうした日常的な相互の関係性があるため、学校以外の場でも連携が崩れることなく問題なく協働して野外活動支援を終えることができたと考える。

また今までの野外活動支援に比べ、飯盒への留意点を自分の中に整理して行動できたため、先生方のお声がけを待つことなく自主的に行動し、支援できたと感じる野外活動支援であった。

(国語教育専修 2 回生 飯田朱音)

今回の野外活動支援は、1 日を通しての活動であった。活動センター内や近隣の歩くオリエンテーション、野外炊飯、キャンプファイヤーだけでなく、シーツの準備などの活動もあった。その中で、児童達は、分からないことや困っていることがあれば、自分達自身で解決しようとしていたり、手助けしようとしていた。そのから、児童は野外活動をという特別な活動を通して、お互いに刺激を与えあいながら、自立しようとしていくのであると学んだ。

(国語教育専修 2 回生 吉岡優来)

今回の野外活動支援で学んだことは、先生の責任の重大さだ。私は、今回の野外活動支援が、私にとって初めての最初から1日目の最後まで支援する野外活動支援だったが、1日を通して、児童達は、私たち学生4人を「先生」と呼んで、頼ってくれた。それが嬉しくもあり、また責任を感じた。

今回は大変貴重な体験ができた野外活動支援だった。この経験を糧に、これからの野外活動支援に活かしたいと思う。

(数学教育専修 1回生 小田彪雅)

今回は私にとって5回目の野外活動支援であった。

今までの反省点を生かした活動ができたと思う。生徒についての現状把握や先生や学生との連携など、注意して問題なく活動できたと思う。野外炊飯では、調理を担当した。児童達は「これは危ない」とお互いに声掛けをしていた。調理の場面だけではなく、様々な場面で生徒たち同士の声掛けが盛んであった。これは、自分達の周りの状況を把握し、判断できているからこそ出来る行動だと思う。児童達から私たち学生も必要になってくるその力を改めて学ぶことが出来た。

(英語教育専修 1回生 田中天央衣)

【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

奈良市立東市小学校野外活動支援 活動報告書

特別支援教育専修 4 回生 山本留維

1. 実施日 2023 年 10 月 26 日（木）
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 教育学専修 4 回生 木下 結等 特別支援教育専修 4 回生 山本 留維
理科教育専修 4 回生 森田 望友 英語教育専修 4 回生 福西 隆生

4. 活動の概要

2023 年 10 月 26 日に奈良市青少年野外活動センターにて行われた、奈良市立東市小学校 5 年生の野外活動の支援のため、本学ユネスコクラブの学生が参加した。具体的には、オリエンテーリングや野外炊飯、キャンプファイヤーの補助、スタンプを実施した。

5. 参加学生の学び・感想

今回の野外活動支援で感じたことや考えたことは 2 つある。

1 つ目はトラブルが起きたときの対応である。野外炊飯の際に児童同士でトラブルが起きてしまった。その際うまく対処することが出来ず、野外活動という非日常的な場面だからこそいつもより一層気をつけて、考えながら行動する必要があると感じた。

2 つ目は子どもたちの可能性についてである。事前指導でスタンプを見せてもらった時、子どもたち自身はそこまで乗り気ではなかった。そのため当日までかなり心配していたが、本番が始まると、ほとんどの子どもたちが一生懸命自分の役割をこなしており、練習してきた成果が現れていた。改めて子どもたちの無限の可能性を感じることが出来た。
(教育学専修 4 回生 木下 結等)

今回の野外活動支援では、オリエンテーリングや自由時間に子どもたちとセンターや道に生えている植物やキノコ、虫などについて話すことができ、野外活動ならではの気づきや考えを持たせることができた。子どもたちは普段経験できないことを楽しんでいたように思う。反省点としては、一緒に参加した学生と活動開始前に慌てて話し合うことが多かった。私が野外活動支援に不慣れなため、すべきことや注意点を詳しく確認する必要があったのもあるが、全ての活動において、自分たちが何をしたらいいのか把握しきれていなかったことが、一番の原因だと思う。事前に把握すべきことを整理しなおして、野外活動支援に誰が参加しても十分に支援できるような体制を整えたい。

(特別支援教育専修 4 回生 山本 留維)

今回の野外活動支援の 1 日を通して、子どもたちの短期間での成長に驚いた。事前にスタンプを見せてもらった時、恥ずかしさが残っていたり、班の中でも分裂があったりしており、本番が不安になった。しかし、本番のスタンプではしっかりと皆が協力して楽しんでた。またピザ作りや野外炊飯も、少しトラブルがありながらも、無事に終わることが出来た。このクラスは、学校ではない自由な空間でも、

最終的にやりきることができるクラスだと感じた。この経験を学校生活にも活かして、立派な6年生に向けてのスタートを切って欲しいと感じた。
(理科教育専修 4 回生 森田 望友)

今回の良かった点と反省すべき点は大きく2つある。

良かったところは、子どもたちの成長についてだ。全4回に渡って事前指導を行ってきたが、最終回の指導でも未完成のグループが見られた。引率の先生方はもちろん、なにより子どもたちが不安がっているように思われた。しかし当日、全員が堂々と発表し、周囲もそれにのせられて大いに盛り上がることができた。

反省点としては自分の視野が狭くなっていたことだ。フィールドワークの際、班員とはぐれている子がいたにも関わらず、複数のグループが固まって行動していたため、人数確認が甘いまま行動させてしまった。自分の担当ポイントにおける役割にかまけ、全体のための引率がうまくできていなかったことが反省として挙げられる。
(英語教育専修 4 回生 福西 隆生)



図1 ピザづくりの様子

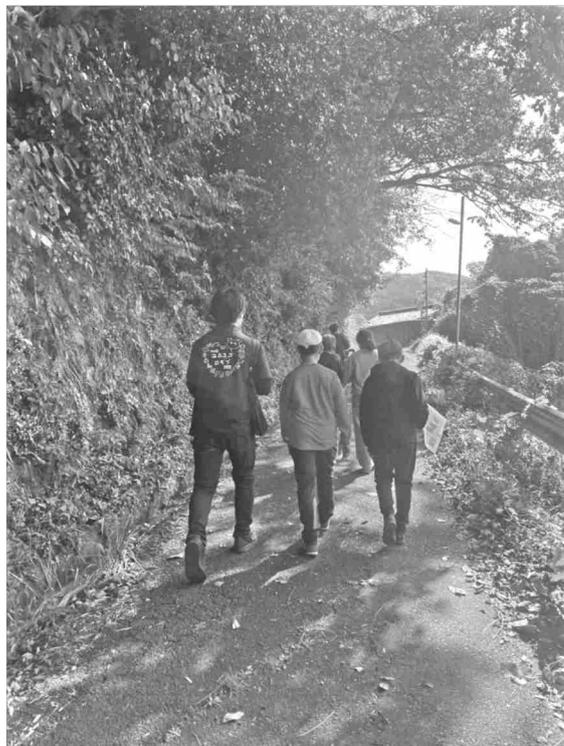


図2 オリエンテーリング中の様子

【近畿コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

くらしのブンカサイ in いこま 2023

書道教育専修 2 回生 神余 友唯

1. 日時：2023 年 11 月 5 日(日)
2. 場所：びっくり通り商店街、ベルテラスいこま 3 階ベルテラスステージ、他周辺施設
3. 参加者：社会科教育専修 4 回生 北野 結衣
特別支援教育専修 3 回生 志原 那歩
社会科教育専修 3 回生 山平 楓
美術教育専修 2 回生 東 瑞
書道教育専修 2 回生 神余 友唯
社会科教育専修 2 回生 木幡 美幸
国語科教育専修 2 回生 吉岡 優来
数学教育専修 1 回生 奥村 壮之佑
美術教育専修 1 回生 坂本 大奈

4. 活動内容の概要

くらしのブンカサイ in 生駒 2023 にユネスコクラブとしてブースを出したのと、奈良北高校の生徒と一緒に SDGs〇×クイズを行った。ブースでは、「生駒市をより良くするために」というテーマで来場者の方にアイデアや意見を書いてもらい、大きな木を完成させた。〇×クイズでは、会場の参加者の方たちと一緒に身の回りにある問題を SDGs の視点から考えていった。

幅広い年代の方たちと触れ合いながら、状況に応じて臨機応変に主体的に行動することが出来た。

5. 参加学生の学び・感想

来場された方の思いを葉っぱ型の紙に書いてもらい、それを木の模造紙に貼り付けてもらったのだが、私自身要望が多いと予想していたにもかかわらず、生駒の良いところを書かれる方が多かった。住み続けられるまちづくりにはなくてはならないという思いが強いのだと感じた。街のことを想い、考える機会は重要だとこの経験を通して実感した。

SDGs でいわれると考えにくいことも街単位で考えることで具体的になっていた。参加される方の気持ちを第一に、自分たちの伝えたい思いをのせて企画・運営することが大切だと学んだ。

(社会科教育専修 4 回生 北野 結衣)

今回は主に出展ブースを担当した。幅広い年齢の方が様々な視点から生駒市に対する願いや魅力に感じていることを書いていて勉強になった。大人の方が書いているものの中で特に、地域の住み心地に関するものや、こどもたちのために思って書かれたものが多くあり、次の世代や住み続けられる街づくりについて考えている市民の方が多くいると分かった。「くらし、ひと、しぜん」と観点を分けていたが重なる部分も多くあり、地域の諸課題に対して多角的なアプローチを行うことが重要だと感じた。

(特別支援教育専修 3回生 志原 那歩)

「SDGs」と聞くと17項目の目標を連想させるが、大まかに分けたり、今回のように「くらし」「ひと」「自然」など幅を利かせたものにしたりとすると、自分たちの地域をSDGs的な視点で気軽に見つめることができるということを学んだ。また、生駒市について考えてもらうとき、世代や立場によって魅力だと感じているところや求めていることが異なっていたことに気付いた。様々な視点から一つの物事を見てみるのが大切だと改めて学んだ。

(社会科教育専修 3回生 山平 楓)

生駒の方が伝統やスポーツを大切に思っているということ学んだ。イベントで用いた木の模造紙には多くの背渇に関する願いの付箋が貼られていた。その中に生駒名産の茶筌のもととなる破竹の保全やサッカースタジアムが欲しいといった願いが見られた。今回のイベントを契機に衰退する伝統や地元のスポーツに一層関心を寄せ、行動してくれるアクティブな市民の方であふれる生駒市になってほしいと願う。本イベントから受けたエネルギーと学びを次の企画にも生かしたい。

(美術教育専修 2回生 東 瑞)

高校生と一緒にSDGsに関する〇×クイズをした。高校生や子どもたちの会話から、生駒市の市民の方たちがSDGsに関する意識を生活していることが分かった。しかし実際には、身の回りには〇×クイズのように簡単に答えが出せる問題ばかりでは無い。そのような問題も街全体で考え、一人一人が意識して生活していくことがSDGsに繋がると改めて感じる事が出来た。

教師になった際には、SDGsに関して学校がどのような役割を果たすべきなのかを考えていきたい。

(書道教育専修 2回生 神余 友唯)

今回学んだことの一つ目は声のかけ方だ。本イベント来場者の年齢層は幅広かった。そのため、簡潔にブースを説明する力や年代に合わせた話し方は大切だと学んだ。

二つ目は、SDGsの触れ方についてだ。今の子ども達は、SDGsという名前は触れる機会が多いため知っていると思う。しかし、名前を知ることによって終わってはいけないと考える。知った上で実生活との関連や、自分にできることを考える機会が重要だと考えた。

(社会科教育専修 2回生 木幡 美幸)

「くらしのブンカサイ in いこま」という、生駒市の地域発展をSDGsの観点から図るといったイベントの趣旨のもと実行委員会、ブース出店、ステージ発表に関わった。その中で、SDGsの事例について〇×問題として考えていくステージ発表を高校生と合同で行ったことが印象に残っている。SDGsの事例を挙げ、その事例の行動に賛成であるか、反対であるか、〇×で問いかけた。高校生は、ステージ発表のことを意識しながら、SDGsのことを分かりやすく伝えようと考えており、その姿勢に学ぶものがあった。

(国語教育専修 2回生 吉岡 優来)

今回の事で学んだ事は、生駒市に関する事で書いてくださった内容全てにおいて肯定している物ばかりではなかったが、改善してほしい事については具体的な内容や考えが書かれており、市全体で市の事を考えているということだ。また SDGs に関しては生駒市に住んでいる人が SDGs そのものを理解している訳ではなかったが、住みやすいまちづくりのために考えていることが SDGs に繋がっているため、学ぶべき点が多くあった。

(数学教育専修 1回生 奥村 壮之佑)

くらしのブンカサイでは主にステージでの発表を担当した。高校生と共に行う分責任を感じることもあった。さらに子供たちの参加によって成り立つ発表だったため子供たちがどのくらい関心を持ってくれるかが未知数だったことも不安だった。

本番は不安が嘘だったかのように大成功だった。高校生とも息の合ったパフォーマンスができたし子供たちも参加してくれた。

今回驚いたことは子供たちが SDGs について良く知ってくれていることだった。難しい内容かもしれないと思ったが、皆しっかり聞いてくれたり積極的に意見を出してくれたりした。出演者や観客含む皆の行動によって成功したと言っても過言ではないだろう。

(美術教育専修 1回生 坂本 大奈)



図1 来場者にブース内容を説明している様子

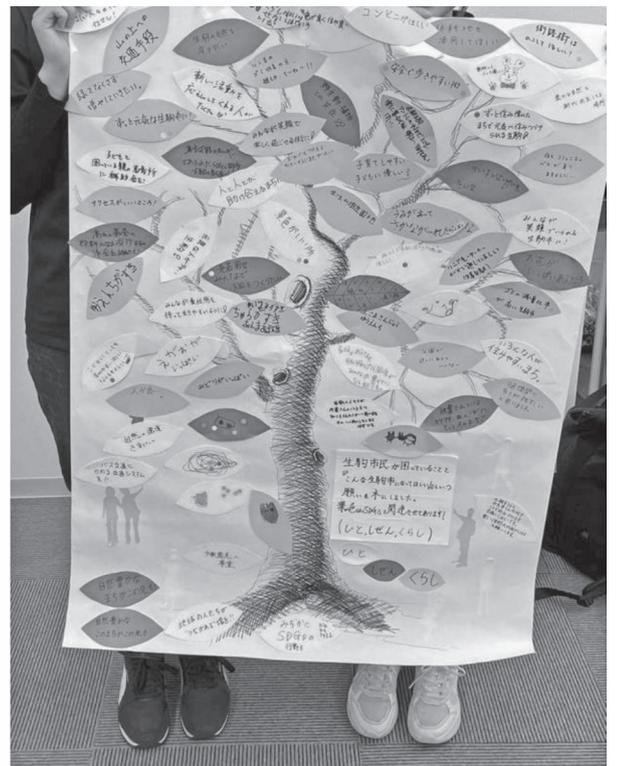


図2 ブース出展で来場者と作成したもの

おわりに

奈良教育大学ESD・SDGsセンター長 中澤静男



昨年度設立されたESD・SDGsセンターにとって、今年度は大きな飛躍の年であったと思います。昨年度は、キックオフイベントの開催や全国のESDコンソーシアム代表者が一堂に会する会議を開催し、本学のESDの第一歩を踏み出した年となりました。そして今年度は、ESDに関する国際シンポジウムを開催するなど、大きな飛躍をとげた一年となりました。

2月17日に開催した国際シンポジウムには、パリのユネスコ本部より諸橋淳ESD課長においでいただき、「ESD・その潮流と課題、そして、教育変革の機会」と題した基調講演をいただいた他、ユネスコ日本代政府表部一等

書記官やユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）議長、韓国ユネスコ国内委員会国際部長、ウズベキスタン共和国大使、そして、グラッドニー牧場長から持続可能な社会の創造に向けた先進的なESDの取組や方向性についての紹介、タイやインドネシア、韓国から各国の実情や多様なESDの実践が紹介されました。また、本学のESDに関する教員養成・教員研修の紹介の他、ユネスコクラブによるユースのESD活動も発信することができました。会場およびオンラインでそれぞれ100名超の参加者があり、充実したシンポジウムだったと思います。

国際シンポジウムという外向けのイベントと同時に、今年度も地道にESDティーチャープログラムに取り組みました。鹿児島県屋久島町、熊本県菊池市、熊本市立天明中学校、福岡市、松山市、白浜町、長浜市、大津市、生駒市立生駒小学校、奈良教育大学附属幼稚園、小学校、中学校の全12会場で、2回のオンライン研修と現地に出向いての3回の研修を行いました。どの会場でも熱気にあふれた研修会となり、その結果、今年度は138名のESDティーチャー、24名のESDマスター、10名のESDスペシャリストを認証することができました。平成28年度からの実績で、475名のESDティーチャー、78名のESDマスター、28名のESDスペシャリストを輩出したこととなります。また、1月6・7日には、特に素晴らしい授業実践をされた先生方を全国より招聘し、非常にレベルの高い実践交流ができました。この成果発表会・実践交流会では、NPO法人共存の森ネットワーク理事長の澁澤寿一氏による「持続可能な未来のために一人と自然との共生とは一」と題した講演会の他、ESDに日ごろから取り組んでいる子どもたちによるESD子どもフォーラムも開催できました。その中の子どもの発言で1つ、とても印象に残った言葉がありました。「あなたの地域で一番すてきだと思える場所を紹介してください」という問いかけに対して、「自分の家です」という答えが返ってきました。

これって、素晴らしいことだと思いませんか。

今年度、ESD・SDGsセンターの事業にかかわってくださった皆さん、ユネスコクラブを中心とする学生の皆さん、本当にありがとうございました。

来年度も、新たな飛躍の年にしていきましょう。

近畿 ESD コンソーシアム規約

平成29年7月8日
制
令和5年11月1日
改 訂

第1章 総則

【名称】

第1条 この団体は、近畿 ESD コンソーシアム（英語名：ESD Consortium, Kinki Region）という。

【事務局】

第2条 この団体の事務局を奈良教育大学 ESD・SDGs センターに置く。

【目的】

第3条 この団体は、様々な ESD 関係者が協力して近畿圏を中心に ESD を推進することを目的とする。

【活動】

第4条 上記3の目的を達成するため、この団体は以下の活動を行う。

- 一 ユネスコスクールをはじめとする教育機関での ESD の推進と国内外の ESD 推進校との交流促進
- 二 公民館、図書館をはじめとする社会教育施設、青少年教育施設を通じた社会教育における ESD の推進
- 三 ウェブサイトや成果報告会等を通じた ESD 関連情報の共有
- 四 ESD に関するマルチステークホルダーの対話の場の構築
- 五 企業、NGO を含む様々なステークホルダー間の協働の機会創出
- 六 その他団体の目的のために有益と考えられる活動

第2章 会員

【会員種別】

第5条 この団体の会員は、この団体の目的に賛同して入会する団体及び個人とする。

2 この会員のうち、奈良教育大学を代表団体とする。

【入会】

第6条 会員として入会しようとするものは、別に定める方法により、入会申込書を事務局に提出することにより申し込むものとする。

2 入会は、運営委員会において承認する。運営委員会は、前項の申し込みがあったとき、正当な理由がない限り、入会を認めなければならない。

【会費】

第7条 この団体の会費は、当面、徴収しないものとする。

【退会】

第8条 会員は、別に定める退会届を事務局に提出して、任意に退会することができる

第3章 役員

【種別及び定数】

第9条 この団体に、次の役員を置く。

- 一 会長 1名
- 二 副会長 1名以上3名以内
- 三 運営委員 10名程度

【選任】

第10条 会長は、この団体を代表し、その業務を総理する。

- 2 副会長は運営委員の中から会長が選任する。
- 3 運営委員は、会長が指名する。

【職務】

第11条 会長は、この団体を代表し、その業務を総理する。

- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。
- 3 運営委員は、運営委員会を構成し、この団体の業務を執行する。

【任期等】

第12条 役員任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

第4章 会議

【会議の種別】

第13条 この団体の会議は、総会及び運営委員会とする。

【総会】

第14条 総会は、会員をもって構成する。

2 総会は、通常総会及び臨時総会とする。

【総会の権能】

第15条 総会は、以下の事項について検討し、議決する。

- 一 規約の決定及び変更
- 二 事業計画の承認
- 三 事業報告の承認
- 四 役員承認
- 五 その他コンソーシアムの運営に関する重要事項

【総会の開催】

第16条 通常総会は、毎年1回開催する。

2 臨時総会は、次に掲げる場合に開催する。

- 一 会長が必要と認め、招集の請求をしたとき。

【総会の招集】

第17条 総会は、会長が招集する。

2 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面または電子メールにより、開催の日の少なくとも5日前までに会員に通知し、あるいはウェブサイト上で公表しなければならない。

【総会の議長】

第18条 総会の議長は、その総会に出席した会員の中から選出する。

【総会の議決】

第19条 総会の議事は、別段の定めがある場合を除き、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

【運営委員会】

第20条 運営委員会は、運営委員をもって構成する。

2 運営委員会に運営委員長1名及び副運営委員長1名を置く。

【運営委員会の権能】

第21条 運営委員会は、次の事項について検討し、議決する。

- 一 事業計画の立案と変更
- 二 事務局の運営に関する事項
- 三 総会の議決した事項の執行に関する事項
- 四 総会に付議すべき事項
- 五 その他総会の議決を要しない業務の執行に関する事項

【運営委員会の開催】

第22条 運営委員会は、会長または運営委員長が必要と認めた場合に開催する。

第5章 ESD 推進コーディネーター

【ESD 推進コーディネーターの配置】

第23条 この団体に、ESD 推進コーディネーター若干名を置く。

- 2 ESD 推進コーディネーターは、この団体の目的に照らし、ESD の推進を支援する。
- 3 ESD 推進コーディネーターは、ESD 活動に習熟した識者の中から、会長が指名する。
- 4 ESD 推進コーディネーターの任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

第6章 雑則

【細則】

第24条 この規約の施行について必要な細則は、運営委員会の議を経て、会長が定める。

令和5年度 近畿ESDコンソーシアム活動実施報告書

令和6年3月31日

国立大学法人奈良国立大学機構奈良教育大学

ESD・SDGsセンター（近畿ESDコンソーシアム事務局）

〒630-8528 奈良市高畑町

Tel 0742-27-9367・Fax 0742-27-9147（教育研究支援課）